
銀魂王 - デュエルモンスターズ SD

黒神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂王・デュエルモンスターズ SD

【Nコード】

N1127Y

【作者名】

黒神

【あらすじ】

侍の国、そう呼ばれたのは20年前である。

天人と呼ばれる異星人達が襲来し、まもなく地球人と天人との間に十数年にも及ぶ攘夷戦争が勃発。

だが天人の絶大な力を見て弱腰になっていた幕府は、天人の侵略があつさりと受け入れ開国してしまい、攘夷志士達は弾圧の対象となつて、他の侍達もその多くが廃刀令により刀を失い、戦う氣力を失っていた。

そんな時代に万事屋のオーナーにしてかつては攘夷戦争で数多くの天人を倒していき白夜叉と恐れられた伝説の武神 坂田銀時。

愉快的仲間の地味でアイドルオタクのツッコミだけ一流の志村新八、宇宙最強生物、夜兔族の1人である神楽を初めとして、そんな時代でも豊かに暮らしていた。

そんなある日、江戸一番の発明家と呼ばれた源外が、新作発明機で思わぬ3人の人物を異世界からこの世界に呼び出した。

そう、遊戯王シリーズでも歴代の主人公である武藤遊戯、遊城十代、不動遊星の3人である。

彼等は漫画とアニメと言う架空の世界とは違い、実際に存在する異世界から飛ばされた同じ時代に生きるデュエリストである。

今、世界でも大ブームである『デュエルモンスターズ』で、我等が英雄、万事屋銀さんが遊戯達と共に闇にしそむ強大な敵に立ち向かう。

侍とデュエリストの共存の物語、ここに開幕！！

ID - 1 新しい出会いってのは突然やってくる（前書き）

と言う訳で、何か白神さんの質問を見たら急に書きたくになりました。

銀魂と遊戯王の共存小説、是非とも見てください。

銀時
デュエル
「決闘開始!!」

ID - 1 新しい出会いってのは突然やってくる

侍の国．．．．．そう呼ばれていたのは当の昔の話であった。

今は宇宙から天人あまんと呼ばれる者達が地球人と共存しており、文化も随分と変わり果てた時代である。

そんな時代の中、江戸の中にかぶき町という場所では『万屋銀ちゃん』と看板が書かれていた建物があった。

『万屋銀ちゃん』．．．それは依頼と料金を受ければなんでもやる仕事である。

しかし依頼は滅多に無く、報酬もあまり手に入らない為、状況は普段最悪である。

食事すらまともに出来ない位営業是最悪である。

そんなある日．．．．．

「んで、話つてのは何だよ爺さん」

とめんどくさそうに言いだすのは我等が主人公。

彼の名は坂田さかた 銀時ぎんとき、『万屋銀ちゃん』のオーナーである。

好物は甘いものであり、血糖値が糖尿病寸前の領域に達しているほどの甘党である。

彼は今、江戸一番の発明家である源外の所にいた。

「いやあ、何か新発明を完成してな……漫画に出てくるキャラクタ―をこの世界に呼び出す『伽羅来来』^{ガラクタ}を発明したんじゃが、何か失敗しててのう…壊れてしもうつたんじゃわい

「はあ!？」

まさか漫画キャラを実際の人物のようにこの世界に転生させる装置を開発した事に呆れる銀時。
そして源外の依頼は嫌と知る。

「要するに、その発明した機械カラクリでそいつ等の面倒を見ろって訳か？」
「そう言うことじゃ」

「ふざけんじゃねえよ!! 厄介ごとを俺に押し付けてるのと一緒じゃねえかあ!!」

コレには流石の銀時も怒鳴りだす。
如何に万事屋と言っても何でもやられ放題ではない。

「この依頼を受けてくれるんなら、今までの借金はこちらにしてやつても良いぞ？」

「ぐう……しゃあねえな!! んで何処のどいつだ、爺さんにこの世界に飛ばされた被害者は？」

もはやその人物を被害者としてみる銀時。
すると…

「ぼ…僕達ですけど…」
「ん？」

と、銀時は声が聞こえた方向を振り向く。
そこには3人がいて、ありえない組み合わせが出ていた。

左から頭が尖がっていて学校の制服を着ている少年、赤い制服を着

ていて明るそうな生活をしている少年、そして蟹の様な髪型をしていて2人より年上の青年。

*
*
*

と、遊戯王歴代主人公シリーズのメンバーは万事屋の一員として挨拶をする。

ありえないばかりに青ざめて叫びだす万事屋のツツコミ担当、江戸一番のツツコミ使いの志村新八めがねが叫びだす。

戦闘力は一般的であり、個性は地味で哀れなキャラであり、特に口リコンアイドルオタク。

しく説明くださいよ銀さん!!」

「だからよお、源外の爺さんが変な発明をしたせいでこいつ等この世界に飛ばされた被害者なんだし…察してやれよ」

「被害者なの!? 異世界から人物じゃなく被害者扱い!?!」

と銀時の被害者扱いに青ざめてツツコむ遊戯。

「まあしょうがないさ…俺達、源外って言う爺さんが発明した機械のせいで飛ばされたもんだしな」

「だから銀時さんから見ても、俺達は異世界に飛ばされたから被害者である事は否定できない」

十代と遊星がそう言うのと、遊戯も納得する。

「じゃあお前等全員、私の部下アルからビシビシ鍛えてやるから覚悟するヨロシ」

「神楽ちゃん、いきなり遊戯さん達に失礼でしょうが!!」

と自信持って言いだすチャイナドレスの少女。

彼女の名は神楽^{かくら}。

宇宙三大傭兵種族の一角『夜兎族^{やと}』の1人であり人間離れをした怪力と身体能力の持ち主である。

見た目は可愛いらしい女の子だが、毒舌で大食いなのが玉に瑕である。

あいも変わらず毒舌言葉に新八は青ざめてツツコム。

「…ところで銀時、あの犬ってスゲーデケエなあ」

と十代が驚いて言いだし指を指すと、そこには白い巨大犬がいた。神楽のペットの定春である。

遊戯も遊星も驚き慢心であった。

「す…凄く大きい犬だね。これ、触っても大丈夫かなア」

「大丈夫アルよ、ちゃんとしつけしてアルから触っても大丈夫アル」

と神楽はニコツと笑って言いだす。

すると遊戯は勇気を持ってその犬に近づく。

「こ…こんにちは定春君…ほ…僕は武藤遊…」

「ワン！」

パク！

「ぎ？」

と、突如定春が遊戯の頭を噛みだした。

『『全然しつけになってないんですけどオオオオオ！！』』

「定春、吐くアル！！勝手に人の頭を噛んじゃ駄目アルヨ！！」

十代と遊星も青ざめて叫びだし、神楽は定春にしつけをする。

定春が口から遊戯を吐くと、遊戯の顔中は唾だらけになって頭から血が流れて白眼となっている。

「……銀さん、何か遊戯さんも十代さんも遊星さんも、歴代主人公だから生きている時代が違うと思います……なのになんで当たり前のよう一緒にいるんですか？」

「実はなあ、源外の爺さんから聞くと…あの3人はアニメや漫画の側じゃなくて、実際に存在する異世界から同じ時代で生きている人物だそうだぜ？」

「何ですかそれ？てか異世界存在してたんですか！！」

と小声で話をする銀時と新八。

源外の話から聞けば、『伽羅来^{きやろこいこい}』は漫画の世界からその人物をこの世界に呼び出す機械^{からくり}ではなくて漫画に出てくる人物と同一人物を異世界からこの世界に飛ばす異世界転送装置だったようだ。

しかも壊れてしまい、開発するのに相当な時間はかかったので直すには時間がかかる。

「まあ、幸い江戸中でも最近デュエルモンスターズは流行っているし、遊戯さん達もこの世界で楽しく生きてくれますしね」

「キャラ崩壊の責任は背負わなきゃな」

「止めてくださいよ銀さん、そんな事すれば遊戯王シリーズのバランスが壊れてしまいますよ」

「じゃあねえだろ？この小説は銀魂と遊戯王のクロスオーバーらしいし、もう誰かがキャラ崩壊してるかもしれねえからよお」

「不吉な事いうなああああああ！！」

と、銀時と新八が言い争っている。

神楽も定春の事を遊戯、十代、遊星に話をしていて何やかんやで賑やかである。

そんな中…

「誤用改めである、真撰組だあ！！」

と、突如1人の人物が万事屋に現れた。

黒い服を着た短い黒髪、刀を左脇に身に付けている男が現れた。

彼の名は土方十四郎^{ひしかたとしろう}、真選組の副長である。

真選組のナンバー2であり、周囲からは『鬼の副長』と呼ばれている。

万屋の銀時と似ており、彼とは対照的に瞳孔は開き気味である。

「何だ何だ、いきなりノックもせずに勝手に家に潜入ですかこの野郎？」

「うつせえ！！てめエが突然怪しい人物を連れて来ているって言うから確かめに来たんだ……て何で遊戯王シリーズに出てくる主人公達がここにいるんだ？」

「なり行きで」

「なり行きって何だよ！！全然わかんねえよ！！」

あいも変わらない銀時と土方の仲の悪さ。

不思議そうにと遊星が新八に聞きだす。

「新八、誰何だあの人？」

「ああ、あの人はこの世界の真戦組と言う警察の副長でもある土方十四郎って人なんです」

「警察！？…まあ人は外見では判断できないと言うけどなあ」

土方が警察である事に意外そうに驚く十代。

すると、神楽が意外そうに土方の左腕に装着しているデュエルディスクを不思議そうに見る。

「マヨラー、お前なんでデュエルディスクを付けているアルか？お前の決闘者アルカ？」
デュエリスト

「ん…ああこれかあ……以前、ある事件で攘夷浪士共をとつ捕まえた時に所有している物の中にデュエルモンスターのカードがあったな……」

どうやら一応、調べたから偶然にも持っているだけだと新八達は思った。

しかし、土方の答えは予想外であった。

「そいつを偶然にも俺が預かって調べた所……はまってしまった訳だ」

「はまった！？あんた真撰組の鬼副長でしたよね！？カードゲームに興味なさそうな気がしましたけど……！」

「うつせえなメガネ！！はまったもんはしょうがねえだろうが……！」

と、神楽の質問に答えた後にすぐに新八の意外そうな驚きに思わずツツコム土方。

「だから言つたら、人は見かけによらねえって」

と十代が新八に言いだす。

「真撰組の鬼の副長とあるう者が……他人から奪った物に興味心身とは堕ちるところも堕ちたもんだなあ」

「言つてろ……それにこのデュエルディスクにセットされているデッキはそいつのデッキじゃねえ。俺自身が集めた真撰組デッキだ……最も万事屋ごときに縁がねえ話だがな」

と挑発するような言い返しをする土方。

それに対して銀時は……

「なんだと？じゃあ俺は決闘者としての素質はてめエ以下って訳なのか……！」

「……俺はそう言う風に言っただ、猿でも分かる事だろ？」

ブチィ……！！

「上等だこるああああ！！！！だったらこいつでテメエをぶちのめしてやるよオ！！」

と銀時は机の箱から、デッキ入りケースを取り出して土方に向ける。

「遊戯、デュエルディスクを貸せあ！！」

「は……はいいい！！」

遊戯は思わずデュエルディスクを外して、銀時に投げ渡す。

そして銀時はデュエルディスクを左腕にセットして、そのデッキをデュエルディスクにセットする。

「面白エ、今度はカードで喧嘩って訳か……ちようど良い」

土方はにやりと笑ってヤル気満々をだす。

「てめエには山のように借りがある……この決闘^{デュエル}で全てを返してやるぜ」

「ほざいてろ、てめエ何か楽勝に勝ってやるからなあ！」

まさに犬猿の仲の対決。

子供顔負けの大人気ない馬鹿決闘者^{デュエリスト}2人が激突する。

「ふ……二人とも、何か怖い」

「……ひょっとして、あの2人は仲が悪いんですか？」

遊戯も少し怖がって、遊星は不思議そうに新八に質問する。

「ええ、あの2人は会う度に大人気ない理由でぶつかり合っんですよ……しかも雰囲気一緒に仲が悪いのも当然だしね」

「簡単に言えばあの2人は馬鹿ネ」

呆れて言い出す新八と神楽。

銀時がデュエルモンスターのカードを持ってた事にはまずツッコまずに新八は2人がまた大人気ない喧嘩を止める気にもならなかった。

「何か面白そうな決闘^{デュエル}が見られそうでワクワクするぜ」

と無邪気に笑い出す十代。

だが新八達は、2人の予想外の戦いに驚きだす事にはこの時まだ知らなかった。

銀魂と遊戯王の共存。

侍の魂を持つ男、坂田銀時のデュエリストとしての物語、ここに開幕する。

ID-1 新しい出会ってのは突然やってくる（後書き）

黒神

「と言う訳で銀魂と遊戯王のコラボ小説の始まりです」

銀時

「つつか、お前他の小説は書かないんじゃないのか？」

黒神

「書きたくなっただからしょうがないじゃないですか」

銀時

「あ……そ、」

黒神

「なお、銀さんもマヨラーも使用するデッキはイメージが違いますので注目して待ってください」

前回のあらすじ

源外の新発明した機械からくりにより、何と異世界から武藤遊戯、遊城十代、不動遊星など3人の遊戯王シリーズ主人公達がかぶき町にやってきた。

しかも戻る方法が今の所無い為、しばらく万事屋の新社員として居候させる事にした。

さらに驚くべき事に、この3人はアニメも漫画の人物でもなく、実際に存在する似たような世界から飛ばされた上に同じ時代に生きている。

間違いなく異世界はアニメと漫画のストーリーとは大違いになっている。

とはともあれ坂田銀時はその3人を志村新八、神楽、定春にも紹介する中で、突如現れた真撰組の鬼の副長であり銀時の犬猿の仲とも言える仲がすごく悪い男、土方十四郎が現れた。

彼はとある事件で攘夷浪士から取り上げた今大ブームで江戸はもちらん世界中ではまっているカードゲーム『デュエルモンスターズ』にメツチャはまり、あげくにデッキも作り出した。

それを気に彼は銀時を見下した態度で挑発し、怒り出した銀時もデッキを取り出して彼に決闘デュエルを申し込むのであった。

後にコレが、坂田銀時の決闘者覚醒のきっかけとなり彼を中心とした決闘ストーリーが始まろうとする事はこの時、誰も知る予知もな

か
っ
た。
。

ID - 2 遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500

「……で、何で私達まで見なきゃいけないのさ」

とタバコをくわえて呆れて言いだす老婆。

この方こそ万事屋の1階にあるスナックのママで万事屋の大家。かぶき町四天王の1人であるお登勢。

囲からは『女帝お登勢』という異名で通っている。

『お登勢』という名は源氏名であり、本名は寺田綾乃^{てらだ あやの}という。

「馬鹿共ノ喧嘩ヲ見テイルホド、私達ハ暇ジャアリマセン」

呆れて言いだす猫耳老婆、スナックお登勢の従業員であるキャサリン。

出稼ぎが目的で地球にやってきた天人でかつては『鍵っ娘キャサリン』の異名をもつ、窃盗団『キャッツパンチ』の一員でもある。

その頃の腕は衰えておらず、表向きは真面目な従業員のフリをしてスナックお登勢の金を強奪した事があるが、銀時達の活躍で御用となる。

釈放された後は改心し、再びスナックお登勢で働いている。

お登勢の事を尊敬しているが、性格は悪でメツチャ最悪である。

「しかしデュエルモンスターズが世界中で大ブームしているとはいえ、まさか銀時様も土方様もカードを持っていたとはたまも予想外でした。コレは新たなデータが必要ですね」

と分析を解説するように言いだす美少女。

彼女はたま。

正式名称は芙蓉伊・零^{ふようい ぜろ}號試作型。

林流山が病弱で孤独だった娘・芙蓉の為に造ったアンドロイドだが、今ではスナックお登勢の従業員でもあり銀時達の仲間の1人。

「いやあ、2人がどうしても広い場所で決闘デュエルしたいってので場所が無くて…」

「そこでこの場所でデュエルすることにしたアル…まったくあの2人の大人気なさは相変わらずネ」

苦笑して言いだす新八と呆れる神楽。

だが内心では2人がどんな決闘をするのか楽しみで仕方が無かった。

「にしたって、まさか銀時がカードゲームをするとは以外だネエ…それ買っぐらいの金があるんなら家賃払えっての」

と意外そうに言いだすお登勢。

彼女から見ても、銀時はカードゲームには興味ないと思えたからだ。

「うわあ、スゲエ楽しみイ!!」

「僕も興味あるな…この世界のデュエリスト達の実力がどれだけあるのか」

異世界から来た遊戯王シリーズの主人公の十代と遊戯も興味津々。

遊星はだんまりだが、その眼は2人の実力を真剣に測ろうとする眼である。

一方の銀時と土方はにらみ合っていて顔中に血管が浮かべている。

銀時は先ほどの土方の憎たらしい挑発に怒り出していて、土方はメツチャ銀時が気に入らない様子である。

「ひーじかゝた君、俺を怒らせるからには相当なまでに恥をかく覚悟は出来てるんだろっなあ！」

と血管を浮かべて笑顔で言いだす銀時。

「そりゃこつちの台詞だ…ここでめエとは決着をつけてやるよ！」

「舐めた真似言ってるじゃねえ！！幕府側だからっていい気になってんのも体外にするんだな！！」

「幕府に逆らうってのか…だったらテメエをさつさと倒して切腹させてやりや！！」

「ああ！！切腹するのも間違いだろうがよお！？」

「もう良いからさつさと始めろよ！！」

子供並の口喧嘩に顔中に血管を浮かべて怒鳴る新八。

「お…大人気ない…」

「大人気ねえな」

「お…大人気ないよ」

と遊星、十代、遊戯の3人も冷や汗かいて呆れて言いだす。
3人の言葉に新八達は頷く。

「…それじゃ、かぶき町決闘対決、開始デュエルイイイイ！！」

お登勢が叫びだして決闘開始宣言を言いだす。デュエル

そしてお互いにデッキからカードを5枚ドロ―して、決闘開始宣言をする。

『デュエル
決闘！！』

銀時 LP 8000 手札5枚

土方 LP 8000 手札5枚

「先行はくれてやるから、来やがれマヨラー！！」

「上等だ、行くぜ万事屋ぁ！！ 俺のターン、ドロー！！」

土方はデッキからカードをドローし、ドローしたカードをすぐさま召喚する。

「手札を1枚墓地に送って『THE トリック』を特殊召喚！！」

すぐさま手札を墓地に送り、そのまま1体の特殊な魔術師を召喚する。

顔に？のマークがついていて、衣装が変わっている。

攻撃力は2000でレベル5のモンスターがいきなり現れた。

「ちい…通常、レベル5のモンスターは1体のリリースが無きゃ召喚できネエけど…すぐさま召喚しちまった訳か」

「それだけじゃねえ…俺は墓地に送った『墓標の魔札』の効果により、デッキから魔法カード、または罠カード1枚を選択してセットする事ができる」

土方はデッキからカード1枚を選択して決闘盤にセットする。
デュエルディスク
しかもそれだけじゃない。

「チューナーモンスター、『ナイトエンドソーサラー』を召喚！」

さらに新たな魔術師を召喚する。

両手に鎌を持っていて、周りに蝙蝠が飛んでいる闇の魔術少年。

「チューナー、まさかシンクロ召喚!?」

新八は土方がシンクロ召喚してくることに注目する。

「レベル5の『THE トリック』にレベル2の『ナイトエンドソーサラー』をチューニング!!」

と『ナイトエンドソーサラー』は無数の蝙蝠に体中包まれて2つの輪となって『THE トリック』を包み込むと、『THE トリック』は5つの星と化する。

「魔法と騎士の魂の共存、聖なる魔法で魔を滅せよ! シンクロ召喚!! 誇り高き光『アーカナイト・マジシャン』!!」

光の柱が現れ、その中から1体の魔術師が現れた。

魔術衣装は何やら騎士の様なイメージで、杖も特殊な輝きを放つ宝玉を放つ。

かなり強そうだが、肝心な攻撃力は400とかなり低め。

「何だ何だ? レベル7の上级モンスターを召喚した割には攻撃力400って、全然大した事ネエな!」
「て言いてえがそうじゃなさそうだな」

「ばっきやる! そんなの当たり前だ!!」
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ置き、こ

のカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、このカードの攻撃力は1000ポイントアップする!!」

「何い!?!」

「てことは、今あのモンスターに乗る魔力カウンターは2つだから!?!」

「攻撃力は2000ポイントアップするネ!?!」

アーカナイト・マジシャン ATK400 2400

いきなりの上級モンスターの召喚に驚く新八と神楽。
ちなみに彼等もデュエルモンスターのカード知識は多少ある。

「だが先行の1ターン目は攻撃できねえ…俺はカードを1枚セツトしてターンエンド」(手札2枚)

土方はターンを終了する。

いきなりの上級モンスターの召喚には銀時も苦戦するが…

「へ、いきなり上級モンスターを召喚したって全然意味ねえけどなあ…俺のターン、ドロー!?!」

銀時も一気にカードをドローする。

新八達は銀時が一体どんなカードを使うのか来たいしまくりである。

「手札より永続魔法『カード・リミットブレイク』を発動。自分フィールド上にレベル5以上のモンスターが特殊召喚される毎に、デッキからカードを1枚ドローする」

「なるほど、上級モンスターには上級モンスターで対抗する訳だな」

遊星は銀時が上級モンスターを召喚する事を確信する。

「さらに、手札より魔法カード『飛龍転生』を発動！ 相手にデッキからカードを2枚ドローさせる代わりにデッキから融合を可能にさせて、エクストラデッキからレベル8以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する」

「ちい、デメエも速効召喚か！！」

舌打ちしながら、土方はデッキからカードを2枚ドローする。

「行くぜ…デッキの『ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者』と『神竜・ラグナロク』を融合！！」

すると、突如銀時のフィールド上に現れた竜を支配する魔術士と東洋の神竜が現れ、時空の渦に飲み込まれて融合する。

「来い、『竜魔人・キング・ドラグーン』！！」

銀時が叫びだすと、フィールド上に1体のドラゴンが現れる。

上半身は人間で下半身は竜、そして右手に『ドラゴンを呼ぶ笛』を握っている。

攻撃力は『アーカーナイトマジシャン』と互角であるが、『キング・ドラグーン』には特殊な効果がる。

「『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカードを1枚ドロー！それで『キングドラグーン』の効果で、手札からドラゴン族モンスターを特殊召喚するぜ！！来い、『タイラント・ドラゴン』！！」

とフィールド上に現れたのは暴君の巨竜。

レベル8で攻撃力2900とかなり協力である。

「凄い、銀さんの場に一気に上級モンスターが2体も召喚した!!」

「凄クネエ？アホノ坂田サン飛バシマクツテネエ？」

驚きを隠しきれない新八とキャサリン。

「そんで『カード・リミットブレイク』の効果で1枚ドロ。さらに魔法カード『爆裂龍霸弾』を発動!!自分の場にレベル7以上のドラゴン族モンスターが存在する場合のみ発動可能なカード、相手モンスターを全て破壊するぜ!!」

「何イ!!」

すると『タイラント・ドラゴン』が口から灼熱の炎を収束して徐々に貯めている。

このまま土方に相当な大ダメージを与えさせるつもりである。

「デメエの場をがら空きするぜ!!」

「そうは行くか!!畏カード『バスターモード』発動!!」

すると、『アーカナイト・マジシャン』は大爆発する。

突如の大爆発に驚きだす銀時達。

そして、その爆風の中から『アーカナイト・マジシャン』が現れた。しかしその『アーカナイト・マジシャン』は何やらいつもの雰囲気と違っていた。

オレンジと青の印象が高い魔術衣装が目立つ。

「『アーカナイト・マジシャン』の姿が変わったアル!？」

「『バスターモード』はシンクロモンスターを進化させる特殊な力

ード！！あれで『アーカナイト・マジシャン』は『アーカナイト・マジシャン／バスター』に進化したの！！」

神楽にバスターモードの説明をする遊星。

彼はシンクロ召喚のスペシャリストの為、シンクロの事なら何でも詳しい。

「こいつも『アーカナイト・マジシャン』と同じく特殊召喚されたターンに魔力カウンターが2つ乗り、魔力カウンターの数だけ攻撃力1000ポイントアップするぜ！」

すると『アーカナイト・マジシャン／バスター』に魔力カウンターが乗せられ、攻撃力が大きく上昇した。

アーカナイト・マジシャン／バスター ATK 900 2900

「だが、そのまま消滅する事は変りはネエだろうよ！！喰らいやがれえ！！！」

すると『タイラントドラゴン』は口から巨大な火球を放ち、その火球は土方のフィールドを焼き尽くして『アーカナイト・マジシャン／バスター』を焼き尽くす。

「よっしゃー！！コレでメエのモンスターはがら空きで大打撃……」

「罨カード、『悲劇の共存曲術・カラミティ・レクイエム』を発動……自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスターがカード効果で破壊された場合、破壊されたモンスターよりレベルが低い相手モンスターを全て破壊する」

「え？」

すると、何やら忌まわしき邪悪なる曲文字が銀時のフィールド上を包み込み、2体のドラゴンは悲鳴を上げて消滅していった。

「ああああああああああああああああああ！！俺のドラゴン達があああああああ！！」

「残念だがそれだけにあらず。『アーカナイト・マジシャン/バスター』は破壊され墓地に送られたとき、墓地から『アーカナイト・マジシャン』1体を特殊召喚する！蘇れ『アーカナイト・マジシャン』！！」

すると墓地から『アーカナイト・マジシャン』が蘇る。

魔力カウンターが2つ増え、効果によってその魔力カウンターの数だけ攻撃力が増幅し、攻撃力は2400となる。

アーカナイト・マジシャン ATK400 2400

「なんだい、せっかくの上級モンスターが台無しになったあげくに相手の場のモンスターも増えてきてるじゃないかい」

お登勢は呆れて言いだす。

銀時の場のモンスターは消えてなくなり、銀時自身も場はがら空き。

「先手は俺が取らせてもらう。無様にダイレクトアタックを受ける！！」

「誰がてめえ何ぞに先手をやるかつつの！！手札の『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！！」

銀時は土方ごときに先手をもらうのは嫌で、すぐさま新たな上級ド

ラゴンを特殊召喚する。

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる！！」

「だがその効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる！！」

バイス・ドラゴン ATK2000 1000 DEF2400
1200

「だからどうした、俺は『カード・リミットブレイク』の効果で1枚ドローな」

「ちい、1ターン目で何枚カードを引きや気が済むんだ！！」

何度もカードをドローする銀時に憎らしく睨む土方。

「シンクロにはシンクロだ！ チューナーモンスター、『ガード・オブ・フレムベル』を通常召喚！！」

フィールド上に通常チューナーモンスターを召喚する銀時。

現れたのは灼熱の炎に包まれたドラゴン。

守備力はかなり高めである。

「レベル5の『バイス・ドラゴン』に、レベル1の『ガード・オブ・フレムベル』をチューニング！！」

「レベル6のシンクロモンスターを召喚するか！！」

『ガード・オブ・フレムベル』は1つの輪となり、『バイス・ドラゴン』は包まれて5つの星と化す。

「全てを縛り付ける鎖よ、あの愚かな者に罰を与えよ、シンクロ召喚！！！」

と輪から光の柱が現れ、1体のドラゴンが現れる。

「拷問せよ『^{チエーン}C・ドラゴン』！！」

現れたのは、体中に鎖が縛られている竜。

Cシリーズでも最強のモンスターであり、攻撃力は2500と結構高め。

攻撃力は『アーカナイト・マジシャン』を上回る。

「ちい！！」

「『カード・リミットブレイク』の効果でデッキからカード1枚ドロウな。そんじゃ行くぜエ、『^{チエーン}C・ドラゴン』で『アーカナイト・ドラゴン』に攻撃！！チエーンプラスト！！」

と鎖竜が口からレーザー光線を放ち、それを『アーカナイト・マジシャン』を飲み込んで消滅する。

土方 LP：8000 7900

「それだけじゃねえ、こいつは戦闘ダメージを与えたら相手のデッキからカードを3枚墓地に遅らせる効果を持つてんだぜえ」

「何だそりゃあ！？」

納得できないが、土方はデッキからカードを3枚墓地に送る。

「てかなんかあの俺様社長に似てねえ？パワーとデッキ破壊コンボ

「つてあの俺様社長に銀ちゃん似てね？」

「いやあ、さすがの銀さんもそこまでは…多分」

啞然としている神楽に、新八は流石に多分似てないと言いだす。

先手は銀時が取って、悔しがる土方を憎らしそうな笑顔で見る銀時。

「カードを1枚セットしてターン終了」(手札3枚)

ようやくターンを終えた銀時。

土方は憎らしそうに銀時を睨みつける。

「てめエごときに先手を取られるなんざ…俺もやきが回ったぜ…まあいい。一気に反撃させてもらうぜ俺のターン、ドロー!!」

土方は勢い良くデッキからカードをドローする。

ドローしたカードをみてにやりと笑う。

「今度はこっちの番だあ!!手札より魔法カード『古のルール』!!手札のレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する!!俺は『コスモクイーン』を手札から特殊召喚する!!」
「何イ!!」

と土方は手札から決闘盤に強く叩きつけるようにと、フィールド上に宇宙を滑る女王の魔術士が光臨した。

「オオー、アレハ『コスモクイーン』!!カッテハデュエルモンスターズ界最強ノ魔法使い族モンスター恐レタ幻ノカードデスヨ」
「てか詳しいなキャサリン、お前もカードやってんのか？」

詳しくすぎるキャサリンに呆れるお登勢。

だが『コスモクイーン』のレア度はかなり高い。

「それだけじゃねえ、『マジシャンズ・ヴァルキリア』を召喚！」

フィールド上に、可愛らしい可憐な魔術士が姿を現す。

デュエルモンスターズのアイドルこと『ブラックマジシヤンガール』に似ている為、人気がある。

「さらに速効魔法『分身魔術』を発動。自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合のみ発動可能：ライフを800支払、通常召喚したモンスターモンスター1体を選択してその同名モンスター1体をデッキか手札から特殊召喚する！2体目の『マジシヤンズ・ヴァルキリア』を召喚！」

土方はさらにフィールド上に2体目の『マジシャンズ・ヴァルキリア』を特殊召喚する。

土方 LP7900 7100

「げ、マジシャンズロックコンボ！！」

「行くぜ、『コスモクイーン』でその鎖トカゲに攻撃、コズミック・ノヴァ！！」

と、宇宙の女王は両手から漆黒の魔力を収束させて、そこから一気に魔力球を放ち『C』^{チェーン}を破壊する。

「はにゃあああああ！！」

銀時 LP8000 7600

「罨カード『ドラゴン・ホイッスル』！！ドラゴン族モンスターが戦闘で破壊されて墓地に送られた場合、デッキか手札からレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する！！来い『レアメタル・ドラゴン』！！」

銀時のフィールド上に1体の鋼の竜が光臨する。
レベル4にして攻撃力2400。

ほぼレベル5・6級だが通常召喚ができないのが欠点である。

「ち、攻撃力2400じゃ対抗できねエ…カードを1枚セットしてターンエンド！」（手札1枚）

土方はとりあえずターンを終了する。

新八達は銀時と土方の使用デッキ内容を確認する。

「へえ、銀さんはドラゴン族を中心としたパワーデッキに土方さんは魔法使い族を中心としたバランスデッキですか…」

「つうか侍の癖に戦士族デッキを使わないなんて…イメージ合っていないアル」

「まあまあ、人は見かけによらねえって」

新八と神楽は意外そうに2人のデッキを見て、十代が苦笑して言いだす。

「だけど、2人の実力は中々の者だ。銀さんは上級モンスターを低級モンスターのように召喚する上、『カード・リミットブレイク』の効果で特殊召喚するたびに手札消費のデメリットを打ち消している」

「土方さんもカードの連携が上手くいって、攻撃も護りも優れてる。攻撃力の高い『コスモクイーン』に2体の『マジシャンズ・ヴァル

キリア』は自分以外の魔法使い族モンスターを攻撃させないから、2体そろった事で無敵のマジシャンズロックが完成されている」

遊星も遊戯も認めるほど、銀時と土方のデュエリストレベルは高いのである。

「データを分析します。銀時様は攻撃力高めのドラゴン族を中心とし、さらにデッキ破壊コンボもあるパワー＆クラッシュドラゴンデッキを使用し、土方様は魔法使い族を中心とし魔法カードの連携を特化したバランスデッキを使用。2人の実力はAAランクでプロ級の実力を誇っています」

とタマが分析するように言いだす。

ちなみにこの小説のデュエリストの強さはEX〜Fで決定される。

F・E・D・C・B・B B・A・A A・A A A・S・S S・S S S・
E X

弱い 強い

Fは最低級ランク

E・Dは低級ランク

B・B B・Aは中級ランク

A A・A A Aは上級ランク

S・S S・S S Sは最上級ランク

EXは最強ランク

と、このように強さのランクが決闘者としての強さが決められている。デュエリスト

銀時とひじからは上級ランクである為、プロ級に入る。

「行くぜ、俺のターンドロー！！魔法カード『巨竜の石版』！！自分の墓地にレベル5以上のドラゴン族モンスターが2体以上存在する場合、デッキからカードを3枚ドロウする！！」

と銀時はデッキからカードを3枚ドロウする。

その後、手札から更なるモンスターを召喚する。

『流星竜・スターメテオワイバーン』を特殊召喚」

と、銀時の場に流星の如く振ってきた隕石の竜が現れた。

烈火の様な瞳に鋭い目線。

体中が燃えていて翼が4羽生えている翼竜。

そして尻尾の先には隕石が埋まっている。

「こいつは自分の場にドラゴン族が存在する場合、手札から特殊召喚ができるカード。しかもこいつはこの効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター1体のレベルを1つ上げるか下げる事ができる！」

「狙いは…レベルを下げるほうか」

「ああ……」

と憎たらしく答える銀時。

すると『レアメタルドラゴン』のレベルは4から3に下がる。

レアメタルドラゴン 4 3

「レベル3となった『レアメタルドラゴン』と『スターメテオワイバーン』をオーバーレイ・ユニット!!」

「オーバーレイ・ユニット!?!」

「ま…まさか!!」

新八と神楽は驚きだす。

そう、銀時の狙いは新八と神楽でさえもつい最近知った新しい召喚方法である。

2体のモンスターが光の球体と化して円を描くように高速に回りだす。

そして銀時の場が何かブラックホールのような空間が現れる。

「2体のモンスターで、オーバーレイネットアイを構築!!エクシーズ召喚!!」

3つの球体がブラックホールに飲み込まれ、そのブラックホールが大爆発して中から1体のモンスターが現れる。

「現れよ、^{ナンバース}『N.O.17 リバイス・ドラゴン』!!」

と、フィールド上に現れたのは6羽の翼が生えていて海竜とも言える強力なドラゴン。

^{ナンバース}角にN.O.17と刻まれていて周りに光の球体が回っているエクシーズモンスターである。

「…エクシーズ召喚！？」

「うはあ、スゲエゼ銀さん！！この世界にはそんな召喚方法があったんだなあ！！」

「エクシーズ召喚…同じレベルのモンスターを2体以上素材として召喚する新型モンスター…まさかこの眼で見られるとは」

遊戯と十代は知らず、遊星は噂に聞いた事があるので驚きだす。

「け…まさかエクシーズモンスターまで持っていやがるとは…だが攻撃力2000程度のザコモンスターで何が出来る？」

「悪いな、俺のデッキにはザコなんていねえよ！『アタッチメントドラゴン』を召喚！！」

小さき蒼い翼竜が姿を表すと、素早く宇宙の女王を密着して攻撃態勢から守備体制に変える。

「てめエ、何をしやがる！！」

「こいつは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、相手モンスター1体に装備カードとして装備することができるモンスターだ…パワーだけがドラゴンの特徴じゃないからなあ」

「チィ…それでも守備力は2450…万事屋の場にはザコドラゴンだけ！！」

「あめえよ！」

すると、『リバイス・ドラゴン』が光の球体を加えると攻撃力が増幅した。

ナンバー
No.17 リバイス・ドラゴン ATK2000 2500

「何！？攻撃力が上がりやがった！！」

「『リバイス・ドラゴン』はオーバーレイを1つ取り除く事で、攻撃力が500ポイントアップするんだぜ」

攻撃力が上がって、青き竜の攻撃力が宇宙の女王の守備力を上回った。

「そのジャマくせえ効果は消えさせてもらっぜ…速効魔法『魔風結界』…このターンの間だけ、相手フィールド上に存在するモンスターの効果は無効化する！！」

「てめえ！！」

「コレでジャマなロックコンボは消えた！！いくぜ、『リバイス・ドラゴン』で『コスモクイーン』に攻撃！！バイス・ストリーム！！」

すると『リバイス・ドラゴン』は口からとてつもない波動砲を放ち、『コスモクイーン』は悲鳴を上げて消滅した。

「デメエ…だがいい気になるなよ…罨カード『命の綱』！！戦闘でモンスターが破壊された場合、手札を全て墓地に送る事で破壊されたモンスター1体を攻撃力800ポイントアップして特殊召喚する！！蘇れ、コスモクイーン！！」

すると、命の綱が土方の墓地までつながり、その綱を宇宙の女王が捕まって生還した。

コスモクイーン ATK2900 3700

「はあ！？そんなで言い気になるなよ？速攻魔法『烈風』！！」

相手の場にレベル5以上のモンスターが特殊召喚された場合、そのモンスターをゲームから除外して相手に1000ポイントのダメージを与える――」

「何イ――！」

突如発生した突風に、『コスモクイーン』は吹き飛ばされて消滅する。

しかもその衝撃が土方に襲ってダメージを与える。

「ぐぎゃああああ――！」

土方 LP：7100 6100

「ぶはははははははははは――！ これで形勢逆転だなあ――！ター
ンエンド！」（手札3枚）

「にやろ……俺のターン、ドロー――！」

土方はカードを1枚ドローすると、ドローしたカードを見てにやりと笑いだす。

「だったらこいつを喰らいやがれ――！永続魔法カード『連携魔法発射』――！自分フィールド上に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合のみ発動可能――！攻撃できない代わりに相手に800ポイントのダメージを与える」

「何イイイイ――！」

「喰らえええ――！」

すると2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』は2つの杖を×型に合わせて、その先から魔力を収束し一気に魔力弾として銀時に向けてはなつた。

「ぎゃあああああああ!!」

銀時 LP：7600 6800

またもやダメージを受けた事に苦しむ銀時。

しかも『魔風結界』の効力が切れて再びマジシャンズロックコンボで土方のモンスターに攻撃する事ができない。

「この俺がテメーごときに負ける事はあるえねえよ…さつさと無様に負けちまいやがれ」

「にやろー!!」

土方は銀時とは対極に技で対抗する。

パワーなら銀時、カード連携なら土方の方が上のようなのだ。

「ちょっと、銀時やばいんじゃないかい？」

お登勢が啞然と言いだし、銀時が不利になつてると思い込む。

「確かに、2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』の効果で銀時さんは攻撃できない上、しかも永続魔法の『連携魔法発射』は魔法使い族モンスターの数だけ相手に400ポイントのダメージを与えるカード」

「攻撃もできずにダメージを受け続けるだけじゃ、流石の銀さんも不味いんじゃないネエ？」

遊星と十代もお登勢と同じく銀時の不利さにやばそうに思う。

「でも銀さんの手札は3枚もあつて、あの中に逆転の手口があれば

いいんだけど…」

遊戲の言うとおり、銀時はまだ手札が3枚もあり次のドローフェイズ時には4枚となる。

何か破壊形のカードさえあれば良いと思う。

「行くぜ、俺のターンドロー!!」

ドローしたカードを見て、銀時はにやりと笑いだす。

「そのコンボを一気に破壊してやるぜ…魔法カード『スタンピング・クラッシュ』!!ドラゴン族が存在する場合、フィールドの魔法・罠カード1枚を破壊して破壊したカードのコントローラーに500ポイントのダメージを与える!!」

「上手い、コレで『連携魔法発射』は破壊される!!」

新八は感心して叫び、『リバイス・ドラゴン』は翼を羽ばたかせて烈風を放つ。

「さあ、その『連携魔法発射』は退却だ」

「アホか…んなもん効くか」

「へ?」

何と、烈風が止んだ後も『連携魔法発射』は破壊されてない。

「嘘オオオオ!!何でエエエエ!!」

「こいつが『連携魔法発射』のもう1つの効果だ。自分フィールド上に魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合、墓地の魔法カード2枚をゲームから除外する事で破壊を無効にする」

と土方は墓地から『墓標の魔札』と『分身魔術』が除外される。銀時は舌打ちして『リバイス・ドラゴン』の効果を発動する。

「だったら『リバイス・ドラゴン』の効果発動し、オーバーレイユニットを取り除いて攻撃力アップ!!」

『リバイス・ドラゴン』は光の球体を喰わえて攻撃力をさらに増幅した。

これにより、『リバイス・ドラゴン』の全てのオーバーレイユニットが消えた。

ナンバー
No. 17 リバイス・ドラゴン ATK 2500 3000

「『リバイス・ドラゴン』は、オーバーレイユニットがなくなると直接攻撃することができないデメリットを持っています。しかし相手が強力なモンスターを召喚してくるのを警戒に、銀時様は『リバイス・ドラゴン』の攻撃力をさらに上げて守りを固めました」

「攻撃は最大の防御：確かにコレなら攻撃力3000以上のモンスターが現れない限り、破壊されない」

たまも遊戯も、銀時のナイスアイデアと思い言いだす。

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド!」(手札2枚)

「どうしたどうした、さっきの勢いは何処行っただあ!!俺のターンドロー!!」

土方はデッキからカードをドローする。

「『連携魔法発射』の効果をくらえやああああ!!」

と再び、2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』が魔導砲を放ち、銀時に直撃する。

「あああああああああー!!」

銀時 LP：6800 6000

「ターンエンド」(手札1枚)

とても自慢げに言いだす土方。
額に血管を浮かべている銀時は絶対に土方に眼に者を見せようと考えてる。

「くそがア、俺のターンドロー!!」

と銀時は一気にカードをドロースると、ドロしたカードを見てにやりと笑う。

「チューナーモンスター『ウィップ・ドラゴン』を召喚!」

すると、フィールド上にあられたのは悪魔の翼が生えていて、紫色の人型のドラゴン。

尻尾は鞭のように長くて先に棘がついている。

「今更チューナーモンスターでなんになる!? エクシーズモンスターはレベルじゃなくランクと言う特殊な を抱えてんだ! だからリバイスドラゴンをシンクロ素材には出来ねえよ!!」

「誰がシンクロモンスターを召喚すると言った? 俺は『ウィップ・ドラゴン』の効果を発動! 1ターンに1度だけ、フィールド上の魔法カード1枚をそのまま墓地に送る」

「なあ！？」

「破壊は防いでも、そのまま墓地退却効果はねえだろうがぁー！！デス・ダークウィップ！！」

すると、ウィップ・ドラゴンの尻尾が鞭の様に振られ、先っちょの棘が『連携魔法発射』を串刺しして消滅させる。

「上手い、その手があったか！」

「破壊するのとそのまま墓地に送るのは全然違うネ！銀ちゃん、ナイスアル！！」

銀時の反撃に喜びだす2人。
しかもそれだけじゃない。

「それだけじゃねえ…魔法カード『火竜の火炎弾』を発動…こいつでデメエに800ポイントのダメージを与えてやるぜ！！」

「なあ」

と、『リバイス・ドラゴン』が口から火炎弾を放って土方にダメージを与える。

「ぎゃああー！！」

土方 LP 6100 5300

「ぎゃははははははははははー！！おいおい土方くうくん、無様に押されてるけど大丈夫かぁ？」

（…殺してエエエエエー！！）

調子に乗って爆笑して見下す銀時に、顔中に血管を浮かべて怒りだす土方。

「そ…そこまでののか？」

「てかあの2人、仲悪すぎじゃねえ？」

「あの馬鹿2人はそう言う関係ネ」

遊星も十代も流石に引き、神楽は2人の存在を呆れてみる。

「俺はこのままターン終了な、さあテメエのターンだぜエ」（手札1枚）

「上等だ…だったらテメエにそれ双等の一撃を食らわせてやるぜ…俺のターン、ドロー!!」

怒りに満ちたドローは、土方の運の良さを急激に上げる。

「『魔導騎士 ディフェンダー』を召喚!!」

フィールド上に盾を持った魔導騎士が現れる。

守備力2000と高めで、しかも召喚時にすぐ魔力カウンターを1つ乗せる。

魔導騎士 ディフェンダー 魔力カウンター1つ

「2体の『マジシャンズ・ヴァルキリア』と『魔導騎士 ディフェンダー』をオーバーレイユニット!!」

「何イ!!」

土方もエクシース召喚を仕掛けてくる。

すると、3体のモンスターが光の球体と化して円を描くように高速に回りだす。

そして土方の場もブラックホールのような空間が現れる。

「3体のモンスターで、オーバーレイネットアイを構築！！エクシース召喚！！」

3つの球体がブラックホールに飲み込まれ、そのブラックホールが大爆発して中から1体のモンスターが現れる。

「いでよ！『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』！！」

現れたのは、青と紫をイメージした魔術衣装に、魔力カウンターが乗った大斧『バルディッシュ』に烈火に輝かせるサラサラとしたロングヘアーで翡翠色に輝く瞳をしている美しい美女。

その攻撃力は3000。

最上級魔導士がフィールド上に光臨した。

「すごい、土方さんもエクシース召喚をして来ましたよ！！」

「攻撃力3000…しかも3つのオーバーレイを持っているからかなり強力な効果を持っているかもしれない」

『リバイス・ドラゴン』に匹敵する攻撃力に新八と遊戯は驚きだす。しかも攻撃力が同じとはいえ、『バルディッシュ・エニユオ』には厄介な効果がある。

「行くぜ、『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』で『リバイス・ドラゴン』に攻撃！！」

「何でアル！？攻撃力は『リバイス・ドラゴン』と互角のはずなのにそのまま攻撃ってありえないヨー！」

攻撃力をアップしてから攻撃なら分かるが、まさかこの場で攻撃してくるなんてありえなかった。

「『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』の効果を発動！！このカードのオーバーレイを1つ使い、攻撃対象のモンスターの攻撃力をダメージ計算時の間だけ0と扱う！」

「何だとお！？」

すると、土方は『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』のカードの下に重ねておいてある『マジシャンズ・ヴァルキリア』を取り出す。

そして『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ』に浮いている3つの球体の内1つが『リバイス・ドラゴン』に直撃し、『リバイス・ドラゴン』の力が消耗する。

ナンバーズ
No・17 リバイス・ドラゴン ATK3000 0

「攻撃力が0に下がった！！」

「セコクネエ！？アノ効果セコスギジャネエ！？」

いくらなんでも攻撃力を0にする効果は反則だとキャサリンは言います。

遊星はあれがエクシーズモンスターの力と驚きだした。

「行くぞおらあ！！フォトン・ヴブウメセンブレイカー！！」

魔力を込められたバルディッシュを振って、紫色の発光斬撃を放つ。そして『リバイス・ドラゴン』がその斬撃によって破壊される。

「はんぎゃああああああああ！！」

銀時 LP：6000 3000

「銀さん！！」

「なんだい、攻撃力0の攻撃表示モンスターを攻撃するのってダイレクトアタックと一緒にじゃないかい」

新八は大ダメージを受けた銀時に驚き、お登勢はダイレクトアタックと変わらないと言いだす。

「これがてめえと俺の力の差だ…絶対的な強さを持った奴に勝とうなんざ不可能な事だ」

と土方はタバコを加えて銀時を見下し返す。

衝撃によって吹き飛ばされた銀時は流石に怒りだす。

「てめえ、立ったらその絶対的な強さってのがどんなのかを教えてやるよ…俺のターン、ドロー！！『ドルドラ』を召喚！」

すぐさま『ドルドラ』を召喚する銀時。

双頭の竜がフィールド上に舞い降りて、土方を睨む。

「シンクロモンスターを召喚するつもりか…だが『ドルドラ』と『ドレット・ドラゴン』の合計レベルは5…レベル5のシンクロモンスターなんか、『バルディッシュ・エニョ』の前ではザコ当然」
「何言ってるんだよ…カードにザコは存在しねえよ…弱いカードをザコって言う奴がザコ何だよ」
「……」

と銀時の言葉に無言ながらも感心する遊星。

「それになあ、この2体のモンスターもどんなにザコと呼ばれようが、どんなに弱エ奴だろうが…力を合わせりゃ、強大な力を生み出す事だつて出来んだぜ？魔法カード『ドラゴニック・タクティクス』を発動！

「…2体のドラゴンをリリースする事でデッキからレベル8のドラゴン族モンスターを召喚するカードか？」

「そうだぜ…この2体がフィールド上にそろった事でこのカードの発動条件を揃わせただぜ」

と『ドレット・ドラゴン』と『ドルドラ』はリリースされて、フィールド上に1体のドラゴンが光臨される。

「さあ、俺のエースモンスターの光臨だ」

「エースモンスター！？今までのより強力なモンスターが存在するんですか！？」

とまさかの銀時のエースモンスター宣言に注目する新八。

『キング・ドラグーン』・『タイラント・ドラゴン』・『リバイス・ドラゴン』をも凌ぐ銀時のエースモンスター。

それは絶対に強力なカードに違いない。

そして銀時が召喚するモンスターは…

「究極の白き生命体を見せてやるよ……今こそその孤高なる姿を俺の前に姿を現しやがれ！！」
ブルーアイズ・ホワイトドラゴン『青眼の白龍』

『……………え！？』

と、銀時が宣言したカードに唖然とする新八達。

銀時がそのカードを決闘盤にセットすると、フィールド上に1体の美しき白き龍が光臨した。

純白に輝くその体、サファイアの如く輝きだす青き瞳を宿す美しき白龍。

その名は『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』。

通常モンスターの中でも攻撃力は最も高く、伝説のレアカードの1枚である。

「……………え…『ブルーアイズ青眼』？」

と唖然と口にする新八。

何処をどう見ても銀時が召喚したのは『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』である。

伝説とも言われる白き龍を、我等が万事屋の銀さんが召喚したのだ。

「……………嘘オオオオオオオオオオオオオオ！？ちよ、『ブルーアイズ青眼』って何イイイイ！何で伝説のレアカードを銀さんが持っているのオオオオ！！」

「マジでありえないね？てか完全に銀ちゃん社長キャラアル！！」

「お前、まさかそれ本物なのか？」

新八、神楽、土方でさえも驚きを隠しきれない。

『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン』
『青眼の白龍』、江戸はもちろん世界でも『遊戯王』を代表とする
レアカードの一枚であり、通常モンスターの中でも最強と言う名が
高い存在だけじゃなく、世界でもたった4枚しかない幻のレアカ
ード。

コレにはこの決闘を注目しているかぶき町の一般人もまさかの
『ブルーアイズ』
『青眼』の存在に歓喜に騒ぎ出す。

「まさか、銀さんが『ブルーアイズ』
『青眼』使いだっただなんて!!」
「スゲエぜ銀さん!!」

遊戯も十代もはしゃぎ、遊星も驚きの余りにだんまりとなる。
お登勢、キャサリン、たまもあんぐりしていた。

「マジアルか!社長の切り札アルか!？」
「ちよっとー!! 銀さんと全然イメージ合わないじゃないですか
!?!」

「うっせー!! 銀さんのイメージカラーは『白』だから、
『ブルーアイズ・ホウ
イテトラゴン』
白龍』の『白』と合うんだよ!! イメージ合うんだよ!!」

と神楽と新八の言い分に、銀時も怒鳴って叫びだす。

「たくよお、んで『カード・リミットブレイク』の効果でデッキか
らカードを1枚ドローする!!」

銀時は勢い良くカードをドローし、ドローしたカードを見てニヤリ
と笑う。

「装備魔法『ドラゴンの秘宝』…これで『ブルーアイズ』
『青眼』の攻撃力と守備力
300ポイントアップ!!」

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
青眼の白龍 ATK3000 3300 DEF2500 2800

「げえ、『バルディッシュ・エニユオ』の攻撃力を上回りやがった
！！」

「喰らえやあ！！『青眼』で『バルディッシュ・エニユオ』に攻撃
バースト・ストリーム
！！滅びの爆裂疾風弾！！」

と、『青眼』が口から白い粉子を大量に収束して溜め続け、そして
一気に巨大な白き閃光を放つ。

その閃光に『バルディッシュ・エニユオ』は飲み込まれて消滅する。

「ざいいいい！！何て威力だ！！」

土方 LP:5300 5000

「ふはははははははは！！マヨネーズがゴミのようだあああああ
ああ！！」

「て何だその『人がゴミのようだ』って言う言い方！？しかもマヨ
ネーズがゴミってどう言うことだアアアア！！」

マヨネーズ侮辱宣言に怒鳴る土方。
何せ極度のマヨラーである。

そしてこの銀時の『青眼の白龍』が、後に彼を決闘者としての道を
進ませる事になる。

登場オリカ紹介

墓標の魔札 通常魔法

『手札からこのカードが墓地に送られた場合、デッキから魔法カード、または罠カード1枚を選択してセットする事ができる』

カード・リミットブレイク 永続魔法

『自分フィールド上にレベル5以上のモンスターが特殊召喚される毎に、デッキからカードを1枚ドロウする』

飛龍転生 通常魔法

『相手はデッキからカードを2枚ドロウする。
その後、デッキから融合モンスターカードによって決められたカ-

ドを墓地に送り、レベル8以下のドラゴン族の融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたモンスターは、特殊召喚されたターン、攻撃できない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする。）」

爆裂龍霸弾 速攻魔法

『自分フィールド上にレベル7以上のドラゴン族モンスターが存在する場合のみ発動可能。
相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター全てを破壊する。』

悲劇の共存曲術・カラミティ・レクイエム 通常罫

『自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスターがカード効果で破壊された場合のみ発動可能。
相手フィールド上に表側表示で存在する破壊されたモンスターよりレベルが低いモンスターを全て破壊する』

分身魔術

『自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合にレベル4以下のモンスターを通常召喚した場合のみ発動可能。
ライフを800支払い、通常召喚したモンスターモンスター1体を選択してその同名モンスター1体をデッキか手札から特殊召喚する

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない』

巨竜の石版 通常魔法

『自分の場にモンスターが存在しない時に、自分の墓地にレベル5以上のドラゴン族が2体以上存在する場合のみ発動可能。
デッキからカードを3枚ドローする』

流星竜 - スターメテオワイバーン 3 光属性 ドラゴン族 A
TK1300 DEF1400

『自分フィールド上にドラゴン族モンスターが存在する場合、手札からこのカードを特殊召喚する。』

この効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上に存在するモンスター1体のレベルをターン終了時まで1つ上げるか下げる事ができる』

アタッチメント・ドラゴン 1 風属性 ドラゴン族 ATK1
00 DEF100

『このカードは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、相手モンスター1体に装備カードとして装備することができる。
このカードを装備したモンスターの表示形式を変更する。以後、こ

のカードを装備したモンスターは表示形式の変更ができなくなる』

烈風 速効魔法

『相手の場にレベル5以上のモンスターが特殊召喚してきた場合のみ発動可能。』

そのモンスターをゲームから除外し、相手に1000ポイントのダメージを与える』

連携魔法発射 永続魔法

『1ターンに1度だけ、自分フィールド上に存在する魔法使い族モンスターの数×400ポイントのダメージを相手に与える。』

この効果を発動したターン、そのターン攻撃できない。

相手のターンでこのカードが破壊される場合、1ターンに1度だけ墓地に存在する魔法カード2枚をゲームから除外してその破壊を無効にする』

ドレット・ドラゴン 2 闇属性 ドラゴン族 攻撃力800
守備力1200

効果・チューナー 1ターンに1度だけ、フィールド上に表側表示

で存在する魔法カード1枚を選択してそのまま持ち主の墓地に送る。

魔導戦斧士・バルディッシュ・エニユオ 4 闇属性 戦士族

ATK3000 DEF2500

エクシーズ： 4の魔法使い族または戦士族モンスター3体

『このカードはエクシーズ召喚でしか特殊召喚できない。』

このカードの種族は魔法使い族としても扱う。

このカードが戦闘で相手モンスターを攻撃する場合、自分のターンのメインフェイズ1時にこのカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、そのターンの終了時までそのモンスターの攻撃力を0として扱う。

このカードは相手の罠カードの効果を受けない』

ID - 2 遊戯王の主人公が使うエースモンスターの攻撃力は大抵2500（後

坂田銀時

使用デッキ 『ブルーアイズ・ホワイต์ドラゴン青眼の白龍』を中心としたドラゴン族デッキ

『ブルーアイズ青眼』を中心としたドラゴンのパワーとデッキ破壊による2種類のコンボを得意とするパワー＆クラッシュデッキ。

デッキ名 『万事屋白龍で粉砕 爆砕 大爆砕』デッキ

主力カード 『ブルーアイズ・ホワイต์ドラゴン青眼の白龍』

『ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者』

次回もお楽しみ

ID - 3 遊戯王の主人公が最初に戦うデュエリストのエースモンスターの攻撃

銀時

「俺が『ブルーアイズ青眼』デッキを使用するってわけか：いやあ、俺はてつきり『六武将』デッキを使わせるのかと思ったけど、案外『ブルーアイズ青眼』は俺のイメージカラーに合うから良いんじゃないかね？」

黒神

「そうなんです！：そしてマヨラーもイメージカラーに合わせてあるモンスターを中心とした魔法使い族デッキを使用します！：」

土方

「何で俺にはマヨラー呼ばわり！？殺すぞ糞作者！：」

黒神

「そんでは始まります」

土方

「聞けやあ！：」

ID - 3 遊戯王の主人公が最初に戦うデュエリストのエースモンスターの攻撃

銀時 LP : 3000 伏せカード1枚

フィールド

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
『青眼の白龍』(攻撃表示・『ドラゴンの秘宝』を装備・ATK 3000・DEF 2800)
『ドラゴンの秘宝』
『カード・リミットブレイク』

土方 LP : 5000 手札1枚

「てめエ、それは世界でも経った4枚しかねえ激レアカードだろうが!! 一体どうやって手に入れやがった!!」

「ああ? 知り合いの人妻好きのへんてこペットを飼ってる馬鹿からもらったんだよ!」

と土方は納得いかない感じで叫びだし、銀時はめんどくさくても答えだす。

だが人妻好きでへんてこペットと言う2つのキーワードを合わせれば、その人物は1人しかない。

「かぶき町にあの『青眼』^{ブルーアイズ}が存在すると見て来ては…銀時め、ようやく決闘者^{デュエリスト}として目覚めたか」

と新八の隣にいつの間にか黒い長髪に眼帯をかけて黒いコートを着た男がいた。

彼の名は桂小太郎。

攘夷志士の1人であつては銀時と同じく攘夷戦争を駆け抜けた英雄だが、現在は指名手配反と幕府から追われている。ちなみにクールボケで無駄にうざい所が多少ある。

「桂さん!!」

「ヅラア、いつの間に来てたアルカ?」

「ヅラじゃないキャプテン・カッーラだ!」

と新八も神楽も桂に注目する。

しかも桂は相変わらずヅラ呼ばわりされるのが気に入らないようだ。

「新八さん、知り合いですか?」

「ああ、この人は桂小太郎さんと言つて銀さんとは盟友関係で今は指名手配反されていますけど良い人なんですよ」

「なるほど、銀さんの…」

銀時の仲間である事に納得する遊星。

だが遊戯達は何より気になるのは桂の隣にいる生命体。

ペンギンの様な白い物体である。

「あのう、コレってペンギンか?」

「ペンギンじゃないエリザベスさ」

十代が疑問系に言いだすと、桂が自分のペットつと言うより相棒の

彼の名はエリザベス。

『始めまして、エリザベスです』

「……あはは……は……始めまして、武藤遊戯です」

その後も十代も遊星も桂達に挨拶をするが、桂とエリザベスも遊戯王シリーズの主人公達が登場した事に驚きを隠せなかった。

「そう言えば、あんた銀時が『青眼』ブルーアイズを召喚したと言っのにあんまり驚かないわね」

とお登勢が意外そうに桂に聞きだす。
すると桂から予想外な事を言いだす。

「驚かないも何も、銀時に『青眼』を渡したのはこの俺だからな」
ブル・アイズ

そう、銀時に『ブルーアイズ青眼』を渡したのは桂である。

さらに驚くべき情報を桂は言います。

「しかも銀時は『青眼』のカードを3枚持っている」

「何だそりゃああああああああああああ！？」

「ほとんど社長ポディションアル！」

ブルーアイズの『青眼』のカードを3枚持っている事に新八も神楽も驚きを隠せなかった。

伝説のレアカード『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』は世界でたった4枚存在するカード。

それを3枚も持っている銀時。

伝説のレアカードとも言えるカードをデッキに入っている事には驚かない訳にはいかない。

「ちょ、桂さん！！いくら仲間だからって伝説のレアカードを…それも世界でたった4枚しかない『ブルーアイズ青眼』を3枚も銀さんにあげるなんて大胆すぎますよ！！」

「ちなみに『ブルーアイズ青眼』はその枚数が世界で4枚しかない事からデュエリスト決闘者なら喉が出るほど欲しがる幻のレアカードの一種とされていて、1枚数千万円以上はします」

「数千万円！？マジデカ！！テカモウ大富豪じゃネエ！？」

新八は、そんな激レアカードの中の激レアカードを3枚も銀時に渡した桂に青ざめて叫びだす。

たまが『ブルーアイズ青眼』の値段を評価すると、キャサリンは隙があれば奪おうと考えている。

「以前、デュエルモンスターズを実体化させるからくり機械を発明し、江戸を焼き払おうとする天人達の存在を知ってな…そいつ等を天誅下した後に偶然にも実験台に使われようとしたカードが3枚の『ブルーアイズ青眼』でな…せっかくだからそのカードを悪用されないようにと取り上げて、気まぐれに銀時に渡した訳だ」

「そうなんですか…やっぱり桂さんはデュエルモンスターズをやる暇が無いから『ブルーアイズ青眼』を銀さんに」

と新八は桂はデュエルモンスターズに興味がないと思いつつ、しかしそれは違った。

「いや、単に俺の使用するデッキとは合わなくなてな…せつかくだから銀時にデュエルモンスターズに興味を持たせよう」と…」

「て結局はまってるのかあ！！しかもデッキを持ってるのかよオ！！」

と桂はデッキを取り出して、銀時に『ブルーアイズ青眼』のカードを渡した理由を言いだす。

そんな桂に怒鳴ってツツコム新八であった。

一方の銀時と土方の決闘は、『デュエル青眼』を召喚している銀時が圧倒的有利である。

（ちい、まさか万事屋ごときにここまで押されるとああ、しかも伝説のレアカードを持っていやがるなんて信じられねエ…だが、決闘はパワーだけじゃねエところを見せてやる！！）

「俺のターン、ドロー！！」

土方はデッキからカードをドローすると、そのカードを手札に加えて1枚のカードを発動する。

「魔法カード『光の護封剣』を発動！！」

するとフィールド上に無数の光の剣が振ってきて、銀時のフィールド上を防ぎこむ。

「こいつぁ…」

「このカードがフィールド上に存在する限り、相手は3ターンの間は攻撃できない…モンスターをセットして、俺はコレでターンを終

了」

土方はターン終了宣言をする。

「チィ、俺のターンドロー!!」

勢い良くカードをドローするも、ドローしたカードは魔法・罠カード除去カードではない。

「チィ…俺はこれでターンを終了!!」(手札1枚)

光の護封剣 1ターン目

「俺のターン、ドロー!!カードを1枚セットしてターンエンド」(手札1枚)

一方の土方は順境に準備をしている。

銀時を倒す秘策を考えてる。

「俺のターン、ドロー!!『マンジュ・ゴット』を召喚!!」

とフィールド上に無数の手が生えている守護神があらわれた。

「こいつの召喚に成功した場合、デッキから儀式魔法か儀式モンスターのどちらか1枚を手札に加える!!」

銀時はそう言ってデッキから1枚のカードを手札に加えると、そのカードを発動する。

「儀式魔法、『白龍光臨』…レベル4に合わせるように手札またはフィールド上のモンスターをリリースして、『ナイト・オブ・ホワイต์ドラゴン白竜の聖騎士』する！
！』『マンジュゴット』をリリースして、来い、『ナイト・オブ・ホワイต์ドラゴン白竜の聖騎士』！」

と、銀時の場の『マンジュ・ゴット』はリリースされ、フィールド上に1体の白き竜騎士が光臨する。

白き鎧を身に付けてレイピアの剣を持ち、さらには白き竜を駆る聖騎士の姿が光臨される。

「ナイト・オブ・ホワイต์ドラゴンそれで、『ブルーアイズ・ホワイต์ドラゴン白竜の聖騎士』の効果で、こいつをリリースしてデッキまたは手札から、『青眼の白龍』を特殊召喚する…！」
「何イイ！？」

と、フィールドの聖騎士がリリースされるとフィールド上に2体目の白き龍の姿が光臨される。
コレには土方も驚きを隠しきれない。

「てめえ、まさか、『ブルーアイズ青眼』のカードを3枚も…」
「ああ…知り合いから3枚ももらっちゃってるんだぜ」
「リミット・カードブレイクリミット・カードブレイク」の効果でデッキからカードを1枚ドロ
ー」

と銀時はデッキからカードを1枚ドロウする。

「ナイト・オブ・ホワイットドラゴン『ブルーアイズ白竜の聖騎士』の効果で特殊召喚した、『青眼』はそのターン攻撃できませんが、銀時様は攻撃ができなくても戦力を高める準備をしています。しかも、『リミット・カードブレイクカード・リミットブレイク』の効果で手札は増幅」

「…てか無駄に強くなえ？」

と確かに銀時は決闘者でもないのに無駄に強い。
しかし彼は土方の挑発に怒りだしてムカついている所である。

「…チイ、とりあえずターンエンド」(手札1枚)
(まずい…場には攻撃力3000の『青眼』^{ブルーアイズ}が2体…速いところしねえと『光の護封剣』の効果が切れちゃったら総攻撃を受けてしま
う)

このままでは不味いと土方は思っただけ自分のターンを進める。

「俺のターン、ドロー!!」

勝利を信じてカードをドローする。
ドローしたカードを見てにやりと笑いだす。

「ふふふ……今からテメエに逆転の勝利を見せてやるぜ。魔法カ
ード『黒魔族のカーテン』を発動!!」
「何イイイ!!」

と、土方は1枚の魔法カードを発動した。
それをみた銀時はもちろん桂も驚きだす。

「あれは、ライフを半分支払う事によりデッキから最上級黒魔術士
を召喚する速効召喚魔法カード!!」
「最上級黒魔術士!」

新八も知っている有名な黒魔術士。
魔法使い族の中でも有名で、誰もが注目する有名な魔術士。

「まさか、テメエあのカードを!!」

「ふふふ……さあ見せてやるぜ、俺のエースモンスターを」

と土方は笑い出して、デッキから1枚のカードを取り出して決闘盤デュエルディスクにセツトする。

「きやがれ『ブラック・マジシャン』!!」

黒魔族のカーテンから姿を現したのは紫の魔法衣に身を包んだ1体の黒き魔術師。

その名は『ブラック・マジシャン』。

主人公、武藤遊戯（と言うよりアテム）が使用するエースモンスターであり攻撃力、守備力共に最高レベル。

そんな黒魔術師が土方の前に光臨する。

土方 LP:5000 2500

「ぶ…『ブラック・マジシャン』が来たあ!!」

「主人公の切り札アル!全然マヨラーのイメージが合わないヨ!!」

『ブラック・マジシャン』の存在に驚きだす新八と神楽。

『ブラック・マジシャン』もレアカード中のレアカードであり、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン『青眼の白龍』程じゃないが数万円の価値を誇っている。

「『ブラック・マジシャン』…」

黒魔術士の姿を見て、少し辛そうな表情をしている遊戯。
何やら因縁があるようだ…。

「何と、土方め銀時の『青眼』^{ブルーアイズ}に対抗して『ブラック・マジシャン』を持っていようとは」

「へえ、あれが噂の『ブラマジ』かあ」

桂は憎たらしそうに見つめ、十代は始めてみるかのように『ブラック・マジシャン』を見る。

「てんめえ、何で真撰組副長の癖に主人公が使用しそうなカードを持ってやがるんだ!!」

「ばつきやるお、『ブラック・マジシャン』の『ブラック』は真撰組のイメージカラー何だよ、同じ色だからイメージに合うんだよボケエー!!」

「ええええええ!! そんな理由で『ブラック・マジシャン』を使っているのオオ!?!」

とイメージカラーで選択する土方はまさに銀時と同類の馬鹿。

だがその『ブラック・マジシャン』に合わせるようにと土方は魔法使い族デッキを中心としたデッキを構築したのだ。

「は!いくら『ブラック・マジシャン』とは言え…攻撃力2500じゃ俺の『青眼』^{ブルーアイズ}にはかなわねえよ」

「残念だがそうもいかねえ。俺は手札より魔法カード『魔力収束の杖』を発動。フィールド上に存在する魔法使い族モンスター1体を選択し、フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て墓地に送る。墓地に送った枚数分だけ選択したモンスターの攻撃力をターン終了時まで400ポイントアップする」

「げげえ!!」

「アア、アホノ坂田サンノ場二ハ『ドラゴンノ秘宝』ト『カード・リミットブレイク』ガ2枚、アノ警官ノ場ノカードハ『光ノ護封剣』

1枚、合計3枚で攻撃力1200ポイント上がりマス」

と、『ブラック・マジシャン』の杖の先が、フィールド上に存在する魔法カードから魔力を収束して吸い尽くし、力を増幅させる。

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
青眼の白龍 ATK 3300 3000

ブラック・マジシャン ATK 2500 3700

「げえ、最悪だあ!!」

「喰らえやあ、『ブラック・マジシャン』で『青眼』に攻撃、黒・
魔・導!!」

すると黒魔術士は杖から漆黒の魔力弾を放ち、それが『青眼の白龍』
を跡形も無く破壊する。

「ああああ!!『青眼』があ!!」

銀時 LP 3000 2300

「貴様には『青眼』は似合わねエ、さっさと倒してその『青眼』は
没収させてもらう」

「ああ!! ためエ警官の癖に人のカードを奪うつてのか!!」

「お前が使うとせつかくの伝説のレアカードも台無しになってしま
うからな! その前に『青眼』は全て取り上げてよ
り有効に使われるようにと幕府で攘夷浪士を削除する為に使わせて
やるぜ」

「ふざけんじゃねえ!! いくら幕府側だからってさっきから好き勝
手言いやがってえ!! そのままで言うならアンティールを申し込ん

でからこいやあ!!」

と土方は銀時から『^{ブルーアイズ}青眼』を取り上げようと考え、銀時は怒りだし、アンティルールを申し込む。

「面白エ、もしテメエが奇跡的に勝てるのなら俺のデッキから3枚好きなのくれてやりや…その代わり、俺が勝って当然のようにてめエが負けたらその『^{ブルーアイズ}青眼』は全て頂くぜ!」

「何この見下されてる言い方、殴って良い?今すぐ殴って良い!」

「ぎ…銀さん、気持ちはわかるけど決闘中^{デュエル}に殴るのは辞めたほうが…」

と啞然として言いだす遊星。

「何か、お互いに使用するデッキを間違えていませんか?」

「銀ちゃんが主人公側なのに主人公っぽくないカードを使って、マヨラーはライバル側なのに主人公っぽいカードを使ってるネ。しかも立場が全然違うヨ」

と新八と神楽は呆れて言いだす。

「まあ、別に良いではないか」

「ちょ、桂さん!銀さんが負けたらせつかく桂さんが上げた『^{ブルーアイズ}青眼』が真撰組の手に渡ってしまい、攘夷志士達にも脅威になってしまいますよ!!」

「安心しろ、そんな愚かな考えをしてる時点で俺は銀時が勝つと思っ
^{デュエル}っている…それに俺がこの決闘で銀時が奴に勝つところを見届けた
理由は2つある」

桂は新八に心配されても銀時が勝つと思ひ込む。

「今まで我等攘夷志士を苦しめた真撰組副長、土方十四郎…決闘^{デュエル}とは言え奴が無様に負ける姿を見届ける滅多にない機会だ。そしてもう1つは、奴は決闘^{デュエル}にとって大切な事をまだわかってはいない」

と桂は言いだす。

1つ目は攘夷志士らしいが、2つ目の大切なものとは何なのかを気になる新八達。

ブラック・マジシャン ATK 3400 2500

「俺のターン、ドロー!!」

と、カードをドローする銀時。

土方の場には『ブラック・マジシャン』と伏せカードが1枚。その伏せカードを軽快すべきじゃないかと銀時は思う。そこで…

「『ミラージユ・ドラゴン』を召喚!!」

と銀時は鏡の様な反射光を放つ竜を召喚する。伏せカードを警戒して選択し召喚したカード。

「『ミラージユ・ドラゴン』か…確かにバトルフェイズの間は相手は罠カードの発動を封じるモンスターか。だが、そんなザコで俺の罠カードが封じられると思ったかあ!!『六芒星の呪縛』を発動!!」

「何イ!?!」

突如、『青眼』^{ブルーアイズ}の周りを囲んで現れた六芒星の魔方陣。
それにより、『青眼』^{ブルーアイズ}は動きを封じられる。

「こいつは相手モンスター1体を選択し、選択したモンスターは攻撃する事ができず、表示形式を変更する事もできない」

「チィ、発動できりやいつでも発動できるって訳かい…カードを1枚セットしてターンエンド!!」(手札1枚)

と再びカードを1枚セットする銀時。
一方の土方は自分のターンを進める。

「俺のターン、ドロー!!魔法カード『魔石の宝玉魔術』を発動。
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合、デッキからカードを2枚ドローでき、レベル7以上のモンスターが存在すればさらにもう1枚ドローできる!」

土方はデッキからカードを合計3枚ドローする。
ドローしたカードを見て、にやりと笑い出す。

「…ふ、行くぜ魔法カード『千本ナイフ』を発動!!自分の場に『ブラック・マジシャン』が存在する場合、相手モンスター1体を破壊する!!消えやがれ『青眼』!!」^{ブルーアイズ}

と、土方は叫びだして言いだす。

『ブラック・マジシャン』は1000本のナイフを一斉に投げつけて、『青眼』^{ブルーアイズ}を破壊する。

「デメエ!!」

「まだだ…魔法カード『精神同調』を発動し、『ミラーージュ・ドラゴ

ン』のコントロールを得る」

「あああああー!!」

すると、特殊な破調が『ミラージユ・ドラゴン』に催眠術をかける。コレで『ミラージユ・ドラゴン』は操り人形となって土方の場に移る。

「て待てやマヨラー!!お前、警察の癖に他人のモンスターを奪うってほとんど泥棒じゃねえかああ!!」

と納得いかない神楽は怒鳴りだす。

「私ノ前デ、盗ミヲ疲労スルトハ良イ度胸ダナアノヤロー!!アレハ私ニ対スル挑戦ト見ルベキデスネ?」

バシ!!

「ア痛エ!?!」

「対抗心燃やしてんじゃねえよ馬鹿!」

と泥棒として対抗を燃やすキャサリンに呆れて叩くお登勢。

「しかしどうであれ、このままでは銀時様の負けが決まります」

「…どうしてアルか?銀ちゃんの場合には伏せカードが2枚アルよ!」

「それに『精神同調』でコントロールできても、攻撃できない訳じゃ…」

「いや、その姉ちゃんの言うとおりだぜ?」

たまの銀時敗北宣言に、新八と神楽は納得できない。しかし十代はそのとおりと言う。

「確かに、『精神同調』でコントロールを得たモンスターは攻撃もできず、リリースする事もできない……けど、『ミラージュ・ドラゴン』の効果まで無効にする事はない」
『あ！』

遊星の言葉に2人は気づく。

「『ミラージュ・ドラゴン』は自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はバトルフェイズに罠カードを発動する事はできない……」

「そっか、銀さんの伏せカードがいくら攻撃カウンター罠カードでもその発動を封じられたら……」

十代が『ミラージュ・ドラゴン』の説明をすると、遊戯も納得する。

「しかも、銀時様のライフは残り僅か2300」

「もしこのままダイレクトアタックが決まれば……」

銀時の負けである。

「さあ、そろそろ無様に負けてもらうぜ……行けエ、『ブラック・マジシャン』！！万事屋にトドメだああ！！」

と土方が叫びだして攻撃宣言をする。

『ブラック・マジシャン』は一気に杖から魔力を収束し、黒き魔力弾を放つ。

コレで決まった……と思いきや。

「あめえよ大神君……速効魔法『奇襲の竜』！！」

「何！？」

「自分の場にモンスターが存在せず、相手の場に2体以上のモンスターが存在する場合のみ発動可能！ デッキからレベル4以下のドラゴン族1体を特殊召喚する！！」

如何に罠カードが封じられても、速効魔法は別である。

ちなみに速効魔法は、セットすれば相手ターンでも発動できる特殊魔法カード。

「『デコイドラゴン』を守備表示で召喚！！」

フィールド上に現れたのは、可愛い幼竜。

攻撃力300、守備力200と弱いドラゴン。

しかしこのドラゴンは特殊な効果を持っている。

「チィ、また厄介なザコを召喚しやがったか！」

「ぶはははは、そのザコに勝利をかき消されたテメエはザコ以下のザコだなあ！！」

「にやろー！！ 魔法カード『生贄の壺』を発動し、『ミラーージュ・ドラゴン』を墓地に送ってデッキからカードを2枚ドローする！！」

土方はカードを2枚ドローする。

だがドローしたカードの中には、土方が欲しいカードは無かった。

「チィ、ターンエンドだ！！」（手札2枚）

舌打ちしてターンエンドする土方。

「なるほど、『デコイドラゴン』は手モンスターの攻撃対象になった時、自分の墓地からレベル7以上のドラゴン族モンスター1体を

選択して自分フィールド上に特殊召喚し、攻撃対象をそのモンスターに移し替える効果を持っています」

「銀さんの墓地には2体の『青眼』^{ブルーアイズ}が存在するから、しばらくは護りきれぬ――」

たまと新八はまだ勝機は残されていると確信する。

「じゃあ、俺のターン……ドロー！魔法カード『賢者の宝札』――手札がコイツだけの場合、ライフを1000支払う事でデッキからカードを2枚ドローする」

銀時はデッキからカードを2枚ドローする。
ドローしたカードを見ても、逆転の手口がない。

「俺はこのままターンエンド――」（手札2枚）

かと言って銀時も今は対策できるカードはない。

「俺のターン、ドロー――」

と土方は勢い良く、カードをドローする。
ドローしたカードを見て、にやりと笑いだす。

「取って置きを見せてやるぜ……魔法カード『合成黒魔術の儀式』を発動――！自分フィールド上とデッキから、融合モンスターカードによつて決められた魔法使い族モンスターを含むモンスターを除外して融合する――」

「何イイイ――」

「この場で融合と言えば……不味い、土方さんはあのドラゴン天敵モンスターを召喚するつもりだ――」

新八は土方が融合召喚するモンスターは一体何なのかを予想する。

「場の『ブラック・マジシャン』とデッキの『バスター・ブレイダー』を融合!!」

とフィールド上に竜破壊騎士が現れて、時空の渦に飲み込まれた黒魔術師と竜破壊騎士。

二体のモンスターが融合して、1体のモンスターが現れる。

「『超魔導剣士・ブラック・パラディン』を融合召喚!!」

フィールド上に1体の超魔導剣士が光臨した。

攻撃力2900で守備力2400。

『コスモクイーン』と並ぶ攻撃力を誇るが、『ブラック・パラディン』は銀時の使用するドラゴン達の天敵である。

「こいつが俺のデッキ最強のモンスターだ。『ブラック・パラディン』はお互いのフィールド上と墓地に存在するドラゴン族の数だけ500ポイント攻撃力をアップさせる」

「げえ、マジかよ!!」

「やべえ、銀さんのフィールド上に存在する『デコイドラゴン』と墓地に眠るドラゴンは16体!」

十代はやバイと言いだす。

つまり、超魔導剣士の攻撃力は8000ポイントアップして攻撃力は…

超魔導剣士・ブラック・パラディン ATK2900 10900

「攻撃力10400!? 神のカードでも絶対にそこまできませんよ!!」

「大丈夫ネ、新八!! 銀ちゃんの場合の『デコイ・ドラゴン』がいる限りドラゴン再生効果は続くある!」

と心配ないと言いだす神楽。
だが…

「そのザコの効果は封じさせ手やりや!! 魔法カード『禁じられた聖杯』!! モンスター1体の攻撃力・守備力を400ポイントアップしてその効果も無効にする!!」

「何イイイ!?!」

『デコイドラゴン』は聖杯に入った水を浴びせられ、力が増幅した変わりに効果を失う。

デコイ・ドラゴン	ATK300	700	DEF200	600
----------	--------	-----	--------	-----

「『ブラック・パラディン』でそのザコを攻撃イ!! 超魔導無影斬!!」

超魔導剣士は剣杖を強く握り、大きく振り回して『デコイドラゴン』を一刀両断にする。

「ちい…すまねえな『デコイドラゴン』」

「ふふふ…コレで次のターンで終わりだ…ターンエンド!!」(手

札1枚)

と土方は余裕を持ってターンエンド宣言をする。
しかも油断はしていない。

「『ブラック・パラディン』には手札を1枚墓地に送る事で相手が
発動した魔法カードを無効にして破壊する効果を持っている…この
ままじゃ銀さんが負けてしまう」

と、思い込む遊戯。
しかし…

「ふ、アレぐらいで銀時が諦めると思ってたか？」

『『!?!?』』

と誰もが諦めモードになる中、桂だけは違った。

「見ろ、あの銀時の眼を…あの眼はまだ諦めていない眼。次のター
ンで決着をつけるつもりでいる」

と桂は思っただけです。

何せ銀時は土方だけには絶対に負けたくないのである。

ここからは『ジャックバトル』が流れる雰囲気楽しんでください
<http://www.nicovideo.jp/watch/sm5262441>

「いくぜ、ファイナルターン!!」

と潔くカードをドローする銀時。

今の台詞は違うカードゲームをする人物の台詞である。

「魔法カード『地割れ』!!そのモンスターには退却だ!!」

「ざっけんな!!そんな事させるかよ!!『ブラック・パラディン』のモンスター効果、手札を1枚墓地に送って魔法カードの発動を無効にして破壊する!!破魔・超激烈斬!」

超魔導剣士は剣に魔力を込め、その剣を振って魔力を込めた斬撃を放って『地割れ』の効果が無効にして破壊する。

「どうだ、コレでてめエの反撃も…」

「コレでてめエの手札は尽きたなあ」

「何!?!」

そう、コレはあくまで罠であつた。

「カードを1枚セットし、魔法カード『命削りの宝札』!!デッキからカードを5枚ドローして5ターン後に手札を全て墓地に送るぜ!!」

と銀時の手札は0。

よって5枚ドローする。

「おいマヨラー。コレで俺の勝利は確定したぜ…魔法カード『闇の量産工場』を発動……こいつで墓地に存在する通常モンスターを2

体選択して手札に加えるぜ…2枚の『ブルーアイズ青眼』を手札に加える…！」

と銀時は墓地の『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』を2枚手札に加えると…墓地にドラゴン族が減ったことで超魔導剣士の攻撃力が下がる。

超魔導剣士・ブラック・パラディン ATK10900 9900

「見せてやるぜ、究極竜の存在を…！『融合』発動…！」

「なあ…！」

「まさか…！」

「銀ちゃん、あのモンスターを召喚するアルカ…？」

と土方はもちろん、新八や神楽達も銀時が融合するモンスターは何なのかを注目する。

銀時は手札から3枚の『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』をフィールドに出すと、時空の渦が発生する。

「いくぜ、『ブルーアイズ青眼』3体融合…！」

時空の渦が現れ、3体の「青眼」は融合して1体のドラゴンとなる。

「『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン青眼の究極竜』…！」

と、時空の渦が爆発する。

そして爆発の中から1体の3頭竜が光臨する。

三頭の額に紋章が刻まれ、サファイアの如く輝きだす瞳。
そしてとてつもなく放たれる闘志。

その名は『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
青眼の究極竜』。

攻撃力は神をも超える最強のドラゴンである。

「ぶはははははははははは！！どうだ、コレぞ史上最強にして究極ドラ
ゴンの姿だあ！！」

『「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」』

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
『青眼の究極竜』の登場に、神楽、十代、キヤサリンの3人は思わ
ず叫びだす。

伝説のドラゴン3体の融合した姿など、生では絶対に見られない。
しかもゾビットビジョンなのに、何故か銀時は『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
青眼の究極竜』の
中心の頭の上に乗っている。

「ぶぶぶぶぶぶぶぶ………」ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
『青眼の究極竜』！？嘘オオオオオオオ！！本
当に召喚しちゃったよ銀さん！！」

「まさか、伝説の究極竜をこの眼で見られるなんて……やはり銀さ
んは凄い決闘者なんだ」デューエリスト

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
新八も『青眼の究極竜』の存在に思わず腰をぬかし、遊戯は銀時に

尊敬心を抱く。

「……………は、ば…馬鹿かテメエは！！何が究極のドラゴンだ！！いくら攻撃力4500の切り札を召喚したところで、『ブラック・パラディン』はその上を行く！！しかもドラゴンが増えてさらにパワーアップするぜ！！」

と土方は一瞬、『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン青眼の究極竜』に見とれるが、我に戻って状況を言いだす。

超魔導剣士 ブラック・パラディン ATK 9900 11900

「だったらそれを超えるまでよ…装備魔法『巨大化』！！コントローラーのライフが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力を倍にする！！」

と徐々に巨大化していく白き究極竜。

その分だけ攻撃力が倍になり、脅威の9000となる。

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
青眼の究極竜 ATK 4500 9000

「だ…だからなんだ！！いくらパワーアップしようが俺の『ブラック・パラディン』にはおよばねえよ！！」

「それが可能なんだなあ」

と憎たらしく笑う銀時。

「『ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
青眼の究極竜』で『ブラック・パラディン』に攻撃!!」
「ちょ、銀さん!?!」

攻撃力はまだ超魔導剣士の方が上なのに、銀時はそのまま白き究極竜に攻撃宣言をする。

そして究極竜はそれぞれ3頭のアギトを開き、そこにそれぞれ白き粉子を収束する。

「何やっているんですか銀さん!?!」

「むちゃな!! そんな事をすれば逆に返り討ちにされる!!」

と遊戯も遊星も無謀だと思う中…

「いや、銀時はアレを狙っている!!」

『『え?』』

と桂が銀時は何か狙っていると言いだす。

「ああ、おそらく銀さんはあの伏せカードを今ここで使つつも何だ」

と十代も気づいて、銀時が伏せてある1枚のカードを指差す。

それこそが銀時の勝利を導くカード。

「いくぜ、罠カード『オーラチャージゾーン』!! セットされているこのカードの正面に存在する自分のモンスターが戦闘で相手モンスターを攻撃する場合のみ発動可能! そのモンスターの攻撃力はダメージ計算時の間だけ攻撃力が倍になる!!」

と、さらに体全体に蒼白い闘志を放つ『青眼の究極竜』。ブルーアイズ・アルティメットドラゴン

その攻撃力はさらに増幅されて、超魔導剣士を圧倒的に上回る。

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
青眼の究極竜 ATK 9000 18000

「何イイイイ！！攻撃力18000だとオオオオ！！」

「て滅茶苦茶高エエエエエエ！！」

いくらなんでも高すぎる攻撃力に、土方も新八も驚きだす。

そして勝負はこの瞬間に決まった。

「さあ、ファイナーレの時間だ……」ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
『青眼の究極竜』、俺の怒りを込めて、全てのマヨラーにぶつけるオオ！！」

そして3頭のアギトに溜められたエネルギーは一斉に放たれる。

「アルティメット・バースト！！！！」

3つの巨大な白き閃光があわせだして、極大な白き閃光となって放たれる。

圧倒的な攻撃力の前では、流石の超魔導剣士とは言え対抗できない。

「ちい！！　だが墓地の『ガーディアン・マジシャン』の効果発動――！！　墓地にあるこのカードと墓地の魔法カード2枚をゲームから除外する事で俺が受ける戦闘ダメージを0にする――！！」

これで土方はダメージを受ける事は無く護りきれた。

「まさか、『ブラック・パレード』の効果で捨てたカードはアレだったんだ!!」

「残念だがせっかくのトドメも台無しだ。コレでためエは『オーラ―チャージゾーン』のデメリット効果で自め……」

何故なら、目の前には3体の『青眼の白龍』と憎たらしく笑う銀時がいた。

「悪いな……『融合解除』で3体の『青眼』を元の姿に戻しちゃったんだなあ。しかもバトルフェイズでの融合解除の特殊召喚だから、3体の『青眼』は攻撃可能なんだぜ？」

と字が間違えるほどに叫び、青ざめる土方。

に返す。

「さあゝて、約束どおりてめえのデッキから3枚のレアカードは貰って置くぜえ」

と銀時は『コスモクイーン』・『魔導戦斧士・バルディッシュ・エニオ』・『ブラックマジシャン』の3枚をポケットに入れる。

『コスモクイーン』はどこかのカードショップに売ればかなりの価格で売れそうだと嬉しそうに笑う。

『ブラックマジシャン』も良く見れば滅多に手に入らない初期版のカードであり、どこかで売れば高く売れる。

つまり今月の家賃を思わぬ形で問題解決出来そうだ。

「後、今デュエルモンスターズにはまってるてめえに言っておくぜ？ 決闘の勝敗を決めるのは1枚のカードだけってのはかぎらねえ。
デュエル
弱いカードをザコと呼ばわりして、1枚の強力なカードを頼ろうとしてる限りは俺に一生勝つ事は出来ねえよ」

とはつきり言いだす銀時に悔しがる土方。

「最後にてめえに言いてえ事があるけど、良いかなあ？」

と憎たらしく笑いだす銀時。

顔中に血管を浮かべて睨みつける土方を無視し、空気を大きく吸って…

「ま・け・い・ぬウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！」

笑う遊戯、呆れている十代にだんまりと啞然とする遊星。
だが土方はこの決闘^{デュエル}により、予想外の変貌をしてしまう事になる。

登場オリカ

魔力収束の杖 速効魔法

『自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター1体を選択し、フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て墓地に送る。』

墓地に送った枚数分だけ選択したモンスターの攻撃力をターン終了時まで400ポイントアップする』

魔石の宝玉魔術 通常魔法

『自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合、デッキからカードを2枚ドローする。』

また、自分フィールド上にレベル7以上の魔法使い族モンスターが存在すればさらにもう1枚ドローできる』

奇襲の竜 速効魔法

『自分の場にモンスターが存在せず、相手の場に2体以上のモンスターが存在する場合のみ発動可能。
デッキからレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する』

賢者の宝札 通常魔法

『自分の手札にこのカード以外、もしくは手札がない場合のみライフを1000支払う事で発動可能。
デッキからカードを2枚ドローする』

生贄の壺 通常魔法

『自分フィールド上に存在するモンスター1体を墓地に送り、デッキからカードを2枚ドローする。』

合成黒魔術の儀式

『自分フィールド上とデッキから、融合モンスターカードによって決められた魔法使い族モンスターを含むモンスターを除外し、魔法

使い族の融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚扱いとして特殊召喚する』

命削りの宝札 通常魔法

『手札が5枚になるようにカードをドローする。
発動してから5ターン後（自分のターンを数えて）、自分のドローフェイズ時に自分の手札を全て墓地に送る』

オーラチャージゾーン 通常罫

『セットされているこのカードの正面に存在する自分のドラゴン族モンスターが戦闘で相手モンスターを攻撃する場合のみ発動可能。
そのモンスターの攻撃力はダメージ計算時の間だけ攻撃力が倍になる。』

ターン終了時にそのモンスターを破壊して、コントローラーにその元々の攻撃力分のダメージを与える』

ガーディアン・マジシャン 2 光属性 魔法使い族 ATK 0
DEF 0

『相手モンスターの攻撃で戦闘ダメージを受ける場合、自分の墓地に存在するこのカードと魔法カード2枚を選択してゲームから除外する事で、その戦闘ダメージを0にする』

土方十四郎

使用デッキ 『ブラック・マジシャン』を中心とした魔法使い族デッキ。

魔法カードの連携を得意としている。

デッキ名 『真撰組の黒魔術師』

主力カード 『ブラック・マジシャン』

フェイト

「て、ちゃんとかつちの小説も書けえええ!!」

と『リリカル銀魂strickers』攘夷戦争鎮魂歌』のヒロイン、フェイト・テストロッサが怒りだして『バルディッシュ』から金色の魔力砲を放って、その魔力砲が黒神を飲み込む。

黒神

「ごめんなさあ〜い!!」

ID - 4 昔に出てきたカードもバージョンアップして再登場する（前書き）

黒神

「いやあ、ヤフーの無料動画で見た遊銀魂王を見ましたけど中々面白かったですなあ」

銀時

「つつか、そこの俺って使用するデッキがわくねえ？戦士族中心のシンクロデッキだし。しかもエクシーズ出ていねえじゃん！」

黒神

「まあその分、こっちはさらにオリジナリティたっぷりしますので
：デュエル
という訳で今回はカードの精霊が登場して、銀さんはあの人物と決闘します！！」

ID - 4 昔に出てきたカードもバージョンアップして再登場する

目覚めよ

と、突如何処からか声が聞こえた。

その声は女の声であり、何処と無く綺麗な感じがした。

目覚めるのです

何色にも染められない気高き孤高なる白き魂を持つ者よ

と何かに呼ばれるかのようにその男は起き上がる。

その男、坂田銀時は起き上がり周りを見渡す。

「……あり？　ここ何処？」

と最初の一言がコレであった。

突如、何にもない白い空間に飛ばされた事に唖然としている。

「確か俺ア、マヨラーの挑発に乗って気持ちよく勝利した後…お登勢の店で遊戯達の歓迎パーティをしてたよな？」

と銀時は唖然として言いだす。

実は銀時はあの後、カード屋に言って『コスモクイーン』のカードを売り出し、百万円の値段で購入できた事に大喜びした。

コレにより5か月分の家賃を払って、今後一切家賃の事でしつこく

言われないようにと一年分の家賃を先払いした。

それでも数十万円は残っていて、その金で銀時達は宴会をスナックお登勢のところでどんチャラしていた。

桂もエリザベスも一緒に付き合っていた。

その後の記憶が思いだせず、一体何があったのかもわからなかった。そんな銀時の前に…

「ようやく目覚めましたか…選ばれし者よ」

と1人の女性が現れる。

水色のサラサラとした長髪に蒼と水色のオッドアイ。

さらに白いワンピースを身に付けているなど、まさに光の聖女とも言える存在であった。

簡単に言えば…

「何で目の前に遊戯王キャラのキサラがいんの？」

と啞然として言い出す銀時。

そう、彼女の外見は何故か遊戯王に出てくるキサラというキャラである。

しかも古代エジプトの時代の人物なのに、なぜか銀時の前にいる。

「キサラ…？ ああ、確かに私はその人物に似せられていますが…違います」

「え？じゃあ誰なの？」

と銀時は誰なのかを詳しく聞きだそうとする。

すると彼女の口からとんでもない発言を聞きだす。

「今、デュエルモンスターズ界でとてつもない危機が迫っています。しかもその原因は貴方のいる世界の組織に関わっているそうなんです」

「俺のいる世界の組織…」

銀時が知っている組織と言えば、かつて共に攘夷戦争を戦って今では攘夷浪士の中でも最も過激で危険な男、高杉晋介率いる『鬼兵隊』きへいたい。

もしくは銀河系最大の犯罪組織、宇宙海賊『春雨』はるこめのどちらかである。

「デュエルモンスターズ界の危機って事は、下手すりゃ全世界は破壊されるって訳か」

「天人と言う異種生命体も関わっていて、もしかすればご主人様にも危機が迫ってきます…だから」

ブルーアイズ
と『青眼』（人間姿）はある事を銀時に伝える。

「私と契約してください！」

「は？」

突如、契約して欲しいと頼まれて啞然とする銀時。

だがそれは今後とも銀時にとって大切な事になるかもしれない。

「カードの精霊が見える決闘者デュエリストは、その精霊と契約する事でデュエルモンスターズのモンスターの能力を得る事ができます」

「マジでか！？ てか契約もあるのー！！」

「はい、私達はコレを『精霊契約儀式』エレメント・オブ・スピリット・セレモニーと言います。ですが…」

と説明する『青眼』ブルーアイズ（人間姿）は言いにくそうにとどまる。

それを銀時が呆れて先に言いだす。

「代償が必要って訳か？」

「はい…その代表は一体何なのかを決めておらず、おそらく何を失うのか分からないんですよ」

と『青眼』^{ブルーアイズ}（人間姿）は申し訳なさそうに言いだす。

つまり髪の毛が無くなってハゲになってしまうとか、自分のアナログステイックが小さくなると言う事も考えられる。

「あ、それと代償を支払うって言っても自分の体だけじゃないと思います。自分の持っている物にも影響が出てなくなってしまうんじゃないかと…」

「…おいおい、そりやおつかねえ代償支払いだなあおい…」

と銀時は呆れて言いだす。

だが今時分の主力のモンスターが真剣に説明をしている所を聞くと、嘘じゃないと確信できる。

「しゃあねえなあ…わあったよ。契約すりゃ良いんだろ？」

「本当ですか!?!」

と銀時の契約宣言に嬉しがる『青眼』^{ブルーアイズ}（人間姿）。

「じゃあ、これから精霊契約儀式を行いますので、ご主人様良いですか？」^{エレメント・トントウラット・セレモニー}

「良いぜ…さつさとやるつや」

と銀時はとりあえず契約する事にしてみる。

すると『青眼』^{ブルーアイズ}（人間姿）の胸元から光の球体を出して銀時の体に

押し込む。

そして銀時と『青眼』^{ブルーアイズ}（人間姿）の足元の周りが蒼白く輝きだす魔方陣が浮かび上がる。

「我、汝に力を分け与える！！ この身を主に対しての忠誠を誓い、命尽きるまでお供する！ その力は守る為、その強さは更なる高みを目指す為、全ての力をわが主に捧げだす！！ 精霊の力をその身に宿し力を得よ！！」

そして、白い柱が発生して2人を包み込む。

これにより銀時はカードの精霊と契約して新たな能力を得られた。

「って夢を見たわけよ」

と銀時は呆れて新八、神楽、遊戯、十代、遊星に夜中見た夢の内容を言いだす。

「へえ、何か変った夢ですね」

「てか『青眼』^{ブルーアイズ}がメスドラゴンってのが以外あったアル。私てつきりオスのほうだと思ってたアルヨ」

と新八と神楽も意外そうに言いだす。

「にしても、昨日の銀さんの決闘凄かったですね」^{デュエル}

「確かに、銀さんの決闘者としての実力はとてつもなく強かった」^{デュエリスト}

「そんなんで強く慣れるんだったら誰だって決闘王になれるわアアアア！」

「はによおおー！」

と新八は怒り出して銀時にアッパーを喰らわせる。

バシー！

「お前は勝負を舐めすぎアルよおー！」
「ぼふうっー！」

神楽も続いて怒りを込めたアッパーを炸裂させる。

「おいしいiiiiiiii！？ 何で殴るの！？ 銀さん、何か悪い事したあ！？」

「何か見るだけで強くなれるって言う言い方にムカついたんですよ！ 銀さんのその方法は凡人を見下していますー！」

「私もノリでムカついたアルー！」

「何でそんな風に聞こえるんだあー！！！！？」

銀時はどうしてそう言う風になったのか訳分からなかった。

新八も銀時に内緒で数多くの決闘デュエルをやっていた。

ちなみに全戦全敗。

神楽にいたってはただムカついただけである。

「ま…漫画の決闘デュエルを見ただけであんなに強くなれるって言うのか？」
「それって一種の天才タイプじゃねえ？」

と遊星は信じられない程青ざめて、十代に至っては銀時は天才じゃないかと思ひ込む。

「……あのう、銀さん」
「ん、何？」

と遊戯が銀時に近づいてもじもじと話しかける。

「僕と決闘デュエルをしてください！」
「やだ、めんどくさい」

ドシヤあ！！

と突如の決闘申し込みに即座に断りだした。
コレには全員（銀時、神楽、遊戯）を除いてずっこける。

「てうおーい！！ 何決闘をお断りしようとしてんだよー！！ し
かも即座につてちゃんと相手してやれよー！！」

「めんどくせえんだよ、一々決闘デュエルするの疲れるしだりいし！！」
「最悪だよこの人！！ 決闘者デュエリストとしても主人公としても駄目駄目な
んだけどー！！」

と新八は銀時の存在に呆れだした。

「し…新八さん」

「ああ、遊星さんもワザワザ警護をつけなくても良いって。もう僕
らの事は呼び捨てでもかまわないって」

「そうか…じゃあ新八、銀時って普段あんな態度なのか？」

「はい……何か、いざって時は頼りになるんですけど普段はあんな
にだらけた駄目駄目人間なんですよ」

と新八は呆れて言いだす。

しかも、銀時はまったくヤル気を出す様子がない。

「とにかく決闘^{デュエル}なら他の奴としてくれよな…さて、今日のお目覚めテレビでも見るか」

と銀時はリモコンでテレビをつけると、グットタイミングである人物が移っていた。

その人物こそ、お天気お姉さんとして大人気の女性であり銀時の大ファンである結野アナ。

本名：結野クリステル。

結野衆の一族の1人であり、陰陽師である。

《はあい。それでは今日のブラック星座占いコーナーです》

とクリステルはニツコリと笑って言いだす。

《今日一番ツイていないのはてんびん座の貴方》
「げ、俺かよ…」

と、銀時はいやいやな顔をする。
だが次のクリステルの言葉が、銀時の決闘者^{デュエリスト}としての道を進ませるきっかけとなる。

《特に白い天然パーマでデュエルモンスターのカードを持っている貴方、他人に決闘^{デュエル}を申し込まれても断れば…》

とクリステルはとてつもない一言を言いだす。

《その場で死んじやいまあゝす》

そんなこんなで銀時と遊戯の決闘^{デュエル}が始まる。

テーブルにデュエルモンスターのフィールドゾーンが出て、銀時と遊戯は互いにデッキをシャッフルしてデッキゾーンにデッキを置く。

そして互いにカードを5枚ドローする。

「やるからには遠慮はいらねえぜ」

「はい、僕も全力で相手をします!!」

「それじゃ、決闘^{デュエル}開始!!」

と新八が決闘開始宣言を言いだして銀時と遊戯も互いにデッキからカードを5枚ドローする。

『『決闘^{デュエル}!!』』

銀時 LP：8000 手札5枚

遊戯 LP：8000 手札5枚

「先行はやるから、かかってこいよ」

「うん、僕のターンドロー!!」

遊戯はデッキからカードを1枚ドロウして、ドロウしたカードを見て素早く召喚する。

「『翻弄するエルフの剣士』を召喚!」

とフィールド上に現れたのは耳が長く剣士の衣装を身に付けたエルフ。

その名は『翻弄するエルフの剣士』。

攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されないモンスター。

だが、そんな事より驚くべき事は…

デュエルディスク

「アレ? 2人とも決闘盤をセットしてないよね? 何でただのデュエルモンスターズゾーンなのにゾビットビジョンが付いている訳?」

「ああ…何か雰囲気を表す為につて源外の爺さんが昨晚この最新作の『ゾビット・ゾーン』つつうカードを置くだけで立体感を表す机をもらったんだよ」

「それつまりこの机自体が源外さんの発明したからくり機械!？」

デュエル

つまり決闘をより楽しくする為に作られたようだ。

デュエル

コレには遊戯達もより決闘が楽しめそうだと確信する。

「さらに装備魔法『宝石硬盾・ジュエル・シールド』を『翻弄するエルフの剣士』に装備」

すると宝石の様な輝きをした盾が現れ、『エルフの剣士』は守備表

示となってその盾を装着して防壁モードになる。

「『ジュエルシールド』を装備したモンスターの表示形式は守備表示となって、守備力を800ポイントアップさせる」

翻弄するエルフの剣士 DEF 1200 2000

「『翻弄するエルフの剣士』は『エルフの剣士』のバージョンアップカードであり、攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない・・・つまり攻撃力が守備力のどちらかを1900以上あげれば『翻弄するエルフの剣士』は完全に戦闘では破壊されない」
「なるほど、銀さんのパワーデッキに対抗して護りに固めるってわけですね」

納得いくように2人は頷く。

「僕はカードを1枚セットしてターンエンド」(手札3)

「俺のターン、ドロー」

と銀時は冷静にカードをドローする。

ドローしたカードを見てニヤリと笑う。

「バイズ・ドラゴンを召喚!!」

と銀時はフィールド上にモンスターを特殊召喚する。

禍々しい上級ドラゴンの召喚に遊戯は驚きだす。

「こいつは自分フィールド上にモンスターが存在しなく相手の場にモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる!!
それで魔法カード『巨竜の羽ばたき』!」

「え？」

すると、『バイズ・ドラゴン』は大きく翼を羽ばたいて銀時の手札に戻り遊戯の魔法・罠ゾーンに存在するカードを全て破壊する。

そして『エルフの剣士』の『ジュエル・シールド』も粉々に破壊された。

「こいつはレベル5以上のドラゴン族モンスターを手札に戻し、フィールド上の魔法・罠ゾーンに存在するカードを全て破壊する！」
「そんな――！」

まさかのエルフガードナーコンボがこうもあっさりと敗れてしまった事に驚く遊戯。

強烈な烈風を放つ『バイズ・ドラゴン』。

これにより『翻弄するエルフの剣士』が装備している『ジュエルシールド』は消滅する。

翻弄するエルフの剣士 DEF 2000 1200

「なるほど、『バイズ・ドラゴン』は手札に存在して自分フィールド上にモンスターが存在しなく相手の場にモンスターが存在する限り特殊召喚が可能なモンスター」

「しかも『ジュエル・シールド』が破壊されても『エルフの剣士』は残るから、まだ『バイズ・ドラゴン』はフィールド上に召喚される」

と遊星も十代も銀時のナイスな戦術に良い判断だと頷く。

「だけど、『ジュエル・シールド』はカード効果で破壊された場合、デッキからカードを1枚ドローする――！」

「それがどうした…『ランス・リンドブルム』を召喚！」

今度は、フィールド上に騎士の鎧を身に付けた槍使いの竜人が現れる。

攻撃力1800と、『翻弄するエルフの剣士』を倒すのに十分な条件を持っている。

「行くぜ、『ランス・リンドブルム』で『エルフの剣士』に攻撃！
！疾風・竜激槍舞！！」

と素早く槍を連続に突き出す竜騎士。

『翻弄するエルフの剣士』は体中を疲れて悲鳴を上げて消滅した。

「『エルフの剣士』が！」

遊戯 LP：8000 7400

「『ランス・リンドブルム』は守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていればその数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える効果を持っている」

「貫通効果モンスターか！！」

「とりあえず、俺はコレでターン終了な」（手札3枚）

と銀時はこのままターンを終了した。
だがこの行為に不思議がる新八。

「あれ、何で銀さん『バイス・ドラゴン』を召喚しなかったんですか？そうすれば2体のモンスターの総攻撃で大ダメージを与えるのに…？」

「わかんないアルか新八？」

と神楽は新八にどうして銀時が『バイス・ドラゴン』を召喚しなかったのかを言いだす。

「そんな事してもユツキーのライフは0にならないね。しかも序盤から飛ばしすぎたら逆に銀ちゃんが痛い目にあう恐れがあるね。だからああして次の上級モンスターの召喚の布石として残していくアル」

と神楽は銀時の次の狙いの為に保存していると新八に教える。

「そんなことも知らないあるかばっつあん？ だからお前は何をやっても駄目アル、そしてだから新一じゃなく新八アル、なんだよ八つて？」

「んだとござるあー！！ それに何だよ神楽ちゃん、少し僕より知識があるからってそこまで言う必要はないだろー！！」

と新八は怒鳴ってツツコム。

「落ち着け、新八ー！！」

「まあまあ、初心者じゃ誰だって分からねえ事はあるって」

と遊星と十代は暴走する新八を落ち着かせる2人。
十代のターンが始まる。

「僕のターン、ドローー！！『グリーン・ガジェット』を召喚ー！！」

フィールド上に現れたのは緑色の歯車のモンスター。

銀時は遊戯の狙いは何かを予想する。

「『グリーン・ガジェット』は召喚に成功した場合、デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加える事ができる！」

と遊戯はデッキから『レッド・ガジェット』のカードを手札に加える。

しかしこのままでは不味いと、遊戯は2枚のカードをセットする。

「カードを2枚セットして、ターンエンド」(手札2枚)

(あの伏せカード、その内1枚はおそらくは『機動砦 ストロング・ホールド』…不味いなあアレをだされちまったら少し厄介だ)

「俺のターン、ドロー!!」

と銀時はカードをドローする。

ドローしたカードを見てにやりと笑う。

「うっしや! 魔法カード『大嵐』!!コレでお前の伏せカードは全て全滅だなあ」

と嬉しそうに喜ぶ銀時。

しかし遊戯はここで伏せカードを発動する。

「カウンター罠カード『デーモンを呼ぶ召喚術』!相手が魔法カードを発動した場合、そのカードの発動を無効にする!」

「ええ!?!」

とまさかの状況に銀時は青ざめる。

すると強烈に発生した嵐が嘘だったかのように消えていく。

「そしてライフを1000支払いデッキか手札から『デーモンの召喚』か『暗黒魔族ギルファア・デーモン』のどちらか1体を特殊召

喚する！僕は『悪魔王・デーモン』をデッキから特殊召喚する！！」

遊戯 LP：7400 6400

遊戯のフィールド上に、邪悪なる悪魔が光臨された。
禍々しい角に漆黒の翼。

そして凶暴なる闘志。

まさに悪魔の王の名にふさわしい強さを誇っている。
そのモンスターの名は『デーモンの召喚』。
遊戯の主力カードの1枚である。

「え、ちょっと待って！！そのカードのカード名って『悪魔王・デーモン』ですよ！！『デーモンの召喚』でも『暗黒魔族ギルファ・デーモン』でも無いのに何で！？」

「いや…『悪魔王・デーモン』はルール上カード名を『デーモンの召喚』として扱える、いわゆる『デーモンの召喚』のバージョンアップ版カードなんだぜ？」

「嘘お！！」

十代の説明に驚きだす新八。
そんな新八に呆れだす神楽。

「だからばつつぁんは新ハアル」

「それもう良いだろう！！」

と神楽の毒舌に新八は怒鳴って叫ぶ。

一方の銀時はまさかの上級モンスターの召喚に戸惑う。

（チィ、まさか上級モンスターを召喚する事になるとあ……ここは守りを固めるしか他ねえ）

「モンスターをセットして『ランス・リンドブルム』を守備表示に変更！」

と銀時は何故か『グリーン・ガジェット』を攻撃しないで護りを固めだす。

「カードを1枚セットしてターンエンド」(手札1枚)

銀時のターンが終わると…

「ターンエンド時に永続罠『機動砦 ストロング・ホールド』発動
！！ 現れよ『ストロング・ホールド』！！」

とフィールド上に1体の巨大機動砦が現れる。

そのモンスターこそ罠カードによって召喚された特殊型罠モンスター、^{トラップ・モンスター}『T・M』。

守備力は2000を誇るが攻撃力は0。

「僕のターン、ドロー！！」^{デュアル・サモン}『二重召喚』を発動！！これで僕は2回の通常召喚を行える！！」

「げえ、凄くやばい予感がしたんだけど！？」

この場での2回召喚。

さらに手札にある『レッド・ガジェット』とフィールド上に存在する『グリーン・ガジェット』と『ストロング・ホールド』。

最悪な状況になってきた。

『レッド・ガジェット』を召喚！！」

遊戯は素早く新たなモンスターを召喚する。

するとフィールド上に現れたのは赤い歯車のモンスター。

「さらに『レッド・ガジェット』の効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を1枚手札に加える」

遊戯はそのままデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加えると伏せカードを発動する。

「そして2回目の通常召喚で『イエロー・ガジェット』を召喚!!」

と遊戯はフィールド上にさらに『イエロー・ガジェット』を召喚する。

黄色い歯車のモンスターがフィールド上に姿を現した。

コレでガジェット・トリオが揃ったことで、『ストロング・ホールド』の効果が発動する。

「『グリーン』・『レッド』・『イエロー』、3体のガジェットが揃った事で、『ストロング・ホールド』の攻撃力は3000となる!!」

機動砦 ストロング・ホールド ATK 3000

「げえ、銀さん大ピンチい!!」

「『ストロング・ホールド』を攻撃表示に変更し、バトルフェイズに入る!」

と遊戯は一気に勝負に出る。

機動砦が攻撃態勢に入って自分のターンが始まる。

「行くよ、『デーモン』で『ランド・リンドブルム』に攻撃!!
魔降雷!!」

悪魔王は体中から稲妻を発生して天に向けて放たれる。
そして空は漆黒の雲に包まれ、そこから稲妻が落下して竜騎士を破壊する。

「チイ!!」

「続いて、『ストロング・ホールド』で伏せモンスターに攻撃!!
ギガドンナックル!!」

と機動砦は巨大な拳でそのまま伏せモンスターを破壊する。
破壊したモンスターは『ゴレム・ドラゴン』。
岩石の竜が悲鳴を上げて消滅していく。

「そして3体のガジェットでダイレクトアタック!! トリプルガ
ジェットアタック!!」

「何か無理に技名言っていない!?!」

と思わずツツコム銀時。

それを無視するかのようにガジェットトリオは銀時に体当たりして
大ダメージを与える。

銀時 LP : 8000 6600 5300 4100

「だけど僕はまだターンを終わらない。メインフェイズ2に入りレ
ベル4の『グリーン』・『レッド』・『イエロー』の3体のガジェ
ットをオーバーレイユニット!!」

「マジでか!?!」

と、3体のガジェットは光の球体と化して円を描くように高速に回りだす。

これはエクシーズ召喚方法である。

そして遊戯の場もブラックホールのような空間が現れる。

「3体のモンスターで、オーバーレイネットアイを構築！！エクシーズ召喚！！」

3つの球体がブラックホールに飲み込まれ、そのブラックホールが大爆発して中から1体のモンスターが現れる。

「召喚せよ『精霊召喚師・エレメント・サモンキャスター』！！」

とフィールド上に現れたのは美しき白銀の女魔術士。

ショートヘアで翡翠色と黄色のオッドアイ。

さらに先が太陽の形をしている黄金の杖を持っていて、左手に魔術書を持っている。

「守備力2800のモンスターを召喚したってか…だがガジェットのトリオがいなくなったことで、お前の『ストロング・ホールド』の攻撃力は0になるからな」

機動砦 ストロング・ホールド ATK3000 0

「分かっている、だから僕は『エレメント・サモンキャスター』の効果を発動する！オーバーレイを1つ取り除き、デッキから攻撃力1500以下でレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する！」

と光の球体が魔術書に飲み込まれ、召喚師の目の前で太陽の様な魔方陣が現れる。

そして太陽の杖から魔力が放たれ、その魔方陣に注入して召喚魔術を発生させる。

『デッキから、チューナーモンスター『柴戦士タロ』を召喚！』

フィールド上に現れたのは戦士の鎧を身に付けた犬である。エクシーズ召喚の次はシンクロ召喚狙いである。

『レベル4の『ストロング・ホールド』にレベル2の『柴戦士タロ』をチューニング！』

と『柴戦士タロ』が2つの輪となり、『ストロング・ホールド』を包み込んで『ストロング・ホールド』は4つの星となった。

『地を這う騎士よ、戦場において勝利に導け！シンクロ召喚！』

と2つの輪から白い光柱が表れた。その中から1体の騎士が光臨する。

『駆け抜ける、『大地の騎士ガイアナイト』！』

と遊戯のフィールド上に1体の騎士が現れる。

騎馬に乗り、2つのスピアを持っている。

攻撃力2600と結構高めだが効果は大して持っていない。

『へえー、いまだきそのカードを使う人があるんだ。レベル6の戦士族シンクロモンスターなら『ゴヨウ・ガーディアン』の方が良い

のに」

バシー！！

「ぼふぁあぁ！？」

「何言っているアルカアアア！！私達は権力に屈しちゃいけないアルウウウウー！！」

と新八の思わぬ一言に神楽は怒り出して剛拳1発炸裂する。

「ちょ、神楽！！」

「いくらなんでもそれはやりすぎだー！！」

驚いている十代と遊星は神楽の暴走を止める。

「まあ、『ゴヨウガーディアン』はともかくとしてコレってやべえんじゃないの？」

と銀時は青ざめて言いだす。

何故なら、遊戯の場には攻撃力2500の『悪魔王デーモン』、守備力2800の『精霊召喚師・エレメント』、そして攻撃力2600の『大地の騎士ガイアナイト』が存在する。

上級モンスターをこつも速く召喚するとは思ってもよらなかった銀時である。

「僕はコレでターンを終了します」(手札2枚)

と遊戯はターンを終了する。

(なるほど、やっぱり主人公だけあって結構強え…だがいくら上級モ

ンスターを予防が手はある！)

「俺のターン、ドロー！！手札より『愚かな埋葬』を発動！！墓地から『青眼の白龍』^{ブルーアイズ・ホワイトドラゴン}を墓地に送るからな」

「え！？」

まさかのエースモンスターを速効に墓地に送る銀時。

それは一体どういう意味なのかを分かりもしない遊戯だが、狙いは何なのかすぐに理解する。

「さらに、『デコイドラゴン』を召喚してターンエンド」

と銀時はフィールド上に可愛らしい幼竜を召喚する。

そのモンスターこそ『デコイドラゴン』。

上級モンスターが墓地に眠るとき真の力を発揮するモンスター。

「おお、コレは『ドラゴニック・ガーディアン』コンボアル！！」

「何なんだよ神楽！？ 其中二設定臭いコンボ名！？」

神楽のコンボ名に呆れてしまう銀時。

「要するに、『デコイドラゴン』が墓地の上級モンスターを盾代わりにして相手の攻撃を防ぐコンボアル」

と自身持つて言いだす神楽。

銀時が墓地に送ったモンスターは攻撃力3000の『青眼』^{ブルーアイズ}。

遊戯の場に存在するモンスターはかなり強力なモンスターばかりであるが、それでも攻撃力は『青眼』^{ブルーアイズ}に届かない。

「僕のターン、ドロー！！」

と遊戯は逆転を狙って素早くドローをする。

「『エレメント・サモンキャスター』の効果を発動！ オーバーレイを1つ取り除き、デッキから『祈りを込めるホーリー・エルフ』を特殊召喚！」

と光の球体が魔術書に飲み込まれ、召喚師の目の前で太陽の様な魔方陣が現れる。

そして太陽の杖から魔力が放たれ、その魔方陣から1体の聖女が光臨する。

『ホーリー・エルフ』のバージョンアップ版のカード『祈りを込めるホーリーエルフ』である。

「このカードの召喚または特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上の空いているモンスターゾーン一箇所選択する！！僕の場に空いているモンスターゾーンは一番右！！」

すると『ホーリーエルフ』は祈りを唱え始める。
空いているモンスターゾーンに白い光子が包まれる。

「カードを2枚セットして、手札から『疾風の暗黒騎士ガイア』をリリース無しで通常召喚！！」

と遊戯は2枚のカードをセットし、素早くさらなる上級モンスターを召喚した。

フィールド上に現れたのは『ガイアナイト』とは違う暗黒の騎士。
真紅のスピアを2つ持っていて、漆黒の騎馬に乗った騎士。
その名は『暗黒騎士ガイア』。

攻撃力2300のレベル7の上級モンスターである。

「『疾風の暗黒騎士ガイア』は、自分の手札がこのカード1枚の場合リリースなしで召喚する事ができる!!」

「また上級モンスターを召喚!？」

まさかの連続上級モンスターの召喚に流石に驚きだす遊星。
しかもそれだけじゃない。

『疾風の暗黒騎士ガイア』が召喚されたモンスターゾーンには、『ホーリー・エルフ』が聖術によってかけた補助呪文がかけられている。

「そして『祈りを込めるホーリー・エルフ』が指定したモンスターゾーンに召喚された『疾風の暗黒騎士ガイア』は『ホーリー・エルフ』の攻撃力分だけアップする!」

「何イ!!」

すると『ガイア』の体全体が光の光子に包まれて、聖なる波動によって力が増幅する。

疾風の暗黒騎士ガイア ATK2300 3100

「ブルーアイズ ゼルゼルゼルゼルゼルゼルゼル!? 攻撃力が『青眼』を超えたアアア!!」

「さらにリバーズカードオープン! 『ジャンク・アタック』を発動して『暗黒騎士ガイア』に装備!!」

「アレは、戦闘で相手モンスターを破壊した場合、その攻撃力の半

分の数値分だけ相手にダメージを与えるカードネ!!」

「つまり、銀さんは『デコイドラゴン』で『青眼』を召喚しても、
確実に1500ポイントのダメージを受けちゃいますよ!!」

弱気な雰囲気とは裏腹の上級モンスター連続攻め。

コレこそが遊戯の実力である。

「行け、『疾風の暗黒騎士ガイア』!!『デコイドラゴン』に攻撃
だ!!」

「ちい、『デコイ・ドラゴン』の効果発動：墓地から『青眼』を生
還させる!!」

と銀時は苦しそくに『青眼』を召喚する。

フィールド上に生還された純白に輝きだすサファイアの様な瞳をし
た美しき龍。

伝説のドラゴンが銀時の場に光臨した。

だが何故か攻撃表示で特殊召喚された。

これは一体どう言う意味なのかと遊戯も啞然とする。
しかし今はそんなの関係なかった。

「いくら『青眼』でもパワーアップした『ガイア』には勝てない!
スパイラル・シナイパー
！螺旋槍殺!!」

疾風の暗黒騎士はそのまま突進して、スピアで螺旋の様な高速回転
をした突きを『青眼』に向けて放つが…

「かかったな？」

「え？」

と突如、銀時がにやりとした笑いを浮かべる。
ここで2ターン前にセットした伏せカードを発動する。

「速効魔法『収縮』を発動!!」

「ええ!!」

「あ、あれはモンスター1体を選択してその元々の攻撃力を半分に
する攻撃力弱体カード!!」

と神楽がまさかの伏せカードに驚きだして言いだす。
すると、暗黒騎士の体が徐々に小さくなっていき攻撃力も下がって
いく。

疾風の暗黒騎士ガイア ATK 3100 1950

「しまった!!」

「行けええ! 反撃の爆裂疾風弾!!」
バースト・ストリーム

と白龍はアギトを開き、そこからとてつもないエネルギーを溜め込
む。

そして一気に青白い波動砲を放ち、暗黒騎士を跡形も無く粉碎する。

「『ガイア』が!!」

遊戯 LP 6400 5350

「お前、俺の伏せカードがブラフだとわかって攻撃しただろ?」

と憎たらしく笑って言いだす銀時。
口にはださないが凶星である。

「前のターンで俺がカードをセットした事を少し警戒しながらも攻撃し、攻撃が通ってブラフだと思い込んだ。そして俺が『青眼』と『デコイドラゴン』の鉄壁コンボを用意した瞬間にお前はすぐに『ブルーアイズ青眼』を超える攻撃力を用意する為に行動を行った」
「うう……」

「見え見えすぎなんだよ……お前の考え。いくらカウンター罠カードじゃねえからって魔法カードでも相手のターンにセットされた状況で発動できる速効魔法がある事を警戒しなきゃ行けねえよ！」
「まさか、攻撃されたときでもセットしたカードを発動しなかったのは『ブルーアイズ青眼』の反撃で返り討ちにする為だったとは……」

遊戯の考えの甘さを突いた銀時の戦術。
コレには遊星も感服した。

「……だったらオーバーレイを1つ取り除き、『エレメント・サモンキヤスター』の効果発動！！デッキから攻撃力1500以下のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する！『クリッター』を召喚……！」

と光の球体が魔術書に飲み込まれ、召喚師の目の前で太陽の様な魔方陣が現れる。
そして太陽の杖から魔力が放たれ、その魔方陣に注入して新たなモンスターを召喚する。

現れたのは守備体制の三つ目の小悪魔。
破壊された場合、デッキから攻撃力1500以下のモンスター1枚を手札に加えるカード。

「そして全てのモンスターを守備表示に変更してターンエンド!!」
遊戯のターンが終わり、銀時のターンが始まる。

「俺のターン、ドロー」

とドローしたカードを見てにやけだす銀時。

「悪いけど全てのモンスター全滅させてもらっわ。手札より魔法カード『滅びの爆裂疾風弾』を発動!!」

「『青眼』の攻撃名と同じ名前のカード!？」
「『青眼』専用の魔法カードなのか？」

と十代も遊星もそのカードに注目する。

「自分フィールド上に『青眼の白龍』が存在する場合、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する!」
「そんな!!」

まさに禁止カードとして認定されている『サンダー・ボルト』級の効果。

そして再び白き龍はアギトを開きそこからエネルギーを大量収束して、一気に放つ。

「いくぜ、滅びの爆裂疾風弾!!」

と一気に放たれる破壊の閃光。
強烈な波動砲は容赦なく、遊戯の場のモンスターを塵と化して全滅した。

「す…凄い、遊戯の場に存在していた5体の場のモンスターが一瞬で全滅した…！」

「そしてフィールドはがら空きだから、一気に遊戯君にダイレクトアタックが出来る…！」

と遊星も新八も一気にモンスターを全て破壊した銀時に驚きだす。だが…新八の言うとおりに攻撃はできない。

「何言っているアルカ、ぱつつあん…… 『滅びの爆裂疾風弾』^{バースト・ストリーム}を発動したターンは『青眼の白龍』^{ブルーアイズ・ホワイトドラゴン}は攻撃できないアル」

「え、そうなの…？」

と神楽の言う事に大量に汗を流す新八。

「……新八、まさか知らなかったのか？」

「何か新八って神楽よりカード知識が劣っているんじゃないか？」

と哀れ眼で新八を見る遊星と十代。
恥ずかしさの余りに新八は…

「し…知っしゅちゃし…！少し慌てて咲きばしゅってただけだしゅ…！」

「言っている事がおかしいネ、大丈夫アルカ新八？」

と平然と嘘を言いだす新八。

そんな新八に心配そうに言いだす神楽。

「まさか…一気にモンスターが全滅するなんて…だけど『クリッター』の効果でデッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手

札に加える。僕は『マシユマロン』を手札に加える！」

遊戯は自分フィールド上に存在していたモンスターの全滅に驚いていたが、すぐさま『クリッター』を手札に加える。

「どんなにモンスターをばんばん出そうが、巨大な壁を越えられなきゃその連続召喚は意味がねえ！ 遊戯、お前は俺の伏せカードをブラフだと思って油断した結果…俺に『青眼』の召喚を許しちゃったあぐくに自分の大切なモンスターも失っちゃった。もし本当の戦場でそんな事になっちゃったら…お前、仲間を道連れにして死んだぞ」

「ぐ…」

銀時の言う事に否定できない遊戯。

確かに今の『収縮』のセットはもっと警戒すべきだったと反省する。遊戯は悔しそうに右腕を握る。

「ちょうど良い機会だ…てめエに本当の決闘^{デュエル}って奴を教えてやるよ」

登場オリカ紹介

宝石硬盾・ジュエル・シールド

装備魔法

『攻撃力・守備力1500以下のモンスターにのみ装備可能。』

装備モンスターの表示形式が攻撃表示の場合、装備時に守備表示に変更する。

装備モンスターの守備力は800ポイントアップする。

このカードが相手の魔法・罠カードの効果で破壊された場合、コントローラーはデッキからカードを1枚ドローする。』

デーモンを呼ぶ召喚術 カウンター罠

『相手が魔法カードを発動した場合のみ発動可能。』

そのカードの発動を無効にし、ライフを1000支払いデッキが手札から『デーモンの召喚』か『暗黒魔族ギルファア・デーモン』のどちらか1体を特殊召喚する。』

悪魔王・デーモン	7	闇属性	悪魔族	ATK2500	DE
F1200					

『このカードは、ルール上カード名を「デーモンの召喚」として扱う。』

相手フィールド上にモンスターが存在する場合、このカードはリリース1体で召喚する事ができる。

このカードは水属性モンスターを攻撃する場合、ダメージステイップ時にそのモンスターの攻撃力分だけアップする。

自分の手札に存在する「魔霧雨」を墓地に送る事で、以下の効果が発動する。

ターン終了まで相手フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスター以外のモンスターの属性を全て水属性に変更し、機械族モンスターの攻撃力はそのレベルの数×300ポイントダウンする。

そしてフィールド上に存在する炎族または炎属性モンスターを全て墓地に送る』

精霊召喚師・エレメント・サモンキャスター 4 光属性 魔法
使い族 ATK2200 DEF2800

エクシーズ：攻撃力1500以下のレベル4以下のモンスター3体

『このカードは、エクシーズ召喚でしか特殊召喚できない。』

このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、デッキまたは手札から攻撃力1500以下のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、リリースもできない』

祈りを込めるホーリー・エルフ 4 光属性 魔法使い族 AT
K800 DEF2000

『このカードはルール上、カード名を『ホーリー・エルフ』として扱う。』

このカードの召喚または特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上の空いているモンスターゾーン1体を選択する。

選択したモンスターゾーンにモンスターが召喚または特殊召喚された場合、このカードがフィールド上に存在する限り、そのモンスターの攻撃力はこのカードの攻撃力分だけアップする』

ID・4 昔に出てきたカードもバージョンアップして再登場する（後書き）

遊戯

「僕のデッキって、何か原作に出てきたカードのバージョンアップ版が多いんだね」

黒神

「そう何です、その理由は次回で明らかになりますのでご注目して置いてください」

十代

「つつか俺も速く決闘^{デュエル}してえな」

黒神

「この次にさせますのもうちちょっとお待ちください」

I D - 5 勝負にもっとも大切な事は諦めない勇気（前書き）

銀時と遊戯。

ついに決着！！

そして契約した銀時の代償とは！？

黒神

「と言う訳で始まります！！」

ID - 5 勝負にもっとも大切な事は諦めない勇氣

銀時 LP 4100

場

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

『青眼の白龍』（攻撃表示）

『デコイドラゴン』（攻撃表示）

遊戯 LP 5350 手札1枚（『マッシュマロン』） 伏せカード
1枚

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

銀時の『青眼の白龍』の召喚に、一気に形勢逆転された遊戯。

しかもフィールド上に大量のモンスターを召喚したにもかかわらず一瞬にして全滅。

これぞ銀時の底力であると遊戯は思い込む。

「とりあえず『デコイドラゴン』を守備表示にしてターンエンドな
（強い、改めて決闘する^{デュエル}と銀さんの底力を感じる…これはおそらく
…）

遊戯はある人物の存在を思い浮かべる。

そう、その人物こそ遊戯にとって大きな壁となる存在。

「…て言うより銀さん、何で『デコイドラゴン』…」

と途中で言うのを止めだす新八。

どうして『デコイドラゴン』を攻撃させなかったのか不思議に思う以前にまた余計な事を喋ったら馬鹿にされると思い黙り込んだ。すると神楽が言いだす。

「お前、全然わかってねエな。『デコイドラゴン』の効果が発揮されるのはレベル7以上のドラゴン族が存在する時ネ。だけど墓地に存在してた『青眼』^{ブルーアイズ}は召喚されたから銀ちゃんの墓地にもう『デコイドラゴン』の効果で護りきれぬモンスターはいないネ」
「ううー!!」

とそうであつたと言う表情をする新八。

「って、神楽ちゃん! どうしてそこまで無駄にデュエルモンスターの知識があるの!？」

「いやあ、銀ちゃんが気まぐれに遊戯王の漫画を読ませてくれた事があるから、デュエルモンスターの最新情報と新カードの知識も頭の中に入ってるアル」

「てうおーい!! それ銀さんと全然変らねえよ!! だったら何でさっき銀さんをぶん殴った訳!？」

「乗リアル!!」

と自信満々に答える神楽。

コレには呆れてなんともいえない新八。

(だけど僕の手札には、マシユマロンがいる!)

「僕のターン、ドロー!! モンスターをセットしてターン終了!」

(手札1枚)

と遊戯は『マシユマロン』をセットしてターンを終了させる。

先頭で破壊されないモンスターであれば、すぐに攻撃はされない。
しかし…

「俺のターン、ドロー!!」

銀時が素早くカードをドローする。

「もうそのセットモンスターが『マシユマロン』っての分かってんだよ!! 魔法カード『守備封じ』!」
「ああ!」

すると、裏守備表示の『マシユマロン』が姿を現した。
マシユマロのように弾力のアル無敵の体。

しかも裏守備表示の時に攻撃された場合、相手に1000ポイントのダメージを与える。
だがそれが攻撃表示にされてしまえば…

「だから、お前の手の内は分かってるっての!! 滅びの爆裂疾風^{バースト・ストリ}弾!!」

と『青眼の白龍』が口から蒼白い閃光を放って『マシユマロン』に攻撃する。

『マシユマロン』は破壊されないが、そのとてつもない衝撃は容赦なく遊戯に襲い掛かる。

「うわああ!!」

遊戯 LP: 5350 2650

と遊戯のライフが減り続ける。

「ターンエンド！」

絶対無敵の壁のモンスターでも、自分のライフは護れないのかと悔やむ。

それでも自分のターンを進める遊戯。

「僕のターン、ドロー！」

勢い良くカードをドローすると、ドローしたカードを見て弱点の手口を見つけた。

（よし、これなら！！）

「『サイレント・マジシャン LV4』を召喚！」

フィールド上に現れたのは白き魔術衣装を身に付けた白魔導師。攻撃力1000の低級モンスターだが、銀時は遊戯のそのモンスターがどれだけ厄介なのかを知る。

「げえ、それは『サイレント・マジシャン』！！ 魔法使い族最強のモンスターの進化前のカード！」

「そう……このカードは相手がドローする度に魔力カウンターが載せられて魔力カウンター1個につき攻撃力500ポイントアップするカード……！」

と遊戯も自身を持って言いだす。
しかもそれだけじゃない。

「まさか、ユツキーはあのモンスターを召喚するアルカ！？デュエルモンスターズ最強の魔法使い族と恐れられた『サイレント・マジシャン LV8』を……」

「ああ、『サイレント・マジシャン』はデュエルモンスターズ界でも最強の魔法使い族と恐れられて、攻撃力はあの『青眼』^{ブルーアイズ}を上回るらしいぜ」

まさかの最強白魔術師の存在に驚く神楽。

十代も『サイレント・マジシャン』こそが遊戯のエースカードであると言いだす。

「そして『マシユマロン』を守備表示にして、永続魔法『マシユマロンのメガネ』を発動……」

すると、銀時の『青眼』^{ブルーアイズ}の眼の何故か『マシユマロン』の絵が描かれているメガネが出ていた。

「おい、何か俺の『青眼』^{ブルーアイズ}に変なメガネがかけられてるぞ……！ぱつつあんじゃあるまいし……！」

「てうおーい……！それは僕のメガネも変って言いたいのかよオオ……！」

と銀時の一言に怒鳴って叫ぶ新八。

「このカードと『マシユマロン』が存在する限り、相手は『マシユマロン』以外のモンスターに攻撃できない……！僕はコレでターンエンド……！」

（まじいな……今俺の手札は0だからあのカードを駆除する余裕はねえ……『サイレント・マジシャン』が進化する前に何とか止めねえと……）

「俺のターン、ドロー!!」

と素早くカードをドローする銀時。

「この瞬間、『サイレント・マジシャン LV4』の効果発動!!
魔力カウンターを載せて攻撃力を500ポイントアップする!」

サイレント・マジシャン	LV4	ATK1000	1500	魔
力カウンター	0	1個		

このまま行けば徐々に遊戲の『サイレント・マジシャン LV4』
は攻撃力を上昇して銀時の『ブルーアイズ青眼』を超える攻撃力となる。
しかしドローしたカードを見た銀時は、

(よし、こいつで!!)

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド!!」

セットしただけでターンを終える銀時。

神楽、十代、遊星はこの状況で銀時が伏せたカードは何なのかを理
解した。

「僕のターン、ドロー!!僕はコレでターンを終了!!」(手札1
枚)

ドローしたカードを見て、今は必要ないと思った遊戲。
そして銀時のターンが始まる。

「俺のターン、ドロー!!」

サイレント・マジシャン LV 4 ATK 1500 2000 魔
力カウンター 1 2個

「さあーって、そろそろ攻撃させてもらうとするか……永続罷力ー
ド『竜の逆鱗』！！コレで俺の場のドラゴン族モンスターは貫通効
果を得られるからなあ！！」
「そんな！！」

つまり『マシユマロン』の絶対無敵効果も、貫通効果を得た『青眼』
の前には無力当然だった。

「いくぜ！！『青眼』^{ブルーアイズ}で『マシユマロン』に攻撃！！ぱつつあん、
眼鏡借りるわ」

とすると突如、銀時は素早く新八のメガネを奪い取ってかける。

「ちょ、いきなり何をするんですか！！」

と流石に怒鳴りだす新八。

しかし……

「眼鏡の底力、得と受けてみやがれ！！滅びの眼鏡疾風弾！！」
『『メガネストリームって何イイイイ！？』』^{メガネストリーム}

誰もありえない攻撃名にツツコミだす。
と『マシユマロン』のメガネ^{ブルーアイズ}をかけた『青眼』が、何故か眼鏡から
蒼白いレーザー光線を放って『マシユマロン』に攻撃した。

『マシユマロン』は破壊されなかったが、その衝撃は遊戯に襲い掛かる。

「うあああああああああ!!」

遊戯 LP：2650 150

「てちよつと待てエエエ!! まさか眼鏡を取り上げたのはワザワザ『マシユマロンのメガネ』をかけた『青眼』^{ブルーアイズ}に合わせる為に、こんな糞くだらねえネタを疲労する為かアアア!!」

「そのとおりだよ、新八^{メガネ}」

「て、眼鏡を取り上げて眼鏡に向かって言うなアアア!! 後、新八と書いてメガネと言うなアアア!!」

新八の眼鏡を新八と思って言い出す銀時。

それに怒り出す新八。

そして眼鏡を素早く新八に返す銀時であった。

一方の遊戯はもう勝てる見込みがなくなった事に絶望する。

(勝てない…僕じゃ銀さんに勝てない!)

悔しく思い込む遊戯。

^{ブルーアイズ}

貫通効果まで加えた『青眼』をどう止めれば良いのか分からなくなつた。

「……銀さん、僕…もつ……」

と諦めてサレンダーをしようとする遊戯。

今の自分じゃ銀時に勝つ事自体、可笑しかったからだ。
そして彼がデッキの上から手を置こうとした瞬間…

「わん！」

突如、定春がその前右足に遊戯のデッキを上を置く。

カードを踏み潰さない程度の力加減をしている為、机も壊れていない。

突如の定春の棄権妨害行為に啞然とする遊戯達。
いっぽうの銀時は逆に…

「よおしよくやった定春。後で上手いドックフード買って来てやるからな」

「わん！」

と嬉しそうに吼える定春。

「おう、遊戯…そっちから誘つといてピンチになりやすぐにサレンダー…ってどう言う神経をしてんだコノヤローが」

と遊戯に対しては呆れてしまう銀時。

「自分のドローフェイズ時にカードをドローする前にサレンダーってチャンスを自ら打ち消してるって事と一緒にしろに…」

「でも…僕はやっぱりまだ弱かったんだ…勢い任せに銀さんに決闘に申し込んだ事が自殺行為だったんだ」
デュエル

すぐに弱気になる遊戯。

そんな遊戯に溜息を吐いて、銀時は言いだす。

「なあ…何かお前って十代と遊星と違って弱気がありすぎるんじゃないか？何か理由があんなら言ってみるよ」

と銀時はとりあえず理由があるかもしれないと思って質問する。

「…僕には、双子の兄がいるんだ」

「双子の兄？」

「うん…兄は数多くのジュニア大会に参加していて、数多くの大会に優勝した経験を持っているから周りから親しまれて尊敬されている。一方の僕は兄とは正反対の出来損ないと見くびられて相手もされなくなつて…友達も出来ないままなんだ」

兄は自分とは違って決闘^{デュエル}の達人。

自分はそんな兄とは違って正反対にそこまで強くはない。

「だから僕、いつもプレッシャーに弱くて…銀さんに決闘^{デュエル}を申し込んだのも、そんな自分を変えてみようかなあって…」

「なあ、その兄ってもしかしてアテムって言うんじゃないだろうな？」

と銀時は疑い疑いに遊戯に聞いてみると…

「嘘！？ どうして分かるの…！」

（（マジでかあ—————！！））

とシンクロするように銀時、新八、神楽の3人は驚きだした。
しかも武藤遊戯のもう一人の人格、アテムは異世界では遊戯の双子

の兄設定だった事にありえないほど驚きだす。

「まあ、とりあえず何となくっと思って……それより、お前の気持ちはわかんねえ訳でもねえ。兄弟で自分にはない才能を持っている兄や弟がいりゃコンプレックスしても可笑しくはねえ」

と銀時は遊戯の気持ちはわからない訳でもないと思う。

「それにな……いくらピンチだからってよお……弱気になって諦めるのと兄より劣っているから仕方がないってのは全然違うと思うぜ、俺はあ……。遊戯、話を変えるが桶狭間の戦いつて知ってるか？」

「えっとう……確か25000人の大軍を率いて尾張に侵攻した今川軍に、その10分の1のぐらいの軍勢を率いた織田軍の奇襲だったよね」

突如、戦国時代の話を変える銀時。

それに啞然としながらも、遊戯は答える。

「かの織田信長は今川義元が攻め入った時、絶対的な劣勢の中でも最後まで諦めずに戦った」

突如語りだす銀時。

一件関係ない事だが、遊戯にとってこれは重要な事である。

「佐々政次、千秋四郎など重要な家臣を初め、軍勢力差に苦しめられ敗北の絶望まで追い込まれちまった織田信長だが……それでも尾張を守る為、そして仲間の死を無駄にしない為にと戦い続け、義元の本隊に接触してついには今川義元を討ち取った！」

「!?!」

絶望から奇跡の大逆転勝利。

その時の今川軍は2万の兵力で攻めたものの、戦闘により様々な方面に戦力を分散させており、今川家当主である氏真の実父の義元を守る本隊は5,000〜6,000人ほどに過ぎなかった。

信長はそれを突き、総大将の首を討ち取る事で大逆転勝利を導いた。

「最後まで諦めない折れねえ根性、それが桶狭間の奇跡を呼び起こした！」

熱意を込めて喋りだす銀時。

そう、コレは今の遊戯にとって最も大切な事であり、銀時が伝えた事でもある。

「要するに、諦めず最後まで戦う事が最も勝利しやすいって訳だな？」

「そのとおりだ十代君……つまりだ」

銀時は遊戯に向かって指を指す。

「お前が今最も必要な事は、どんな状況でも絶対に諦めずに最後まで戦う強い勇気とダイヤモンドより硬い魂って訳だ」

「！？」

そう言われ、遊戯はようやく確信した。

自分に足りなかった物……決闘者として欠けていた物……それは諦めの悪さと強い勇気であった。

それを知り、さっきまでの弱気が嘘のように消えていった。

「……そうだ、僕はいつも周りからアテムと比べられて弱気になっていたんだ。その弱気がいつも僕に諦めさせやすくさせてた……僕、

決めたよ！」

遊戯は笑顔を取り戻したように笑いだし、闘志をあふれ出す。

「僕、もう最後まで諦めないで戦うよ！　そしてこの決闘だデュエルって勝つてみせるー！」

「……ふっ、言うようになったじゃねえか」

勇気を取り戻した遊戯を見て笑いだす銀時。
そう、小田原の戦いの話はこの為であった。

「うはあ、何か銀さんって侍みたいでかっけえー！」
「いや、侍だよー！　銀さん元々侍だしー！」

十代のさりげない言葉に銀時は思わずツツコム。
遊戯達から見れば皆、銀時は決闘者デュエリストに見えた。

「この状況をひっくり返すカードを…僕のターン、ドローー！」

と遊戯は勇気を持ってカードを信じドローをする。

「よし、魔法カード『罨はずし』ー！」

「げえ…そのカードは表側表示でフィールド上に存在する罨カードを1枚選択して破壊するカードー！」

言うなれば永続罨カード対策のカードである。

今時持っているとは言え、最近では永続罨カードを使う決闘者も増えてきてるので効率が良い。

「このカードで、『竜の逆鱗』を破壊するー！」

すると銀時の場の『竜の逆鱗』は破壊された。
これで『ブルーアイズ青眼』の貫通能力は失われる。

「僕はコレでターンを終了！」

（まずい、このままじゃ『サイレント・マジシャン』の効果で俺がカードをドローする度に攻撃力が上がってしまう！ そうすれば俺の『ブルーアイズ青眼』もやられてしまうじゃねえか！）

「俺のターン、ドロー！！！」

銀時はとにかく早いところ決着をつけなければ取り返しが付かない事になってしまうと焦りだす。
しかしこのドローで沈黙の魔術士の攻撃力はさらに増幅する。

サイレント・マジシャン	LV 4	ATK 2000	2500	魔
力カウンター	2	3個		

「手札より、魔法カード『疫病感染』を発動！！フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターのレベル2個単位に付き相手はデッキの上からカードを1枚墓地に送る！！俺は『ブルーアイズ青眼』を選択！！」

「『ブルーアイズ青眼』のレベルは8…つまり遊戯はデッキからカードを4枚墓地に送らなきゃならない！」

とすると、『ブルーアイズ青眼』が咆哮を放つとその衝撃波が遊戯のデッキからカードを4枚墓地に遅らせる。
墓地に送ったカードはこの4枚。

『聖なるバリア ミラー・フォース』

マジック・シリンドー
『魔法の筒』

『サイレント・マジシャン LV8』

『光の護封剣』

「ああ、『サイレント・マジシャン LV8』が!」

まさかの切り札が墓地に送られた。

これにより、『サイレント・マジシャン』の進化は無くなった。

「俺はコレでターンを終了する」

「僕のターン、ドロー!」

とりあえず、今はドローするべきだと遊戯は思い勢い良くカードをドローする。

(……このカードは!!)

ドローしたカードは遊戯の形成を逆転させるカードであった。

「リバースカードオープン、『対価の代わり払い』!」

と勢い良く伏せカードをオープンさせる遊戯。

そのカードは『サイレント・マジシャン』とは相性が良い。

「僕は手札を1枚墓地に送る事で、相手はデッキからカードを1枚ドローする!」

「え?何であんなカードを!」

正直言つて、そのカードは相手を得させるしかない使えないカード

だと新八は思う。

しかし他の者は違った。

「こ…こいつぁー!!」

「そう、『サイレント・マジシャン』LV4は相手がドローする度に魔力カウンターが乗って攻撃力を500ポイントアップするカード!!コレで銀さんがドローする事で、『サイレント・マジシャン』の攻撃力は増幅される!!」

と銀時は仕方が無くカードをドローする。

コレにより、遊戯の『サイレント・マジシャン』に魔力カウンターが乗り、攻撃力は500ポイントアップする。

サイレント・マジシャン	LV4	ATK2500	3000	魔
力カウンター	3	4個		

「攻撃力が『^{ブルーアイズ}青眼』と並んだアル!!」

「コレで次のターン、銀さんがドローフェイズ時にカードをドローする事で、攻撃力は3500となって、『^{ブルーアイズ}青眼』を超える!!」

神楽も新八も、次のターンで『サイレント・マジシャン』が『^{ブルーアイズ}青眼』を超えて倒せると確信する。

だが…

「次のターンを待たなくても、すぐに『^{ブルーアイズ}青眼』を倒してみせる!!」
「え?」

と何故かいやな予感がしなかった銀時。

すると、突如フィールド上に1体の悪魔が『青眼』ブルーアイズをしがみ付き現れる。

『デーモンの召喚』とは違う雰囲気のデーモン類で赤い体付きをしている。

その名は『暗黒魔族 ギルファア・デーモン』。

攻撃力2200で守備力2500。

しかし新の力は墓地に送られたときに発生する。

「げえ、そのカードは『ギルファア・デーモン』!!」

「そう、このカードは墓地に送られた時、装備カードとなって相手モンスターに装備し攻撃力を500ポイントダウンする!!」

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
青眼の白龍 ATK3000 2500

「何イイイイ!!」

「行けエ、『サイレント・マジシャン』!! 『青眼』ブルーアイズに攻撃、サイレント・バーニング!!」

すると、沈黙の魔術師は杖からとてつもない魔力を収束し、一気に放って白き大火球を放つ。

コレに『青眼』ブルーアイズは悲鳴を上げながら飲み込まれて消滅していく。

「ああああああああああああああ、俺の『青眼』ブルーアイズがああ!!」

銀時 LP：4100 3600

「やったあ！！ ついに『青眼』^{ブルーアイズ}を倒したあ！！」
「くう、やるな遊戯！！」

ここで『青眼』^{ブルーアイズ}が倒されたことに悔やむ銀時。
しかしそれ以上に遊戯の勇氣にカード達が答えて『青眼』^{ブルーアイズ}を倒したのであった。

「僕はコレでターンを終了！！」（手札1枚）

遊戯はいけると思ってターンを終了する。
しかし……

「遊戯…お前の勇氣が俺の主力モンスターの『青眼』^{ブルーアイズ}を倒したんだ。
そいつはためエの成長の第一歩つてのを覚えておきな」

「銀時さん」

銀時に褒められて遊戯は何処と無く嬉しく感じた。
自分自身の強さを認められたその思いが、彼を優しく包みだす。

「だが、勝負に勝つのはこの俺だけだな…俺のターン、ドロー！！」
『ランサー・ドラゴニード』を召喚！！」
『『『『』』』』

と素早く召喚したのは緑色の竜人戦士。
槍を持ったドラゴンである。

その効果は『ランス・リンドブルム』と同じ貫通効果モンスターである。

「こいつもさっきの『ランス・リンドブルム』と『竜の逆鱗』と同じ貫通効果を持っているぜ?」

「そんなああ!!」

「そんじゃ、『マシユマロン』に攻撃イ!! ドラゴニック・スピアー!!」

と素早く速効の突きを炸裂する『ランサー・ドラゴニード』。

その素早い槍は『マシユマロン』に直撃する。

破壊できなくても、貫通効果で遊戯に衝撃が襲い掛かる。

「うわああ!!」

遊戯 LP:1500

銀時 WINNER

「ま、まだただけだな…もつと強くなれよ遊戯」
「てうおおおおいい!!」

勝利して大満足の銀時は親指を立てて遊戯に強くなるように言いだす。

そして新八が思わず叫びだす。

「なんだよ一体？」

「『何だよ一体』じゃねえよ！！ 何で相手が切り札を出したとたんに主人公らしく相手の切り札を倒さず隙を突くセコイ真似してんだよ！？」

「銀ちゃん、今の勝ち方全然主人公らしくないネ！！」
『ブルーアイズ』で
フィニッシュを決めろよ！！」

と文句を言いだす新八と神楽。
だがそんな2人に対しても…

「ねえんだよ！！」
『ブルーアイズ』を生還させてしかも破壊するカードが全然ねえんだよ！！さっきドローしたカードだって『ドラゴンを呼ぶ笛』だし、『ロード・オブ・ドラゴン』もねえのにどう『ブルーアイズ』を呼べってんだよ！！」

「だったらいつその事無様に負けろやあ！！」

ギヤアギヤアと叫びだす万事屋トリオ。
その隣であくびして寝る定春。

一方の遊戯はそんな3人の口喧嘩を苦笑して見るしかなかった。

「あははは…本当に賑やかな人達だね」

「ああ、凄く楽しい気分だな」

遊戯とは正反対に十代は面白そうに言う。

「だけど、あの3人から強い絆を感じ取れる。おそらく彼等は己がそれぞれ他人には言えない過去を持っていて、偶然の出会いで結び

合って仲間と言う形になっているんだ」

遊星はそんな3人を見て笑いだす。

騒がしくても確かな絆がそこにあるからだ。

「でも…何か羨ましい。僕もあつ言う仲間が…」

「何言ってるんだ？そんなのもうできてるじゃねえか」

「え？」

突如、十代が遊戯はもう仲間が出来てると言いだす。

何故なら…

「俺達は確かに異世界じゃ別々の場所にいた人物。だけど…」

「偶然同じくこの世界に飛ばされて、出会えた者同士だから…きっと仲間の出会いって奴だよ」

「仲間…」

ずっと憧れてた。

仲間と一緒に賑やかに笑い、そして互いに助け合う絆。

遊戯が最も欲しかったもの。

だが兄に比べられて、それは全て兄に寄せ付けてしまい自分は1人ぼっちだった。

弱気で臆病者。

そんな自分が嫌でも現実がその道を進ませる。

そんな自分にも、突如異世界に飛ばされて偶然にも出来た。

「だから」

「俺達は」

『仲間さ』』

遊城十代と不動遊星。

そして万事屋達と共の系が、遊戯と繋がり始めた。

「…2人共…有難う……」

そして少年の眼から涙が流れる。

それは悲しみと悔しさの涙ではなく、ようやく仲間が出来た事に喜びに満ちた涙であった。

その後、遊戯、十代、遊星の3人は新八が姉を紹介する為に新八の

家に連れて行かれた。

神楽は外に遊びに行き、銀時は1人万事屋で留守番をしていた。そんな暇そうな銀時に、突如1人の女性が姿を現す。

「ふふ、ご主人様って本当に優しいんですね」

「！？ おまつ…夢に出てきた奴の…」

そう、その女性こそ『ブルーアイズ青眼』の人間の姿をしたカードの精霊。その様子だと、先ほどの決闘デュエルを見守っていたようだ。

「契約を交わしたのですから、時々は出てきますよ…それと、さっきの決闘デュエルですけど…」

「……悪かったな、罔に使うような事をして」

と銀時は謝罪する。

何故なら、『ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍』が倒されたのに復活させずに別の手段で勝ったから。

罔にしまったと思っている。

だがすでに『ランサー・ドラゴニード』と言う貫通効果を持ったモンスターがいるので、銀時は『ブルーアイズ青眼』を召喚しなくても勝てたのであった。

「まあさっきの勝ち方はちよつとせこく思いましたけど、結果的に遊戯って子も勇気を取り戻せた感じですし…良いと思いますよ」

「…アイツは、マジで強くなるぜ……十代と遊星と出会えたからもう1人じゃないさ……」

と遊戯がどれだけ成長するのか見届けたい銀時。

もしかすれば自分以上になれるのかと思うが、将来は分からないので今を見守る事に決めたようだ。

「…それとお、私ご主人様に言いたい事がありますけど良いですか？」

「何だ、一体」

「…私の事は白とお呼びください…この姿でなら名前は必要ですし」

「…ああ、そうするわ」

ブルーアイズ

『青眼』（人間版）は『白』と言う名を名乗り、銀時にそう呼んで欲しいと願う。

かくして銀時はカードの精霊とも異世界の決闘者達デュエリストとも絆が芽生え始めた。

コレで一件楽ちやくつと思いきや…

「それと、もう1つ言いたい事がありますけど…良いですか？」

「あ、何が？」

申し訳なさそうにもじもじとする白。

そして彼女は冷蔵庫の扉を開けると、何故かそこは空っぽになっていた。

それを見た銀さんは…

「ああああああああああああああああああああああああああああ！！ 久しぶりの大金を手に入れて昨夜大量に買った俺のお楽しみのも『最高級ロイヤルイチゴおれ』がああああああ！！！！！！」

そう、その冷蔵庫の中には銀時がお楽しみとして買った大量の高級イチゴおれが入っていたはず。

それが一瞬にしてなくなっていた。一体どうしてなのか、白が説明する。

エレメント・トントウラット・セレモニー

「精霊契約儀式をすると、契約したカードの精霊の能力を得られるのですが……代償があると言いましたよね。実はそれ契約者の体だけじゃなくその最も大切な使用物も支払わなければならぬんですよ」「何！？　じゃあまさか……！」

「はい……おそらくご主人様の契約代償はその『最高級ロイヤリティチゴおれ』なんですよ……しかも100個も買った物をすべて……ははは」

「いやあああああああああああああああああああああ
！！！！！」

まだ一口も味わっていないのに無理矢理代償として失った銀時。
 こんなんであれば無様に決闘に負けたほうがまだマシだったと銀時
 は悔やみだした。

登場オリカ紹介

疫病感染
通常魔法

『フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択する。選択したモンスターのレベル2個単位に付き、相手はデッキの上からカードを1枚墓地に送る。』

「このカードを発動したターン、バトルフェイズを行えない」

対価の代わり払い 通常罨

『発動後、このカードは以下の効果の内1つを発動する。』

：自分は手札から1枚カードを墓地に送り、相手はデッキからカードを1枚ドロウする。

『…?』

ID - 5 勝負にもっとも大切な事は諦めない勇気（後書き）

武藤遊戯

使用デッキ リメイク版のモンスターとサイレント・マジシャンを中心とした種族属性バラバラデッキ。
その分、数多くの戦術を持つ。

デッキ名『リメイク・オブ・サイレント』

主力カード『サイレント・マジシャン LV8』

遊戯王主人公トリオの1人、遊城十代。

彼の使用するデッキは原作どおり。

そんな彼の対戦相手はあの人物だった。

天性の才を持ったもの通しのハイレベル対決が始まる！！

十代

「うほー！！次回が速く見てえー！！」

遊星

「…俺の出番はいつくるんだ？」

ID - 6 恵まれた才能を持っている人の事を天才と言う（前書き）

黒神

「今回は十代がある人物とデュエルします、その人物こそ十代と同じ天性の才を持った最強のドSですね」

遊星

「それで、俺の出番はいつくるんだ？」

黒神

「では、銀魂王始まります」

遊星

「……無視されているのか、これ？」

ⅠD-6 恵まれた才能を持っている人の事を天才と言う

数年に1人には、逸材と言うものが存在がいる。

生まれつきの才、センス、強さ、何もかも身に備えている人物が存在する事は不思議ではない。

だが、その中でも10年に1人の天才とも言える才能を持った人物も世の中には存在する。

努力しなくても、そのセンスの塊や恵まれた才を持ち合わせる者は滅多にいないが、それが存在する事は奇跡に近い事でもある。

ゆうきゅうだい
遊城十代。

彼はその1人であり、決闘デュエルの天才であり誰よりもカードの引きの強さに恵まれた天性の才を持っている。

明るく何よりも、その裏腹には誰にもいえない大いなる裏の感情を抱いている。

デュエリスト
決闘者としての強さはプロも顔負け。

戦術も優れていて、何よりこれから先強くなる。

そんな十代に対抗できる人物は、天才かそれ以上の強さを持った者だけである。

「うはあ、スゲエ！！ 何か江戸時代にタイムスピリッツした気分じゃねえか」

かぶき町の町で面白そうに散歩する十代。

彼が遊戯と遊星と共にこの異世界に飛ばされてから速くも3日たった。

十代は今、1人でかぶき町内を散歩して、面白そうなところを探して歩き回っていた。

「にしても、この世界でもデュエルモンスターズが流行ってたなんて嬉しいぜ…どうせだったらかぶき町中の決闘者デュエリストを探してデュエルするのも良いかもな」

とワクワクして誰かと速く決闘デュエルしたいと願う十代。
そんな十代に1人の男が近づいてくる。

「ちよいとまちな？」

その声の聞こえた方向に十代は振り向く。

十代に近づいてきた男は、最初にこの異世界に飛ばされたときに万

事屋にやってきた土方十四郎と同じ制服を着て、髪型は栗色のサラヘアーになっている。

そして刀を平気で持つていて、なにやら自分に近い年齢の少年のようだ。

彼の名は沖田総悟。おきたそうご

真選組一番隊隊長であり、剣の腕は真選組随一。

美少年のような顔つきであるが本性は腹黒く、極度のドSである。サディスト星の王子とも言われるぐらい、他人を痛めつけるのを楽しんでいる。

「おめエか？土方さんが言つてた異世界から来た人物って奴あ」

「ああ…あ、俺は遊城十代。あんたは？」

「真撰組一番隊隊長、沖田総悟…いずれ土方さんを殺して副長の座を付く男でサア」

「何でいきなり土方を殺そうって言つての？…嫌いなのか、土方が嫌いなのか！？」

と総悟の質問に青ざめてツッコム十代。

「…んで、俺に何のよう？」

「いやあ、旦那が異世界から来た人物を居候させてるって言つから、俺ア興味を持つて見に来ようとしにきただけであ」

と総悟は興味深そうに十代に言いだす。

「そついやあ、十代って遊戯王の歴代主人公の1人だよなあ」

「ああ…そつだけど？」

「だつたらちようど良い」

と黒笑いする総悟。

その笑いの裏腹には何か企んでいる様子である。

「おめエ、さつき決闘者デュエリストを探してるって言ってたよなあ…だったら俺ア相手してやってもいいぜエ？」

「マジか!？」

「こう見えても、俺ア強いぜ…何たって俺ア今まで連戦連勝、無敗記録を更新中であ」

「すげえー!! その挑戦受けてやるぜ!!」

と嬉しそうに叫びだす十代。

総悟がそこまで強いのなら逆に十代の闘志が燃える。総悟も痛めつけがいがある獲物を連れた事に喜ぶ。

「そんじゃ、場所は俺ら真撰組の当寺でどうでえ？」

「良いぜ…俺は決闘デュエルできれば何処でも良いぜ!!」

とそう言つて総悟は十代に真撰組の当初を案内する。そこが2人の決闘デュエルステージとなる。

一方の銀時、遊戯、遊星の3人は万事屋にいた。

遊戯は遊星と特訓デュエリストし、決闘者としてもっと強くなる特訓をしていた。ちなみに神楽は自分も決闘デュエルをして見たいと強く意識を持ってカード

集めをしている。

定春はそんな神楽と一緒に散歩。

新八は寺門通親衛隊としてお通のコンサートに出かけている。

フィールド上は『サイレント・マジシャン LV8』と『スターダスト・ドラゴン』が存在する。

美しく輝きだす屑星の竜、『スターダスト・ドラゴン』は遊星のエースモンスター。

攻撃力は遊戯の『サイレント・マジシャン LV8』より低いが、十代はこの1枚に勝負を決めるつもりだ。

「魔法カード『イーजीチューニング』を発動！！自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、その攻撃力を発動時にゲームから除外したチューナーの攻撃力分アップする！！」

「ああ！！」

と遊星は墓地の『ジャンク・シンクロン』をゲームから除外して、その攻撃力分を『スターダスト・ドラゴン』にアップさせた。

スターダスト・ドラゴン ATK2500 3800

「攻撃力が『サイレント・マジシャン』を上回った！？」

「いけ、シューティング・ソニック！！」

と『スターダスト・ドラゴン』が口から屑星の閃光を放って沈黙の女魔術師を吹き飛ばした。

これにより、遊戯のライフは0となる。

「つつ…」

「…今のは中々だったが、もつと相手をトドメを刺す勢いで攻めなければ相手にチャンス分け与えてしまうぞ？『サイレント・マジシャン』に頼るのも良いが、他にも強力なモンスターが存在するからもつと強くさせてみる」

「うん、分かった」

遊星の忠告を受けて、もつと強くなる事を決意する遊戯。

そんな2人のやり取りに銀時は見てみるだけであった。

「ほんと、お前等良くやるな？」

「まあな…俺も遊戯がコレからどれだけ強くなっていくのか見届けたくて付き合ってるだけさ」

「おそらく、僕は万事屋の中で最も弱いかもしれないから…少しでもみんなと同じぐらい強くなりたいんだ」

「いやいや、弱くないよ遊戯…むしろ一番弱いのはぱっつあんぐらいだしな」

と銀時は遊戯より新八の方がはるかに弱いと言いだす。

そんな銀時に呆れる遊星だが、確かに新八のカード知識の浅さを考えればありえると思ひ込む。

そんなこんなだが、銀時は大抵は遊戯と遊星の実力を知った。

後は、十代のほうである。

「なあ、お前等十代の強さって知ってるか？」

「いや、俺達はこの異世界に飛ばされた時に互いに知り合った者同士なんだ」

「うん、十代君の事も遊星君の事も初対面でまだ実力のほうも知らないんだ…銀時さんは知っている？」

と遊戯も遊星も十代の強さをまったく知らない様子。
ふと遊戯が銀時に聞きだす。

「そう言えば、銀さんは僕達の事を遊戯王って言う原作に出てくるキャラと同一人物だとか言っていましたよね？」

「ああ……」

「それだったら、逆に教えて欲しい……原作の十代の強さを！」

原作の遊戯達と今日の前にいる遊戯達とはおそらく別人じゃないかと思う銀時。

おそらくあの十代も原作どおりじゃないかもしれないと思い、とりあえずは話しておくことにした。

「原作どおりかは知らねえが……知ってることは言うておくわ……確か『E・HERO』^{エレメンタル・ヒーロー}と言うヒーロー系のカードを中心としたデッキを使って融合戦術が得意だったそうだぜ？」

と知ってる限りの十代の特徴を言い出す銀時。
しかし十代の強さはそれだけじゃない。

「特に、ピンチになればなるほどこ一番って時にカードの引きが強くなるって言う天性の才を持っているようで、いわゆる天才タイプって奴だ」

「それって凄いよ……!!」

「引きの強さは、決闘者^{デュエリスト}にとって命とも言える……! その引きの強さに恵まれている事は、まさに理想そのものだ」

「ああ、おそらくアイツも原作どおりに引きが強い奴だったら……十代は俺を除けりや間違いないく万事屋最強かも知れねえな」

一方、十代は総悟に真撰組の当寺に連れてこられて、そこで決闘デュエルをする事になった。

総悟が決闘者デュエリストを連れてきた事に、興味を持った隊士達が興味深そうに見学をしている。

最初はマジで遊戯王の主人公の1人である遊城十代が目の前にいたことに誰もが驚くが、沖田が異世界から来たらしいと説明すると誰もが納得した。

「あーああ、沖田隊長に無理矢理決闘デュエルを申し込まれたあの男が可哀想だ」

と坊主でヒゲ面の巨漢隊士、十番隊隊長の原田右之助はらのただのすけが十代の事をかわいそうに思えてきた。

「ただでさえ、決闘者デュエリストとしての実力も真撰組最強と歌われているのに、沖田隊長は他の決闘者デュエリストと決闘デュエルしていたぶる悪い癖を持っていますからねえ」

と新八と同じぐらい地味さを感じとって言い出すのは彼。
真選組の監察方、山崎退やまざきひろなる。

彼も沖田の異常なまでの強さには参っている。

「ぶはーっはははははは！！　まあ良いじゃないか、何か異世界から来た少年らしいから総悟も異世界に強さを体験させる良い機会だ

と思うぞ!!」

と豪快に笑い出すゴリラ似の男。

彼こそが真撰組の局長である近藤勲。こんどういさお

真撰組のトップだが、ストーカーや脱糞経験などある意味真撰組の汚点である。

ちなみに真撰組にデュエルモンスターの面白さを伝えたのも彼であつた。

「それに、あの少年は何処からか総悟と似ている雰囲気を表している…もしかすると総悟の奴、今まで連れてきた決闘者の中でも大物を釣つたんじゃないか？」

と近藤は十代から感じる不思議な強さを感じる。

そう十代は総悟と同様の強さを持った天性の才の持ち主。実力は間違いなく銀時級は誇る。

「さあ、楽しい決闘をしようぜ」デュエル

「ああ…すんげえ楽しい楽しい決闘の始まりだあ」デュエル

（沖田隊長の眼が変何だけどオオオオオ！？）

不気味に笑い出す沖田に思わず叫びだす山崎。

しかもその決闘戦術はまさにサディスト的な強さを誇っている。デュエル

「では、コレより決闘を始める!! 2人とも、準備は良いか!？」デュエル

『『もちろん（でさあ）!』』

近藤が仕切ると、十代と沖田も問題ないと言う。

そして互いにデッキからカードを5枚ドローして、決闘盤を構える。

『デュエル
決闘！！』

十代 LP：8000 手札5枚

総悟 LP：8000 手札5枚

「先行は俺がもらいやすでえ、俺のターンドロー！！」

総悟はデッキからカードをドローする。

ドローしたカードを見てどす黒い笑いを浮かべる。

「手札より魔法カード『敵に情け』を発動。デッキからレベル4以下のモンスター1体を選択し、相手フィールド上に特殊召喚でい！！」

「げえ、この状況で沖田隊長が召喚するモンスターといやあ！！」
「…アレしか考えられねえ」

と青ざめてしまう山崎と原田。

それはある意味、デュエルモンスターズ界最凶とも言える極悪効果を持ったモンスターである。

「俺は、デッキから『G・コザツキー』を十代の場に特殊召喚！！」

「その様子じゃ、『G・コザツキー』の効果を知っていやがんなあ？　そうさ、こいつは『コザツキー』が存在しなけりや自滅してその攻撃力分のダメージをコントローラーが受けるぜえ」

「前から思っているんだけど、全然敵に情けをしてねえじゃん！！」

とあいも変わらず沖田のサディスト戦術に青ざめて叫ぶ山崎。

先行のターンで一気に2500のダメージを与えるなんて爆弾を奇襲して相手に投げるて弱らせるのと一緒にである。

「さらに、俺ア『クリッター』を召喚！！」

すぐさまモンスターを召喚し、フィールド上に見つめの悪魔が現れる。

「俺アカードを3枚セットして、ターンエンドでい！」（手札1枚）

「初対面の相手に対しても容赦ねえ……」

「しかもあの伏せカードの中には間違いなくあのカードがあるかもしれない……」

山崎と原田も十代が凄くかわいそうに見えてきた。

「俺のターン、ドロー！！」

十代は反撃してカードをドローする。

しかし……

「この瞬間、罨カード『ギブ&テイク』を発動！！」

「げえ！！」

沖田の発動したカードに青ざめる十代。

まだ自分のターンが始まったばかりなのに、もうライフが5000ポイント以上も削られた事に驚く十代。

そう、これが沖田の使用するデッキ『ドS土方抹殺デビル』。

文字通り、勝利する為じゃなく極悪なコンボで相手を苦しめて痛めつけて楽しむ為のデッキである。

「いつ見ても、腹黒いコンボをするよなあ沖田隊長も」

「ああ、何せ真撰組最強と歌われるだけあって、当初内の誰もが沖田隊長にボロ負けだよ」

原田と山崎も沖田にボロボロに負けてしまった。

それもそのはず、総悟の決闘者としての実力はドSな性格で増幅し、はつきり言って最凶である。

「俺：後であの少年に謝罪しなければならないな」

流石の近藤も、もしこの決闘で心が折れてしまったら自分が謝罪しなければならないと考えている。
しかし：

「へへ、最高だぜ？」

「ああ、そんなに痛めつけられるのが面しれえのか？ Mか、ドMなのか？」

と沖田は十代はドMなのかと呆れて疑う。
しかしそうではなかった。

「銀さんや土方以外にも、こんなにスゲー決闘者デュエリストがこの世界には山のように存在する事がすげえ嬉しいぜ！！」

「おやまあ……」

と強者と戦える事に嬉しいが十代。

一気に彼のターンが始まる。

「行くぜ、俺のターンドロー！！」

十代は一気にカードをドロースると、ドロースたカードを素早く発動する。

「永続魔法『未来融合ーフューチャー・フュージョン』！！デッキから融合モンスターの融合素材のカードを墓地に送り、2ターン後のスタンバイフェイズ時にその融合モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する！！俺は、デッキから『E・HERO フェザーマン』・『E・HERO バーストレディ』・『E・HERO クレイマン』・『E・HERO バブルマン』の4体を墓地に送る！！」

と十代はデッキから4体のモンスターを一気に墓地に送り出す。

2ターン後に『フューチャー・フュージョン』の効果で一気に最上级融合モンスターを召喚するつもりだ。

「さらに魔法カード『ミラクル・フュージョン』！！墓地に存在する融合素材のモンスターをゲームから除外し、エクストラデッキから『E・HERO』と名の付く融合モンスター1体を特殊召喚する！！」

「HERO使いか……」

と総悟はつぶやく。

すると光の球体がフィールド上に現れ、墓地に存在する『フェザーマン』・『バーストレディ』・『クレイマン』・『バブルマン』の4体が姿を現して光の球体に飲み込まれる。

そして光の球体が大きくなって1体のE・HEROが姿を現した。

「来い、『E・HERO エリクシーラー』!!」

とフィールド上に姿を現したのは、サングラスをかけていて全身に黄色い戦闘スーツをかけた最上級E・HERO。

その名は『エリクシーラー』。

十代日頃く究極のE・HEROらしく、その攻撃力は2900とかなり高め。

「おやまあ、なんとも厄介なモンスターを出して気やした事」

「『エリクシーラー』は融合召喚に成功した場合、除外されたカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルするけど、そいつは必要ねえぜ!!速効魔法『超融合解除』!!ライフを1000支払い、融合モンスターをエクストラデッキに戻し、デッキ・墓地・除外ゾーンから融合素材のモンスターを全て特殊召喚する!!」

「げ?」

十代 LP:3000 2000

と思わず口にした沖田。

何故なら...

「確か、『エリクシーラー』って4体のモンスターを融合素材にしてたよな...」

「ああ...そのモンスターが一気に融合解除するって事は...」

と原田と山崎は状況を見る。

『エリクシーラー』の融合解除はすなわち…

「一気に4体のモンスターがあの子のフィールド上に現れるってわけか!」

近藤が驚いて状況を把握した。

そう、十代の狙いはモンスター大量召喚にあった。

「行くぜ、『エリクシーラー』をエクストラデッキに戻して、異次元から舞い戻れ!!」
『フェザーマン』! 『バーストレディ』!
『クレイマン』! 『バブルマン』!

と『エリクシーラー』は光に包まれて、その光が4つに分裂する。そして4つの光から4体のE・HEROが姿を現した。

右から緑色で鳥人の様な格好をして翼が生えているヒーロー、灼熱の炎を操る赤いヒーロー、スーツを着ている美女ヒーロー、粘土でできた頑丈な体を持つ鉄壁のヒーロー、そして体中に装置を身に付けて右腕に水鉄砲を装着しているヒーロー。

攻撃力は低くても、十代の場には一気に4体のE・HEROが召喚された。

「ほお力ではなく数で攻めるってか…良い判断じゃねえか?」

と総悟はにやけて笑いだす。

だが十代はまだ、通常召喚をしていない。

「さらに、『E・HERO エアーマン』を召喚!」

とフィールド上に現れたのは、飛行機の翼を背中に装着している風のヒーローであつた。

攻撃力1800など、E・HEROのレベル4以下のモンスターの中でもかなりの攻撃力を誇る。

「エアーマンのモンスター効果発動！自分フィールド上に存在するHEROの数だけ、フィールド上の魔法、罠カードを破壊する！」

「そうか、そのためにHERO達を大量召喚したのか！」

山崎は十代の狙いを確信して驚きだす。

十代は一気に総悟の2枚の伏せカードを破壊するのを狙い、『エアーマン』は飛行機の翼に付いているジェットエンジンから烈風を放つ。

「ちい、罠カード『闇霊術 - 欲』を発動する！ 闇属性モンスター1体をリリースし、相手は手札に魔法カードがあれば見せなければならぬ。ない場合は俺アデッキからカードを2枚ドロウする」

すると闇の儀式が発生して『クリッター』は生贄にされて消えてしまふ。

「……俺の手札には魔法カードはねえ」

「だったらこの場で2枚ドロウ。しかも『クリッター』の効果でデッキから攻撃力1500以下のモンスターも手札に加えるぜい。『ジャイアント・ウィルス』を手札に加えませう」

と総悟はバーン効果を持っている『ジャイアント・ウィルス』を手札に加える。

一気に十代にトドメを刺そうという考えである……まさにドSな戦術。

「けど、コレであんたの場にはカードが存在しないぜ!!」
「ちい!」

しかし総悟はここでまさかの総攻撃には予想外である。
と十代が一気に総攻撃を開始する。

「行くぜ、ヒーロー達の総攻撃!!」

と5体のHERO達が一齐に総悟に襲い掛かる。
だが総悟はそれを予想して多様に…

「手札から『バトルフェーダー』を特殊召喚!!」
「え?」

と総悟が手札からモンスターを召喚する。

召喚したモンスターは、蝙蝠の様な姿でなにやら振り子時計の振り子が付いている。

「こいつは相手モンスターが直接攻撃してきた場合、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了するぜ」

「だったらここで手札から罠カード『ヒーローズ・ナックル』を発動!!」

「なあ、手札から罠カードだと!?!」

総悟の盾に対して、十代はすぐさま手札から罠カードを発動する。
コレには近藤も驚きを隠せなかった。

「自分フィールド上に融合モンスター以外のE・HEROが2体以上いる場合、手札からこのカードを発動する事ができるカウンター

罨カード！ 相手の効果モンスターを無効にしてゲームから除外する！！」

「なあ！！」

すると『クレイマン』が力を込めた右手で『バトルフエーザー』を吹き飛ばす。

これにより、総悟の護りは崩れた。

「やべ」

「『エアーマン』！ エアーカッター！！」

と『エアーマン』は強烈な烈風波を放ち、沖田に直接攻撃をする。

「どわあ！！」

「『フェザーマン』！ フェザー・ブレイク！！」

『フェザーマン』も続けて飛翔し、沖田に爪で切り裂く。

「ぐああ！！」

「『バーストレディ』！ バースト・ファイヤー！！」

今度は『バーストレディ』が両手から火炎砲を放ち沖田を焼き尽くす。

「熱ちゃ！！」

「『クレイマン』！ クレイ・ナックル！」

続いて『クレイマン』が両手をハンマーのように構えて振り、沖田をぶん殴る。

「ぐぎゃー!!」

「『バブルマン』！ バブル・シュート！」

最後に『バブルマン』が右腕に装着している水鉄砲で沖田を吹き飛ばす。

「うぎゃああ!!」

一気に5体のモンスターの総攻撃を受けた沖田。これにより、ライフは大幅に削られてしまった。

沖田	LP	: 8000	6200	5200	4000	3200
2400						

『『スゲエ!!』』

十代の総攻撃に思わず叫びだし声がハモった山崎と原田。

あの沖田が1ターンで一気にライフが2500以下になるまで減ってしまう事には予想外であった。

「あの状況で一気にモンスターを5体も召喚したあげくに総悟にダメージを!! 何て少年だ、アレはまさしく神速召喚コンボ!!」

近藤も十代の神速召喚には驚きを隠しきれなかった。
しかもそれだけじゃない。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド…さ、総悟のターンだぜ？」

「にやろ、やつてくれたじゃねえか」

十代の猛攻撃を受けた総悟は鋭い眼線で十代を見つめる。
同時に自分は倒しがいのある獲物を連れたと喜ぶ。

「俺のターン、ドロー！ 『魔界砲撃獣 キヤノンオーガ』を召喚
！！」

沖田がすぐにモンスターを召喚をする。
召喚したモンスターは、四角い体フォルムで重量騎士の鎧を身に付けた漆黒の悪魔。
右肩に禍々しい魔界の砲丸を身に付けている。

「さらに装備魔法『デビルス・パニッシャー』を発動…こいつを装備したモンスターは相手モンスターが存在するときに戦闘ダメージを与えた場合、その数値を倍にするぜい」

「マジ！？ 攻撃力1000の『キヤノン・オーガ』をそのカードに装備するって事は…まさかダイレクトアタック効果付き！？」

「ああ…こいつは相手の場にモンスターが2体以上存在する場合、ダイレクトアタックが出来るカードでさあ。これで一気にトドメを刺してやるぜ」

「やばあ！！」

と青ざめてしまう十代。

「あの少年のライフは2000ポイントだから…『キャノンオーガ』の効果によるダイレクトアタックが決まれば1000ポイントのダメージだけど…『デビルス・パニッシャー』の効果でダメージが倍…て事は」

「沖田隊長は一気にトドメを刺すつもりだあ!!」

と一気にトドメを刺そうと考える沖田。

腹黒い彼は十代をすぐさま倒したい勢いで攻めだす。

「喰らえエエエ、『キャノン・オーガ』でトドメでい!! 土方ぶつ殺キャノンバスター!!」

「沖田隊長!! 技名違いますよオオオ!!」

「デス・カラミティキャノンバスターです!!」

と沖田の技名のワザとな間違いに青ざめる山崎と原田。

そして砲丸鬼はそのまま魔界の大砲を撃ち、砲門から灼熱の赤と紫の混色火球が放たれ、十代を襲う。

「GOOD BYE 十打」

勝利を確信して腹黒く笑う沖田だが…

「罨カード『エレメント・チャージ』を発動!!」

「!?!」

ここで罨カードが発動した事に驚く沖田。

しかしこの罨カードは攻撃に対して発動するカードではない。

「このカードは、自分フィールド上に存在する『E・HERO』1

体に付き、ライフを1000ポイント回復するぜ!!」

すると、E・HERO達が不思議なオーラを放ってそのオーラが十代を包むように彼を癒しだし…同時に『キャノンオーガ』の攻撃を防ぎだす。

十代は結果的にダメージを受けるが、それ以上にE・HERO達の闘志が十代のライフを回復させた。

十代 LP: 2000 7000 5000

「すげえ、一気にライフを5000ポイントも回復させやがった!」

「そうか!! あの少年が一気に5体のモンスターを特殊召喚したのもあのカードの効果を最大限に発揮する為だったのか!」

回復デッキでも一気に5000のライフを回復する事は滅多にないと驚きだす山崎。

そして十代の神速召喚コンボには更なる狙いがあつたことに驚く近藤。

形成は一気に大逆転。

状況もライフも十代が圧倒的有利に立っている。

「こいつは参った…けど『キャノンオーガ』はこの効果でダイレクトアタックしたターンのエンドフェイズ時に、守備表示になるでい。カードを1枚セットしてターンエンド」(手札1枚)

総悟はここでターンを終了させる。

守備力2100の『キャノンオーガ』が存在すれば、しばらくは大丈夫と言いたい。

だが十代の『E・HERO』の特徴は沖田も知っている。

（『E・HERO』と言やあ、モンスター同士の合体により進化し続けるモンスターシリーズ…合体前が雑魚とは言え、侮れねえ）

と沖田は十代の融合戦術に警戒する事にする。

「俺のターン、ドロー！！ 魔法カード『融合』を発動！！」

「ええ！？ もう融合を引いきやつたの！？」

ドローしたカードが融合である事に驚く山崎。

コレが十代の天性の引きの強さ。

「場の『バースト・レディ』と『バブルマン』を融合！！」

すると、『バースト・レディ』と『バブルマン』が時空の渦に入り込んで融合する。

「来い、炎のE・HERO『ノヴァマスター』！！」

と時空の渦が爆発して炎上を起す。

その炎の中から現れたのは1体のE・HERO。

灼熱のヒーロースーツを身に付け、赤いマントをかけている。

攻撃力2600の強力なモンスターの一種である。

だがそんな『ノヴァマスター』を見て不思議に思う原田。

「あれ、確かあの2体のモンスターが融合して召喚されるモンスターって確か『E・HERO スチーム・ヒーラー』じゃなかったのか？」

「いや、それが違うようだ。あのE・HEROは『E・E』って言
うHEROと属性を融合素材にしたモンスターらしいよ?」

「ええ、属性と『E・HERO』の融合素材だけってあり!?!」

それはつまり、どんなモンスターでもE・HEROと属性が合えば
なんでも融合してしまう強力なカードである。
ある意味反則級になるかもしれない。

「それだけじゃない。原作じゃ、エクストラデッキに入れられるカ
ードは15枚までって決められているが…最近では融合モンスター
を使う決闘者が滅多に少なくなってきたから、今年から新ルールと
してエクストラデッキにいられるのはエクシーズモンスターとシン
クロモンスターは10枚までとなり、エクストラデッキの枚数が3
0枚となっている」

「マジですか!?!」

と近藤の説明に原田が驚きだす。

確かにシンクロモンスターもエクシーズモンスターもかなり協力的な
強さを持っている。

しかし強力すぎてそれに頼ってしまうデュエリストも最近はい多い。
だから新ルールとしてそのエクストラデッキのデッキ枚数を変化し
てシンクロとエクシーズの数を制限した。

そのルールは融合使いが圧倒的に有利に入る。

「だからあの少年のエクストラデッキは間違いなく、融合を中心と
している…俺達の予想をはるかに超えるぐらいに…」

新ルールはシンクロやエクシーズなど強力なカードばかりじゃなく、
融合使いも強化させる新ルールを作ったのである。

「攻撃力2600…間違いなく『キャノンオーガ』の守備力を上回っていやがる」

「『クレイマン』を守備表示にし、『ノヴァマスター』で『キャノンオーガ』に攻撃、プロミネンスノヴァ…！」

と、『ノヴァマスター』が両手から巨大な灼熱の火球をだし、一気に『キャノンオーガ』に向けて投げ出す。

『キャノンオーガ』は巨大な火球に身を焼かれて悲鳴を上げ、跡形もなく燃え散る。

「さらに『ノヴァマスター』が戦闘で相手モンスターを破壊したとき、デッキからカードを1枚ドローするぜ！」

と十代がデッキからカードを1枚ドローする。

その瞬間に沖田の伏せカードが発動する。

「罨カード『弔い合戦』を発動でえ！！戦闘でモンスターが破壊された場合、デッキからカードを1枚ドローする！」

沖田もすぐにカードをドローし、ドローしたカードを手札に加える。

「その後手札からレベル4以下・攻撃力1500以下のモンスター1体を特殊召喚する…！ きやがれ『ジャイアント・ウィルス』！」

とフィールド上に現れたのは漆黒の球体型悪魔。

その体内には凶悪な感染病を抱いていて、破壊される事でば撒くおぞましき悪魔である。

（『ジャイアント・ウィルス』…破壊したらデッキから同名モンスターを特殊召喚するカードだったよな…それってつまり閻属性モン

スターが墓地に増えたらそれだけ俺が不利になるだけだ)

と十代は警戒してむやみに攻撃する事はしないで置く。

「…バトルフェイズを終了し、『フェザーマン』と『エアーマン』も守備表示にしてターンエンド」(手札1枚)

十代は仕方がなく2体のE・HEROを守備体制にしてターンを終了させる。

「なるほど、十代君は総悟のデッキを闇属性を中心としたデッキと思い込んでるな。確かに最近の闇属性モンスターは墓地に送れば送るほど真の力を発揮するカードだからなあ」

「それってまるでオカルトコンボじゃないっすか？」

と山崎が呆れて言いだす。

近藤の言うとおり、もし山崎のデッキが闇属性デッキだったらそれは墓地に闇属性を増やす事はかなり危険な行為である。
しかしそれは違った。

「俺の狙いを知ってるそうじゃねえかあ？　けどもう止められねえでい！　俺のターン、ドロー！！」

と沖田はデッキからカードをドロウする。
ドロウしたカードを見て笑いだす。

「手札より『悪魔の刺客』を発動！　場のモンスター1体をリリースする事で、デッキからレベル4以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚特殊召喚する。俺ア『ジャイアント・ウィルス』をリリースし、『ダーク・アタックメント・デビル』を特殊召喚！！」

フィールド上に現れたのは漆黒の鎧を身につけた鳥人の様な悪魔。

「こいつの効果は特殊召喚に成功した場合、攻撃力を元々の守備力分アップするか、守備力を元々の攻撃力分アップする効果を持っているぜ…俺ア当然攻撃力をアップする効果を選ぶあ」

すると、禍々しい漆黒の闘志が『ダーク・アタッチメント・デビル』の力を増幅させる。

ダーク・アタッチメント・デビル ATK 1250 2500

「そして魔法カード『悪・エナジー』。こいつぁに存在する元々の攻撃力が1500以下の悪魔族モンスター1体に装備し、モンスターの攻撃力を1500ポイントアップする効果を持っているぜえ」
「！？…『ダーク・アタッチメント・デビル』の攻撃力は2500だけど、元の攻撃力は1250…1500ポイントより低い！」
「ああ…よって、攻撃力は1500ポイントアップ…」

ダーク・アタッチメント・デビル ATK 2500 4000

『ええええええええええええええええええええええええ！？』

「レベル2のモンスターが一気に攻撃力4000になったただとオオオオオ！？」

「スゲエ！！」

レベル10級の最上級パワーに驚きだして青ざめる山崎と原田。

近藤にいたつても流石に予想外であつた。

一方の十代は眼を輝かせて総悟の戦術に感服した。

「それじゃあ行くぜ！『ダーク・アタッチメント・デビル』で『ノヴァマスター』に攻撃、土方串刺しニードル！」

「ナイトメア・フィアーズニードルですよおおー！」

またもや土方いたぶる攻撃名に青ざめる山崎。

そして鳥人悪魔の翼から無数の漆黒の棘が放たれ、『ノヴァマスター』を破壊する。

十代 LP：5000 4300

「あれ、そんなにライフが減っていねえ？何で……」

「そりゃ『悪・エナジー』は確かにモンスターの攻撃力を大幅パワーアップさせる効果を持っているけど、戦闘ダメージを半減してしまつてデメリットを持っていらあ」

「そうなんだ……」

「最も、攻撃力4000はそう簡単に超えられねえと思うぜ、俺アコレでターンエンドでさあ」

攻撃力4000は協力だが、けして倒せない相手てじゃないと十代は確信する。

そして十代のターンが始まる。

「行くぜ、俺のターンドロー……！」

十代はカードをドロースると、ドロースたカードを見て笑いだす。

「この瞬間、『未来融合・フューチャ・フュージョン』の効果発動！！『フェザーマン』・『バーストレディ』・『クレイマン』・『バブルマン』の4体を融合素材とした、『E・HERO エリクシーラー』を融合召喚！！」

とフィールド上にまたもや最上級E・HERO、『エリクシーラー』が光臨された。

サングラスをかけていて全身に黄色い戦闘スーツを着ているその姿はまさに神々しい。

「さらに魔法カード『フュージョン・サポートチャージ』！！融合召喚に成功した場合、デッキからカードを3枚ドローして、その後手札からカードを1枚墓地に送るぜ！！」

十代はデッキからカードを3枚ドローし、ドローしたカードの内1枚を墓地に送る。

「さらに魔法カード『融合』！！場の『クレイマン』と手札の『スパークマン』を融合し、『E・HERO サンダー・ジャイアント』を融合召喚！！」

すると時空の渦が発生し、場の『クレイマン』と手札から現れた『スパークマン』が時空の渦に乗り込む。

そしてその中で2体は融合する。

そして時空の渦から巨大な稲妻が振ってきて、フィールド上に現れたのは稲妻のヒーロースーツを装着した巨大なE・HEROであった。

「『サンダー・ジャイアント』の効果発動！！手札を1枚墓地に送

る事でこのカードより元々の攻撃力が低い相手モンスター1体を破壊する！！」

「ちい、『ダーク・アタッチメント・デビル』の攻撃力は4000だが…元々の攻撃力は1250…『サンダー・ジャイアント』より低い！！」

と十代は手札を1枚コストに、『サンダー・ジャイアント』の効果を発動する。

「行くぜ、ヴエイパー・スパーク！！」

『サンダー・ジャイアント』は片手から稲妻の波動を放ち、『ダーク・アタッチメント・デビル』は黒こげとなって消滅した。

「沖田隊長の場に存在していたカードが消えた！！」

「しかも十代君の場には強力な『E・HERO』が2体も存在する！！」

まさか沖田がここまで追い込まれることは思いもよらなかった。しかもこの攻撃が通れば十代の勝ちになる。

「やるじゃねえか十代…けどこちとらそう簡単に負ける訳には行かないんでさあ…墓地から罌カード『闇の靈魂壁』を発動！」

「何、墓地から罌カード！？」

「こいつあ自分フィールド上に存在する闇属性モンスターがカード効果によって破壊された場合、墓地から発動できる罌カード。このターン、相手モンスターは攻撃できねエ上、発動後は俺アデッキからカードを1枚ドロウする」

とどす黒い笑顔でデッキからカードをドロウする総悟。

「相手の勝機を一瞬で打ち消すなんて、まさにサディスト戦術!!」
原田がそう言いだし、十代はせつかくの勝利をもぎ取れない事につくりする。

「まじかよ、墓地から発動する罠カードがあるなんて…」
「こんな事もあるうかと、ワザと破壊される為に最初のターンでセツトしてたさあ」

そう、『闇の靈魂壁』は沖田が1ターン目にセツトしたカード。
そのカードを十代は『エアーマン』の効果で破壊してしまったのだ。

「…漫画やアニメ以上の強さかもなおめエ」

沖田は思わず十代の強さを認めだす。

「へへ、そりやどうも」

「この世界でもおめエはアニメや漫画でも有名な決闘者^{デュエリスト}として、遊戯王に關係する連中じゃあ知らねえ奴はいねえぜ」

と沖田は言いだす。

まあ実際、十代はアニメや漫画のキャラクターだから。

(しかも原作にはないモンスターの連続召喚とくりや…こりや原作以上の強さをもっていやがるぜ)

沖田は目の前の十代はアニメや漫画以上の強さを持っているんじゃないかと疑い、警戒する。

「お前、引きが強えんだなア」

「へへ…まあ自分で言うのも何だけど、引きの強さにはメツチャ自身あるんだぜ」

「そうかい……そりゃ奇遇だなア」

と総悟は黒笑いをしてカードを引く体制をする。

「俺もカードの引きは強えぜえ！！俺のターン、ドロー！！」

沖田も一気にカードをドローする。

ドローしたカードを見てにやりと笑いだす。

「魔法カード『おろかな埋葬』！！」

「あれは確か、自分のデッキからモンスターカード1枚を墓地に送るカード」

「俺アデッキから『ファントム・シールド』を墓地に送る！！」

と沖田はデッキから『ファントム・シールド』を墓地に送り、デッキは決闘盤によってシャッフルされる。

「さらに魔法カード『天よりの宝札』！フィールド上と手札のカードを全てゲームから除外しデッキからカードを2枚ドローするでい！」

「総悟の場にはカードが存在しない！！つまり『強欲な壺』並に無条件でデッキからカードを2枚ドローするってわけか！！」

と近藤は驚いて叫ぶ。

沖田はデッキからカードを2枚ドローする。

ドローしたカードを見て、にやりと笑いだす。

「『憑依するブラッド・ソウル』を召喚！」

沖田がそのままモンスターを召喚すると、召喚されたモンスターは魔炎に包まれた灼熱の悪魔。

攻撃力1200で低いが、強力な効果を持っている。

「さらに魔法カード『スター・デンジャラス』」

「げえ！ まさか総悟の狙いつて…」

十代は『スター・デンジャラス』の効果を知っている。

その効果はある意味『憑依するブラッド・ソウル』に相性抜群である。

「このカードは自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、相手モンスター1体を選択する。選択した相手モンスターのレベルは選択された自分モンスターと同じレベルになるぜえ。俺が選択すんのは、当然『憑依するブラッド・ソウル』と『エリクシーラー』でさあ」

すると、憑依の悪魔が『エリクシーラー』に闇の波動を放って、『エリクシーラー』は苦しみながらもたえたがレベルが一気に3となる。

E・HERO エリクシーラー 10 3

「それで『憑依するブラッド・ソウル』をリリースし、全てのレベ

ル3以下のモンスターのコントロールを得るぜ…てめえの『エリクシーラー』と『フェザーマン』をよこしなあ！ 土方絶望憑依！！」
だっあんひょうい
「だから、奪闇憑依！！」

と山崎がツツコミだす。

すると、『憑依するブラット・ソウル』が闇の火球と化して『エリクシーラー』と『フェザーマン』に憑依する。

2体のHEROは苦しむが、後に大人しくなって沖田のフィールド上に立つ。

「やべー！！」

「そして、『エリクシーラー』は炎・水・風・土属性の能力を得て、相手フィールド上に存在するこのカードと同じ属性モンスター1体に付き300ポイントアップするんだったなあ？」

「ああ…」

「十代君の場には光属性の『サンダー・ジャイアント』と風属性の『エアーマン』が残っている！！ て事は攻撃力は600ポイントアップする！！」

と近藤は言いだす。

すると『エリクシーラー』は精霊の力を増幅させて、攻撃力が上がった。

E・HERO エリクシーラー ATK: 2900 3500

「行くぜ…『フェザーマン』を攻撃表示に変更し、『エリクシーラー』で『サンダー・ジャイアント』に攻撃。下衆土方撲滅マジスタ

リー!!」

「フュージョニスト・マジスターですってばあ!!」

山崎がここでツツコミだす。

すると『エリクシーラー』が体全体から光を放ち、その光を浴びた『サンダー・ジャイアント』は消滅する。

「『サンダー・ジャイアント』!!」

十代 LP:4300 3200

E・HERO エリクシーラー ATK3500 3200

「続いて『フェザーマン』で『エアーマン』に攻撃でい! くそ喰らえな土方切裂きブレイク!!」

「何かさっきから土方に対する憎しみを込めながら攻撃してない!」

とうとう十代まで青ざめてツツコム。

すると『ファザーマン』の爪が『エアーマン』を切り裂き破壊する。攻撃力は『エアーマン』の方が上だが、『エアーマン』は守備表示で守備力が300な為、あっけなく破壊された。

E・HERO エリクシーラー ATK3200 2900

「相手のモンスターを奪ってまで相手を苦しめさせるのはまさにド

Sなやり方!」

「沖田総悟…まさに天性のサディスト!」

原田も山崎も総悟のDSな攻め方に青ざめる。

『G・コザツキー』と良い『キャノンオーガ』と良い、さっきの『憑依のブラット・ソウル』と良い、相手を苦しむための戦術としか見えない。

「一気に俺の場がから空きか…だったらこのドローで形勢逆転してやるぜ! 俺のターン、ドロー!」

十代は一気にカードをドローする。

ドローしたカードを見てすぐさま召喚する。

「『E・HERO ソニックマン』を召喚!!」

フィールド上に鳥人の様なヒーロースーツを身に付けた鳥の翼が4羽生えているHEROが現れた。

E・HERO エリクシーラー ATK2900 3200

「このカードの召喚に成功したとき、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罫カード1枚を破壊する!!」

「何!? だが俺の場には魔法・罫カードは存在しねえはず…」

「いやあるぜ! フィールド上に破壊できるカードが…」

と十代がにやりと笑いだすと、沖田は十代が破壊するカードは何なのか理解した。

「ま…まさかてめエ」

「そうさ…俺が破壊するカードは、俺の場の『フューチャー・フュージョン』だ！！ソニック・カッター！！」

『ソニックマン』は手刀を振り、そこから真空の刃を放って『フューチャー・フュージョン』を破壊する。

すると『エリクシーラー』が突如消滅していく。

「ええ！？ 何で『エリクシーラー』が消えたんだあ！？」

とどうしてなのか分からない原田だが、それが『フューチャー・フュージョン』のデメリットである。

「なるほど、『フューチャー・フュージョン』は確かにデッキから融合素材のカードを墓地に送る事で2ターン後にモンスターを特殊召喚させる優秀な融合サポートカード…しかし永続魔法であるのが欠点で、あのカードがフィールド上から離れる事で融合召喚したモンスターも道連れに破壊してしまうデメリットを持っている！！」

「いくら『エリクシーラー』より攻撃力が高いモンスターを出せなくても、元となった『フューチャー・フュージョン』を破壊する事で、十代君は結果的に『エリクシーラー』を破壊したんだ！」

近藤と山崎も十代の狙いは完璧だと思いつく。

しかしそれ以上に2人が驚いているのは、十代の引きの強さにある。手札がなくなっても、この場で形勢逆転のカードを引き当てるその恵まれた才は、まさに十代が天才である証である。

「行くぜ、『ソニックマン』で『フェザーマン』に攻撃！！ ソニック・シュート！！」

『ソニックマン』は両手から風球を放ち、それに直撃した『フェザーマン』は爆発して消滅する。

「ぐおああ!!」

総悟 LP：2200 1500

（すまねえな、『エリクシーラー』・『フェザーマン』）

と、十代は自ら破壊したHERO達に謝罪をする。
しかし同時に沖田の底力を感じたのである。

「まさかこの俺をここまで追い込むとあ……てめエ、やるじゃねえか」
「へへ…そう言うあんたこそ強いぜ！　こんなに白熱した決闘^{デュエル}をすんのも久しぶりだぜ！」

と十代と総悟は互いに実力を認め合う。
HERO使いと悪魔使いの天性の才を持つ者同士^{デュエル}の決闘はさらに白熱する。

登場オリカ紹介

敵に情け 通常魔法

『デッキからレベル4以下のモンスター1体を選択し、相手フィールド上に特殊召喚する』

超融合解除 速効魔法

『ライフを1000支払う。』

フィールド上に存在する融合モンスター1体をエクストラデッキに戻す。

さらに、エクストラデッキに戻したそのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組をデッキ・墓地・除外ゾーンから融合素材のモンスターを全て特殊召喚する』

ヒーローズ・ナックル カウンター罠

『相手フィールド上に存在するモンスターの効果が発動した場合のみ発動可能。』

その効果を無効にして破壊する。

自分フィールド上にレベル4以下の『E・HERO』と名の付くモンスターが2体以上存在する場合、手札からでも発動可能。

セットした状況でこのカードを発動する場合、手札を1枚捨てなけ

ればならない』

魔界砲撃獣 キャンオーガ 4 闇属性 悪魔族 ATK 10
00 DEF 2000

『このカードは、相手フィールド上に攻撃表示のモンスターが2体以上存在する場合、相手に直接攻撃することができる。』

この効果でこのカードが直接攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない』

デビルス・パニッシャー 装備魔法

『レベル4以下の闇属性・悪魔族モンスターに飲み装備可能。
相手フィールド上にモンスターが存在する時に装備モンスターが相手に1000以下の戦闘ダメージを与えた場合、その数値を倍にする』

弔い合戦 通常罫

『自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘で破壊された場合、

デッキからカードを1枚ドロウする。
その後、手札からレベル4以下・攻撃力1500以下のモンスター1体を特殊召喚する。』

悪魔の刺客 通常魔法

『このカードを発動したターン、他のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚・セットする事ができない。
自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースする事で、デッキからレベル4以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。』

ダーク・アタックメント・デビル 2 闇属性 悪魔族 ATK
1250 DEF1250

『このカードが特殊召喚に成功した場合、以下の効果のうち1つを発動する。』

このカードの攻撃力は、このカードの元々の守備力の数値分だけアップする。

このカードの守備力は、このカードの元々の守備力の数値分だけアップする。』

悪・エナジー 装備魔法

『元々の攻撃力が1500以下の悪魔族モンスターに装備可能。装備モンスターの攻撃力は1500ポイントアップし、相手に与える戦闘ダメージは半分となる。』

このカードがフィールド上に存在しなくなった場合、装備モンスターをゲームから除外して装備モンスターのコントローラーに1500ポイントのダメージを与える。』

フュージョン・サポートチャージ 速効魔法

『時分フィールド上に融合モンスターが融合召喚された場合のみ発動可能。』

デッキからカードを3枚ドローし、手札からカードを1枚墓地に送る。』

闇の靈魂壁 通常罫

『時分フィールド上に存在する闇属性モンスターがカード効果によって破壊されて墓地に送られた場合、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動。』

発動したターン、自分が受ける戦闘ダメージは0となる。』

発動後、デッキからカードを1枚ドローする。』

ファントム・シールド 2 闇属性 悪魔族 ATK 0 DEF 2000

『????』

スター・デンジャラス 通常魔法

『フィールド上に表側表示で存在するモンスター2体を選択して発動する。』

エンドフェイズ時まで、選択したモンスター1体のレベルは、もう1体のモンスターと同じレベルとなる』

E・HERO ソニックマン 4 風属性 戦士族 ATK 1700 DEF 1300

『自分の魔法・罠カードゾーンに存在する伏せカード1枚を墓地に送る事で、手札からこのカードを特殊召喚する事ができる。』

このカードの召喚・反転召喚に成功した場合、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カード1枚を破壊する。』

ID - 6 恵まれた才能を持っている人の事を天才と言う（後書き）

遊城十代

使用デッキ 『E・HERO』と名の付くモンスターを中心とした融合デッキ。

融合召喚を中心とした神速召喚コンボを得意とする。

デッキ名 『神速融合英雄』

主力カード 『E・HERO フレイム・ウィングマン』

ⅠD・7 天才同士の戦いは通常の戦いよりレベルが高い（前書き）

近藤

「前編と後編の同時最新もいいけど、俺もそろそろデュエルしたいなあ」

黒神

「じゃあ次回待ってね…と言っわけで銀魂王、始まります」

近藤

（なんだろう、すごく信頼しづらいんだけど？）

ID - 7 天才同士の戦いは通常の戦いよりレベルが高い

遊城十代 LP : 3200

場

『E・HERO ソニックマン』（攻撃表示）

沖田総悟 LP : 1500

「なんちゅうハイレベルな戦い何だ！？ 実力はまったくの互角以前に、引きが強いにも程があるだろ！！」

「やっぱああ言うのって天才タイプだよな…いるんだよなあ、世の中にはそう言う奴が」

と原田は2人の強さが異常だと知り、山崎にいたっては世の中に滅多に存在しない天才タイプの一種であると見る。

互いの手札は0でも、天性の引きの強さが彼等の実力を発揮しやすくしている。

「総悟もあの十代君も恵まれた才能を持っている者同士…だから勝敗はまったく予想が付かないほどに俺達のはるか次元が違う戦いをしているんだ！ だから勝敗はどちらかが先に相手にトドメを刺すカードを引き当てた方に決まる！」

と近藤は十代か沖田、どちらかが先に勝負を決めるカードを引き当

てたほうに勝敗が決まるようだと確信する。
そして沖田のターンが始まる。

「俺のターン、ドロー!!」 『吸血の悪魔・ヴァンパイア・デーモン』を特殊召喚でい!!」

とフィールド上に1体の悪魔が光臨する。

攻撃力、守備力ともに1800のレベル5のモンスター。

漆黒の吸血鬼の衣装を身に付けたデーモン系の角が生えている悪魔。真紅に輝きだす爪と牙に、金色に輝く瞳で相手を見つめる。

「特殊召喚モンスターか!」

「こいつあ、自分の場にモンスターが存在せず自分のライフが相手より低けりゃ特殊召喚が出来るモンスター・・・最も他のモンスターの召喚・特殊召喚は出来ねえがア今はこいつで十分ぜさあ」

「やば!!」

「喰らえエ! 土方貧血死噛殺!!」

と沖田は攻撃宣言をする。

ちなみに正式な攻撃名は『デビルス・ブラッドファング』。

悪魔の吸血鬼は凄まじい勢いで『ソニックマン』の首左横を噛み、そのまま『ソニックマン』は消滅した。

「うう!?!」

十代 LP: 3200 3100

「そして、こいつぁ相手モンスターを戦闘では開始相手に戦闘ダメージを与えた場合…攻撃力は700ポイントアップし俺のライフも回復するぜい」

吸血の悪魔・ヴァンパイア・デーモン ATK 1800 2500

沖田 LP : 1500 2200

「て、ありや結構なレアカードじゃないですかあ!!」

「ああ、1枚で10万円はするぐらいでしかも制限カードリストに乗っているからな…こりゃ総悟も中々大物になってくるんじゃないか？」

と山崎と近藤、2人は驚きを隠せないまま叫びだす。

だが沖田のデッキにはまだまだ凶悪なレアカードが眠っている。

「俺のターン、ドロー!」

続けて十代もカードをドローする。

ドローしたカードを見てにやっとする。

「墓地に眠る『E・HERO ネクロダークマン』のモンスター効果…こいつは墓地に存在する場合、1度だけ上級モンスターをリリース無しで通常召喚できる! こい、『E・HERO エッジマン』!」

と十代のフィールド上に黄金の鎧を身に付けたE・HEROが姿を現した。

攻撃力2600と融合無しでの召喚されたE・HEROの中でも、最大攻撃力を誇る。

「ちい、にやろーさっきの『サンダー・ジャイアント』か『フュージョン・サポートチャージ』のどちらかの効果で『ネクロダークマン』墓地に送りやがったんだなあ」

「へへ、しかも攻撃力はパワーアップした『ヴァンパイア・デーモン』より攻撃力は高いぜ？ 行くぜ、パワーエッジアタック！」

と黄金のE・HEROが、吸血の悪魔に突進して両手に仕込まれている剣で吸血の悪魔を切り裂く。

「ぐう！！」

沖田 LP：2200 2100

「ターンエンドだ！！」

「俺のターン、ドロー…『闇王プロメテイス』を召喚でえ！」

フィールド上に漆黒の闇が現れて、その中から1体の闇の王が光臨された。

魔界の王とも言える鎧を身に付け、顔はブーツに隠れて見えないが邪悪な気を感じ取っている。

「こいつぁ召喚に成功すりゃ、自分の墓地に存在する闇属性モンスターを任意の枚数ゲームから除外してエンドフェイズ時まで、この効果で除外したカード1枚につき、このカードの攻撃力は400ポ

イントアップすりゃ」

「総悟の墓地に眠る閻属性モンスターは6体…て事は…！」

「そう…俺ア墓地の閻属性6体をゲームから除外する事で、『閻王プロメテイス』の攻撃力を2400ポイントアップすりゃ！」

すると、墓地の閻属性モンスターの魂が閻王に吸収されて、『閻王プロメテイス』の攻撃力がアップする。

閻王プロメテイス ATK1200 3600

「攻撃力3600！？」

「行けえええ『プロメテイス』！！ 土方閻撃殺し！！」

正確には、ディアボリック・ダークフォースである。

すると閻王の両手から強大な漆黒の重力波が放たれて、『エッジマン』を押しつぶすように破壊する。

「ぐああ…！」

十代 LP：3100 2100

「ターンエンドでえ！」

「俺のターン、ドロー！ 『戦士の生還』を発動！！ 墓地から『バブルマン』を手札に加えて、そのまま特殊召喚！！」

と十代はすぐに墓地から『バブルマン』を手札に加えて、その効果で特殊召喚する。

右腕に水鉄砲を身に付けたE・HEROが姿を現す。

「このカードは手札がこのカードだけの場合、特殊召喚できる！さらに特殊召喚に成功したときにこのカード以外にフィールド上のカードが存在せず、俺の手札がない場合、デッキからカードを2枚ドローする！！」

十代はここでデッキからカードを2枚ドローする。
ドローしたカードを見て笑いだす。

「フィールド魔法『摩天楼―スカイスクレイパー』を発動！！」

すると真撰組の当寺内のフィールド上は摩天楼となりだす。
数多くのビルに夜の満月の光景に新撰組の隊士達は驚きだす。

「どあ、何か風景が変わりだしたぞ！？」

「フィールド魔法ってフィールド全体に効果が現れるカードだよなあ」

原田は驚いて山崎はフィールド魔法の特徴を言いだす。

「そして『バブルマン』で『閻王プロメテイス』に攻撃！！」

「ええ、いくら攻撃力が1200に戻ったからって、『バブルマン』の攻撃力じゃ届かないぞ！？」

と原田はどうしてなのかと思い込む中で、十代が動きだす。

「ちい、『スカイスクレイパー』の効果って奴か」

「ああ、このフィールドこそ『HERO』達の力を最大限に発揮するカード！！『スカイスクレイパー』は戦闘で自分より攻撃力の

高いモンスターを攻撃する場合、ダメージ系暫時の間だけ攻撃力を1000ポイントアップする!!」

E・HERO バブルマン ATK800 1800

「いけエ、バブル・シュート!!」

と『バブルマン』は思いっきり水鉄砲を撃ち、水の弾丸で闇王を破壊する。

「どああ!!」

沖田 Lp:2100 1500

「よっしゃ、カードを1枚セットしてターンエンド!!」

「俺のターンでい、ドロ―!!」

沖田もデッキからカードをドロ―する。
ドロ―したカードを見て笑いだす。

「『ジ・エンド・スピリッツ終焉の精霊』を召喚でい!!」

とフィールド上に現れたのは邪悪なる精霊。
終焉を導く闇の悪魔である。

「こいつあ、ゲームから除外されている闇属性モンスターの数×300ポイントの攻撃力と守備力にならあ」

「除外されている闇属性モンスターは6体…つまり攻撃力は1800って訳か!!」

ジ・エンド・スピリッツ
終焉の精霊

ATK1800 DEF1800

「行くぜエ、『終焉の精霊』^{ジ・エンド・スピリッツ}で『バブルマン』に攻撃でえ！ 土方
終焉滅！！」

攻撃名はエンド・オブ・ダークネス。

終焉の精霊は片手から闇の弾丸を放ち、それが『バブルマン』を飲み込んで破壊する。

十代 LP:2100 1100

「罨カード『英雄生還・ヒーロー・リバース』を発動！！『E・HERO』が戦闘で破壊され、俺が1000ポイント以上のダメージを受けた場合：次のターン他のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚できない代わりに墓地に眠る『E・HERO』と名の付く融合モンスター1体を召喚条件無視して特殊召喚する！！」

「げ…まじかよ？」

「蘇れ、『サンダー・ジャイアント』！！」

とフィールド上に現れたのは、炎を操る灼熱のE・HERO。

攻撃力2400のE・HEROがフィールド上に光臨した。

「ち…ならこのままターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！ 行くぜ、『サンダー・ジャイアント』^{ジ・エンド・スピリッツ}で終焉の精霊』に攻撃！！ ボルティック・サンダー！！」

と十代が勢いに乗って攻撃を仕掛ける。

だが終焉の精霊の目の前に、無数の骸骨で作られた漆黒の盾が姿を現し、その盾が『サンダー・ジャイアント』の攻撃を防ぐ。

「『ファントム・シールド』の効果発動、1度だけターンの閻属性モンスターの戦闘破壊を無効にする！」

「けど、効果は残っているぜ？『サンダー・ジャイアント』のモンスター効果、手札を1枚墓地に送る事でこのカードより元々の攻撃力が低いモンスター1体を破壊する！ ヴェイパー・スパーク！」

と、また片手から稲妻を放って終焉の精霊を破壊する。

だがそれは仇となる。

「『ジ・エンド・スピリッツ終焉の精霊』が破壊されて墓地に送られた場合、ゲームから除外された閻属性モンスターを全て墓地に戻すぜい！」

と沖田はポケットに入っていた除外されてたカードを墓地に送る。

「ターンを終了する」

十代はこのままターンを終了する。

完全に引きの強さによる天性の才のぶつけ合い。

天才同士の戦いはまったく次元が違う。

『めちゃくちやハイレベルすぎますけどおおお！！』

「総悟も総悟だが…十代君も引きが強すぎだろ…てかあの2人を見ていると俺達が凡人のように思ってしまうではないか？」

付いていけない戦いに山崎も原田もありえないほど青ざめて叫ぶ。

近藤も自分の予想をはるかに超えた戦いについていくのもやつとで、自分達は凡人じゃないのかと疑う。

（こいつぁ、俺が今まで倒してきた決闘者とはまったく次元が違エデュエリスト
：天性の引きの強さだけじゃなく次から次へと形勢逆転するモンスターを召喚しまくる神速級の召喚をしてくる。なら、こいつぁアレを出さなあいけねエなあ）

「俺のターン、ドロー！！『終わりの始まり』を発動：自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在すりゃ発動できるカード！墓地に眠る闇属性モンスターを5体ゲームから除外し、デッキからカードを3枚ドローする」

「何か当たり前のようにドローしたカードを発動しちゃったよあの人、どんだけ引きが強えんだ！？」

まるでデッキの一番上にあるカードが何なのかを分かっているかのような引きの強さに青ざめる原田。

そして沖田は墓地に眠る5枚の闇属性カードを除外し、デッキからカードを3枚ドローする。

ドローしたカードを見て、どす黒く笑い出す総悟。

「さらに俺ア、『闇の召喚魔術』を発動！墓地の魔法カード3枚をゲームから除外し、デッキからレベル3以下の闇属性モンスター1体を召喚でい！『メタボ・サッカー』をデッキから特殊召喚！！

とフィールド上に現れたのは、杖で体を抑えている老人悪魔。

攻撃力・守備力ともに低いが、コレが沖田の必勝戦略の1つとなる。

「さらに俺アこいつをリリースし『タン・ツイスター』をアドバンス召喚！」

とフィールド上の老人悪魔がリリースされ、フィールド上に目玉1つの妖怪っぽい悪魔が降臨した。

「闇属性モンスターのアドバンス召喚の為にリリースされた『メタボ・サッカー』の効果発動：自分フィールド上に『メタボ・トークン』3体を特殊召喚するぜえ」

とフィールド上に小さな赤ん坊な『メタボ・サッカー』似の小悪魔が3体現れる。

これで総悟の本領発揮が始まる。

「そろそろてめえに、取って置きを見せてやるぜえ」

「取って置き!？」

と十代は沖田の取って置きに強く聞き入れる。

原田と山崎は一体何の事なのかさっぱりわからなかった。

近藤ですら予想不能。

（取って置きつて、まさかまた『G・コザッキー』による爆弾投げ召喚で十代君にトドメを…だがそれなら何故ワザワザ4体のモンスターを召喚する意味があるんだ!？…確かに総悟のデッキは『G・コザッキー』の爆弾投げコンボを中心とした闇属性・悪魔族デッキ…だからってこのターンで『G・コザッキー』を召喚したって『コザッキー』が…）

と近藤は思い込む中で、何か総悟のデッキとあるカードが共通点するカードが一瞬思い浮かべてる。

（……総悟の場には4体のモンスター…そして使用デッキは闇属性・

悪魔族デッキ…4体のモンスター…闇属性・悪魔…4体…悪魔…
…4体のモンスターは…悪魔…（
「！！！？？」

と近藤はようやく確信した。

沖田が、このターンで強大な悪魔を召喚してくるのを狙っていることに。

（まさか、総悟はアレを出す気なのか！？ ああ、超激レアカードの悪魔族最大級の攻撃力を誇る幻魔を！！）

そう、沖田が『メタボ・トークン』を3体フィールド上に召喚した理由はあのカードにあった。

それが今、フィールド上に現れようとしている。

「俺あ、2体の『メタボ・トークン』と『ダン・ツイスター』リリースする！！」

「何！？」

すると、沖田が3体の悪魔をリリースした事に驚く十代。

そのリリースは、あるモンスターの召喚条件を満たす為のリリースであった。

「その天性の才、へし折ってやるぜい……『幻魔皇ラビエル』を特殊召喚！！」

と、沖田は決闘盤に強く叩きつけるようにと、1枚のカードをセツトする。

そして背後から蒼い闇の柱が天に昇るように現れて、その中から1体の巨大な幻魔が降臨された。

通常のモンスターの数倍以上の大きい青い悪魔。

外見は伝説の三幻神の一角『オベリスクの巨神兵』似であり、攻撃力は4000である。

「…攻撃力4000!？」

十代はそんな爆発的な攻撃力を誇る悪魔族モンスターが存在してた事に驚きを隠せなかった。

一方の原田と山崎は…

「ラビエルううう!？ 確かラビエルって伝説の神、三幻神をモデルとなつて作られた三幻魔の一角だったよね!？」
「そんなカードを沖田隊長が持つてたなんて信じられねえけどお!？」

とまあそう青ざめていた。

三幻魔は他のカードとは違ってメツチャ高くてパックには入っていない。

しかも店で買おうとしても、1枚だけでも数百万円はかかるようだ。

そんな三幻魔の一角を生で見られることに、驚きの余り隊士達はあんぐりして黙り込んでいた。

「さあ、覚悟は良いかい十代さんよ…アドバンス召喚に成功した『ダン・ツイスター』がフィールド上から離れて墓地に送られた事によつて、デッキからカードを2枚ドローするぜえ」

沖田はすぐさまカードを2枚ドローして、『ラビエル』の効果を発動する。

「『ラビエル』の効果、1ターンに1度だけモンスター1体をリリースする事で、リリースしたモンスターの攻撃力分だけ攻撃力がアップでい…俺ア、『メタボ・トークン』をリリースでさあ」

と幻魔皇は右手で『メタボ・トークン』を握りつぶし、その力をわが身に染み込ませる。

だが攻撃力0のモンスターをリリースしても、幻魔皇の攻撃力は上がらない。

リリースした理由は他にあった。

「なるほど、せっかく強力なモンスターを召喚にもかかわらず、弱いトークンを残せばそこを突かれてしまうから…あえて攻撃力が上がらなくても『ラビエル』の効果を使って穴を埋めた訳か！」

と近藤は語る。

そう、沖田は守りの薄さも絶対に残さない…そして彼の攻撃が炸裂する。

「喰らえええ！『ラビエル』でトドメだあ！！土方滅殺拳！！」

ラビエルは右手を強く握りだし、そのまま『サンダー・ジャイアント』を吹き飛ばす。

ちなみに攻撃名は『天界蹂躞拳』である。

「墓地の『E・HERO メタル・ガードナー』の効果発動！！自分が戦闘・またはカード効果によるダメージを受ける場合、1度だけそのダメージを0にする事ができる！！」

と、フィールド上に鋼鉄のコートを身に付けた漆黒の防止をかぶったE・HEROの魂が、その衝撃から十代を護った。

「ちい、さっきの『サンダー・ジャイアント』の効果で墓地に送ったカードか……」

「ああ……ただ攻めるだけじゃあんたに勝てないから、こうでもしねえと感心の一撃を防げねえしな」

「やつぱ、そこらの雑魚とはちげえってわけだな……カードを1枚セツトしてターンエンドでい！」（手札1枚）

最後に沖田はカードを1枚セツトしてターンを終了する。

十代は目の前にいる最強の悪魔をどう倒そうか考え中である。

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』を発動……！」

「墓地の『E・HERO』を5枚デッキに戻してシャッフルした後、デッキからカードを2枚ドローするカードじゃねえか……」

と沖田はまさかこの場で十代がそのカードを引き当てることに驚きだす。

そして十代は墓地に眠る『メタル・ガードナー』・『バブルマン』をデッキに、『エリクシーラー』・『サンダー・ジャイアント』・『ノヴァマスター』をエクストラデッキに戻してデッキをシャッフルする。

その後デッキからカードを2枚ドローする。

「さらに、モンスターをセツトしてカードを1枚セツトし、ターンエンド……！」

十代はとりあえずはセツトしてこのままターンを終了するしかないと考える。

そして沖田が逃がさないようにと攻めだす。

「俺のターン、ドロ―！ 永続魔法『悪魔の血祭り』を発動…」
「何！？」

「こいつぁ、フィールド上に存在する悪魔族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊する度に、相手は600ポイントのダメージを受けるぜ。行けええ、土方滅殺拳！！」

ラビエルはそのまま巨大な剛拳を振り、十代の伏せモンスターを破壊する。

破壊されたモンスターは『フレンドック』である。

十代 LP：1100 500

「『フレンドック』が戦闘で相手モンスターを破壊した場合自分の墓地から『E・HERO』と『融合』を1枚ずつ手札に加える！俺は『バースト・レディ』と『融合』を手札に加える！！」

十代は墓地に眠る『バースト・レディ』と『融合』を手札に加えた。

「さらに罠カード『リミット・リバース』を発動！ 墓地から攻撃力1000以下のモンスター1体を特殊召喚する！ 蘇れ『フェザーマン』！！」

と十代のフィールド上に風を操る緑のヒーロースーツを装着しているE・HEROが降臨した。

（一気に勝負を決めるようじゃねえか…だつたら）

「俺ア、永続魔法『闇の魔除け結界』を発動！！ フィールド上に存在する闇属性モンスター1体を選択し、選択したモンスターは相

手モンスターの効果を一切受けやしねえ…選ぶのは『ラビエル』でさあ」

と沖田はすぐさま、『ラビエル』を選択して幻魔皇の周りは闇の結界が張られる。

近藤はどうしてそのカードを発動したのかを分かった。

「ああ、まさか総悟の奴…十代君が『E・HERO Great トルネード』を召喚してくるのを警戒して『闇の魔除け結界』を発動したのか…！」

「なんすかそれ？」

と近藤の言う『E・HERO Great トルネード』は何なのかを理解していない原田。

彼は余り最新のE・HEROの存在を知らないからだ。

「風属性とE・HEROを融合素材とする攻撃力2800の上級融合モンスター…その効果は融合召喚時にフィールド上に存在する相手モンスターの攻撃力・守備力を半減にする恐るべし効果を持っているんだ！」

「ええ、なんですかそりや…！ 『収縮』を一斉に相手モンスターすべてにかけるようなもんじゃないっすか…！」

反則的な効果に原田は青ざめる。

そう、それを防ぐ為に『闇の魔除け結界』を『ラビエル』にかけたのだ。

これで『ラビエル』は『Great トルネード』の効果を受けないですむ。

十代ほどのE・HERO使いなら『E・HERO Great トルネード』を持ってないはずがない。

先を読んで沖田は護りも入る。

「俺アこのままターンエンドでい…次の俺のターンが、てめえの最後だ」

と沖田は次のターンで、トドメをさすつもりでいる。

沖田達の予想通り、十代は『E・HERO グレイト Great トル TORN ネード ADO』を持っている。

（やっぱアイツすげえ強え…俺が『E・HERO グレイト Great トル TORN ADO』を持っていることを予想して効果防御カードまで用意するなんて…）

まさに沖田総悟こそ強豪決闘者だと十代は思う。デュエリスト

しかしそれと同時に十代は最高の決闘を楽しんでいる。デュエル

（間違いなくコレが俺の最後のターンかもしれないけど……だったら最後は最後らしく派手に決めてやるぜ！！）

「ファイナルターン、ドロー！！」

と十代は思わず銀時のように最後のターン宣言をしてドローする。

ドローしたカードをゆっくりと見ると……勝利の女神が舞い降りたと確信する。

「行くぜ、手札から魔法カード『融合』を発動！！場の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！！」

「何！？」

迷わず融合を発動する十代。

沖田は『Great グレイト TORNADO』を融合召喚しても無意味だ

と言うのに十代の融合召喚行為に理解できない。

だが十代が融合召喚するのは『^{グレイト}Great ^{トルネード}TORNADO』ではなく、『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合素材とした風と炎のE・HERO。

「マイフェアリックカード!!」

と十代が叫び、時空の渦が発生して2体のE・HEROは飛び込む。そして時空の渦の中で2体は融合し、十代の最もお気に入りのE・HEROが降臨する。

「『E・HERO フレイム・ウィングマン』!!」

十代に勝利を導くE・HEROが降臨した。

右腕に竜型の大砲を身に付けて、左肩に翼が生えているE・HERO。

十代のお気に入り『フレイム・ウィングマン』がフィールド上に舞い降り、摩天楼のビルの屋上に立つ。

『か・・・かつこええ!!』

と、十代の『フレイム・ウィングマン』の登場に思わず歓喜する隊士達。

山崎と原田も同じだった。

しかし攻撃力は2100。

『スカイスクレイパー』の効果を受けても、攻撃力は3100。攻撃力4000の『ラビエル』には届かない。

「まさか『フレイム・ウィングマン』と来たかあ…けど『スカイスクレイパー』の効果を受けても、届かねえさあ」

「分かてるさ…けどだからって『ラビエル』を倒せないとはかぎらねえぜ？」

と十代はニコツと笑って言いだす。

「1つ1つの力を合わせることで、強大な力にも打ち勝つ…それが^{デュエル}決闘ってもんだ!!」

そしてドローしたカードを発動し、終止符を打つ。

「装備魔法『フュージョン・ウェポン』を『フレイム・ウィングマン』に装備!!」

「げえ、あのカードは!!」

「こいつはレベル6以下の融合モンスター専用の装備カード!!
装備したモンスターの攻撃力、守備力は1500ポイントアップするぜ!!」

すると、『フレイム・ウィングマン』の左腕から特殊な武装が装着…いや武装合成される。

その特殊武器により、『フレイム・ウィングマン』の力が増幅される。

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100 3600

「攻撃力が3000オーバーって事は……」

「自分より攻撃力が高い『ラビエル』を攻撃する事で、『スカイス

クレイパー』の効果でさらに攻撃力1000ポイントアップするぜ
！！！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK3600 4600

「まさかここまでやるとあ
『『すげえー！！！！』』」

沖田は勿論、山崎と原田も驚きの余りに叫びだす。
あの土壇場で一気に形勢逆転のカードを引き当てたことに誰もが驚く。

これが、天性の引きの強さの才を持った者の力。

「こ……これがゲーム王歴代主人公の中で最もカードの引きが強いと謳
われた決闘者^{デュエリスト}、遊城十代の力なのか！？」

近藤は、今正に伝説の主人公の強さを目の当たりにしたと確信する。

「『フレイム・ウィングマン』で『ラビエル』に攻撃！ スカイス
クレイパー・シュート！！！！」

と、『フレイム・ウィングマン』は摩天楼の構想屋上ビルからの落
下で、その落下加速を利用して全身に炎が包まれる。
そして竜型の大砲でそのまま『ラビエル』に突進し、『ラビエル』
は全身に灼熱の炎に包まれて破壊される。

「ぐおああ！！！！」

沖田 LP：1500 900

「これで俺の勝ちだ、『フレイム・ウィングマン』のモンスター効果発動！」

「やべ…こいつの効果は…」

「戦闘で相手モンスターを破壊した場合、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！」

『幻魔皇ラビエル』の元々の攻撃力は4000。

沖田のライフを圧倒的に上回っている。

そして『フレイム・ウィングマン』が竜型の大砲から火炎砲を放つ。

「コレが決まれば、十代君の勝ちだ！」

近藤はそう言い、あの沖田が負けてしまうのかと驚きだす。
しかし…

「ちい、しゃあねえから道連れでい！ 罨カード『ダークプラスマ―』を発動！」

「ええ！？」

「戦闘で闇属性モンスターが破壊された場合、そのモンスターをゲームから除外する事で互いに1000ポイントのダメージを受けるぜ！！」

「マジかよオオオ！！」

念のために沖田が伏せといったカード。

最後は道連れという形で、墓地の『ラビエル』の魂が現れて大爆発し、『フレイム・ウィングマン』の放った火炎放射が消えて十代と

総悟に衝撃を与える。

「ぐあああああ!!」

「どあああああ!!」

十代 LP：5000

沖田 LP：9000

「引き分けだ?!?」

「どちらの勝敗もなく、引き分けと言う結果で終わっちゃうなんて……」

近藤と山崎は、まさかの引き分けと言う結果に終止符がたった事に驚きを隠せなかった。

だが十代と沖田の実力はまったくの互角であり、どっちが勝っても負けても可笑しくなければ引き分けも珍しくない。

「かぁ、引き分けかぁ!!」

「ここまで俺と対抗に渡り合えるとあ……やっぱりさすが主人公って訳でさあ……」

互いに引き分けは予想してなくても、互いに全てをぶつけ合う強き魂のぶつかり合いの真剣勝負に満足していた。

「へへ……楽しい決闘^{デュエル}だったぜ……」

「ああ……けどいつか決着はつけさせてもらっけどな」

と互いに楽しめたことに満足していた。

と言うより天性の引きの強さを誇った者同士の戦いは次元がはつきり言って違っていた。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

としばらく沈黙が続くように黙っていた隊士達が興奮して叫びだす。コレほどまでの決闘^{デュエル}を見たのがどうやら始めてであったようだ。

「…ぶあーっはははははは！　いやあ、凄く白熱した戦いだった！　まさか総悟と双壁に戦える骨のある決闘者^{デュエリスト}が現れるとは思わなかった！！」

近藤は愉快そうに笑って喋りだす。

「俺、沖田隊長の切り札が『G・コザツキー^{ジャイアント}』だと思ってましたけど…『ラビエル』を持ってたなんて思いもよりませんでしたよ」

「ああ…俺も俺も」

山崎と原田は沖田が『ラビエル』の様な強力なモンスターを持っていたことに驚きを隠しきれなかった。

「と言うより、『フレイム・ウィングマン』かつこ良かったなあ」

と山崎は自分も『フレイム・ウィングマン』のようなカッコいいHEROカードが欲しいと思い込む。

「にしてもトシももつたないなあ、こんな名勝負は滅多に見られるものでもないのに」

「近藤さん…最近の土方さん、元気ないみたいですんで無理やあり

やせんか？ 何か3日前に人生で屈辱的に恥ずかしい思いをしたって言ってから部屋で引籠もっていりゃ」

と土方は今でも、部屋で引籠もっていると言う。

近藤と沖田はどうしたものか困っていた。

「…なあ、総悟達に聞きたい事があるけど良いかな？」

「なんでえ？」

と十代は真撰組全員にある事を聞きだす。

「…宇宙のEカード、『E・HERO ネオス』ってカードを探しているんだけど…誰か心当たり知らねえか？」

「『E・HERO ネオス』？…『ネオス』って、あのネオスピーシアンとコンタクト融合することで、未知なる力を発揮するカードの事けえ？」

十代はそのカードを探している。

アニメでも、十代の主力カードの1枚としてもそうであり、基礎通りの『ネオス』デッキだけじゃなく、通常の『E・HERO』デッキ、光属性デッキ、『ネオス』を中心とした通常モンスター。数多くのデッキにも使える。

しかしそのカードはこの世界では存在しないらしく、誰もが知らないままでいる。

「すまないが十代君、『E・HERO ネオス』は確かにこの世界でも有名なカードだが、実際に存在しない架空のカードとして扱われているんだ…申し訳ない」

「今すぐに観察しにいつても、何処にあるのかも分からないんじゃない？」

と近藤と山崎は申し訳なさそうに言いだす。

沖田もそのカードが発売されている情報は聞かされていないため、
分からないようだ。

「悪いけど、俺もそのカードの存在は知らねえなあ」

「そっか、悪いな……じゃあ俺、そろそろ銀さんの所に戻るから……
皆、またな」

「おう、いつかまた遊びに来てても良いぞ！俺達歓迎するから！！」

と十代は万事屋に戻ろうし、近藤はまた遊びに来てもいいと歓迎する。

隊士達も十代に今度決闘デュエルを教えてもらおうかと考えている。

十代が当寺から去ろうとすると、

「おい、十代！」

沖田が十代を呼び、ある事を伝えようとする

「……おめエは絶つてえ倒してやるから、それまで他の奴に負けるん
じゃねえぞ！」

と宣戦布告を言いだす総悟。

何やら決闘デュエルには引き分けても勝負に負けた気分で気に食わない様子。

だから今度またデュエルする時まで強くなろうと決意する。

そんな総悟に振り向いて、十代は笑いながらこう言う。

「ああ、その時は今回のよりもっと楽しい決闘デュエルをしようぜ」

「何イイイイイ!? あのドSも決闘^{デュエル}をやつてるアルカあ!?!」

万事屋に戻った十代は、今回の沖田との決闘^{デュエル}を銀時達に話していた。神楽は自分はまだ決闘^{デュエル}をやった事がないのに対し、沖田がいち早くも決闘^{デュエル}をしていた事に驚きを隠せなかった。

「つつか、『ラビエル』って何!? アイツ、警官の癖に悪魔族デツキを使つてる訳?」

「まあそう言う訳かな?」

十代は苦笑して、銀時の質問に答える。

しかし十代は銀時と土方以外にも、まだまだこの異世界には数え切れない未知なる強さを持った強豪決闘者^{デュエリスト}が存在すると確信してワクワクしていた。

元の世界に戻る前に、もっと強い相手と戦いたい闘志が芽生えていた。

「ムキー、こうなったら私も明日からカード集めネ! 銀ちゃん、カードショップを教えるアル!」

「はいはい…んじゃ紙書いておくから明日1人で行けよ?」

銀時はめんどくさそうだが、とりあえず神楽に1人で行くようにとカードが売っている場所を紙で書く。

遊星は、十代の満足げな表情に話をする。

「嬉しそつだな、十代」

「ああ…この異世界は、俺達のいた世界より強い強豪決闘者^{デュエリスト}が山のように存在すると考えりゃ、楽しみでワクワクするぜ」

「そうか…俺もいつかこの世界の決闘者^{デュエリスト}とデュエルしてみる事にする」

遊星も興味心身で、十代のように自分も誰か強い相手とデュエルするのも悪くないと思った。

真撰組の当寺 沖田の部屋

そこで1人、沖田は数多くのカードを並べてデッキ強化をしていた。今度こそ十代と決着をつける為にと。

彼は十代との決闘^{デュエル}で、決闘者^{デュエリスト}としての闘志が芽生え始めたのであった。

「遊城十代…今度決闘^{デュエル}するときにあ、絶つてえたおしてやつからな」

登場オリカ紹介

吸血の悪魔・ヴァンパイア・デーモン 5 闇属性 悪魔族 A
TK1800 DEF1600

『自分の場にカードが存在しない場合、手札からこのカードを特殊召喚する事ができる。』

この効果で特殊召喚に成功した場合、そのターン他のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚・セットする事ができない。

このカードの種族はアンデット族もんスタートしても扱う。

自分の場に他のカードが存在しないときに、このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地に送った場合、ダメージ計算後にこのカードの攻撃力は700ポイントアップし、コントローラーのライフも700ポイント回復する。』

英雄生還・ヒーロー・リバース 通常罫

『相手ターンにのみ発動可能。』

自分フィールド上に存在する『E・HERO』が戦闘で破壊され1000ポイント以上の戦闘ダメージを受けた場合のみ発動可能。

自分の墓地に存在する『E・HERO』と名の付く融合モンスター1体を召喚条件無視して特殊召喚する。

このカードを発動した場合、次の自分のターン他のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚・セットする事ができない』

ファントム・シールド 2 闇属性 悪魔族 ATK 0 DEF 2000

『このカードが墓地に存在する場合、1度だけ時分フィールド上に存在する攻撃力2000以下の闇属性モンスターの戦闘破壊を無効にする』

闇の召喚魔術 通常魔法

『自分の場にモンスターが存在しない場合のみ発動可能。
墓地に存在する魔法カード3枚をゲームから除外する事で、デッキからレベル3以下の闇属性モンスター1体を特殊召喚する。』

E・HERO メタル・ガードナー 3 地属性 戦士族 ATK 1300 DEF 1400

『このカードが墓地に存在する時に、自分が戦闘またはカード効果によるダメージを受ける場合、1度だけそのダメージを0にすることができる』

悪魔の血祭り 永続魔法

『フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが戦闘でモンスターを破壊する度に、相手に600ポイントのダメージを与える』

闇の魔除け結界 永続魔法

『自分フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスター1体を選択する。』

選択したモンスターはこのカードがフィールド上に存在する限り、相手モンスターの効果を一切受けない。

フィールド上に存在するこのカードが破壊されて墓地に送られた場合、選択したモンスターをゲームから除外する』

ダークプラスマー 通常罠

『自分フィールド上に存在する闇属性モンスターが戦闘で破壊された場合のみ発動可能。』

破壊されたカードをゲームから除外し、お互いに1000ポイントのダメージを受ける』

ID - 7 天才同士の戦いは通常の戦いよりレベルが高い（後書き）

沖田総悟

使用デッキ 『G・コザツキー』を中心としたバーンカード少し大目の闇属性・悪魔デッキ

とにかく相手を苦しむ姿を見る為の戦術を得意とするサディスト

デッキ名 『ドS土方抹殺デビル』

主力カード

『G・コザツキー』

『幻魔皇ラビエル』

土方

「何かデッキ名も今回の決闘^{デュエル}での総悟の攻撃宣言、メツチャ腹立つんだけどオオオオオ！？」

沖田

「黙りな、負け犬（腹黒）」

土方

「負け犬言つなアアアアアアアアアアアアアアアア！……！」

と土方は怒り任せに刀を振り回すが、沖田はそれを軽く交わし続ける。

新たなイジメ方法を見つけて沖田は大満足であった。

近藤

「次は、俺の決闘デュエルが始まる以前に…何かトシが墮ちていくのが心配で決闘デュエルどころじゃないんだけどオオオオオ！？」

ID - 8 見た目だけじゃ戦いには勝てない(前書き)

『銀魂王デュエルモンスターズSD』には実際にはないオリジナルルールが存在します。

ルールその1 エクストラデッキ

エクストラデッキ枚数は30枚だがシンクロモンスターとエクシーズモンスターは10枚までしか入れられない。

なお、シンクロモンスターとエクシーズモンスターも存在する場合は融合モンスターも10枚しか入れられない。

もしシンクロモンスターもエクシーズモンスターも存在しない場合は融合モンスターは30枚まで入れられる。

また、エクストラデッキを持っている場合はエクストラデッキがなくなった辞典で失格となる。

しかしエクストラデッキが1枚も入っていない場合は失格にはならない。

その2 ストライク 必殺カード

ストライク
必殺カードとは、禁止カードに最も近いカードリストであり、そのリストに載っているカードの内、一種類だけで1枚しか入れられない。

例えるなら『ブラック・ホール』と『早すぎた埋葬』が必殺カード

リストとすると、その内1枚だけしか入れられない。
そう言うのと一緒で、二種類以上入れただけでも失格となる。

その3 デッキ枚数

通常デッキに入れられるカードは40～55枚までとなっている。

その4 サイドデッキ

通常、融合モンスター、シンクロモンスター、エクシーズモンスターなどサイドデッキに入れられる事が許されるカードだが、ここではその内1枚しか入れられない。
また、メタモ系カードも1枚しか入れられない。

ID - 8 見た目だけじゃ戦いには勝てない

十代と総悟の激闘の決闘から次の日。

突如、近藤勲が自ら万事屋にやってきて銀時、新八、神楽の3人にある物を渡す。

それは遊戯王でも有名な決闘盤であった。

「え、まじで！？ マジでか！？」
「うほほーい！！ コレで自由に決闘が出来るアル！！」

まさかの決闘盤に銀時は驚いて神楽は喜びだす。
なぜならこの世界の決闘盤は結構の価格はあるからだ。

「近藤さん、これ本当に受け取って良いんですか！？」

嬉しそうに喜ぶ新八。

慌てながらもたずねてみると、近藤は愉快に笑って答えだす。

「いやあ、お宅らの居候に総悟が世話になったからな…そのお礼として受け取ってくれ！！」

そう、昨日の決闘でアレだけ本気を出した総悟を見たのは近藤も始めてである。

真撰組最強と謳われたあの総悟と対抗に戦った十代の実力に感心した近藤も、誰かと決闘がしなくなったからだ。

そのために、誰か1人と決闘しようかと考えている。

「わざわざ悪いな、ゴリラ」

「え、あれ？ お礼言われているのにゴリラ呼ばわり？」

とゴリラと呼ばれて納得できない近藤。
だが外見がゴリラ似なのでとりあえず仕方がない事である。

「まあ、何かゴリラ似だからじゃねえ？」

「十代、それは失礼だろ！？」

とさりげない一言を言いだす十代に遊星はツツコム。

実はあの決闘^{デュエル}以来で十代は真撰組でも注目される決闘者^{デュエリスト}となつて、最近では隊士4割以上がHEROデッキを使う。よほど十代に影響されたのであろう。

「まあとにかく：俺がワザワザ万事屋に来たのはお前等に決闘盤^{デュエルディスク}を私にただだけじゃない！ 是非、俺も十代君とデュエルしたくなつてな！！」

と近藤は十代に決闘^{デュエル}を申し込む。

それを聞いた十代もヤル気まんまんである。

「面白え、じゃあさっそく始めようとするぜ」

と十代は決闘盤^{デュエルディスク}を左腕に装着して外に出ようとする。
だがその時、

「ちょっと待ってください！！」

と新八が叫びだす。

彼の叫びに近藤は振り向いて、意外そうな表情をする。

「あり、どうしたの新八君？」

「近藤さん、十代君、2人には悪いけど…まず近藤さんは僕と決闘
してもらいます」

「ええ！？」

と新八が近藤に決闘を申し込みだす。
それに十代は驚いて叫びだす。

「おい、ぱつつあん…そのゴリラはジユツチーに決闘を申し込んだ
から横取りはいけないネ！」

「ジユツチーって俺え！？ 何か変なあだ名だけど！？」

神楽の十代に対するあだ名に十代は思わずツツコム。

「けど、神楽ちゃん…僕だって1度は勝ちたいし、何より近藤さん
なら僕でも勝てそうだし」

「それって俺が新八君より弱い存在って訳え！？ 新八君、それは
酷いよオオオ！！」

と新八のさりげない一言に近藤は涙を流す。

だが新八のそれは勘違いである。

近藤は沖田ほどじゃないが土方と並ぶ実力のある真撰組でも強者決
闘者である。

「はあー、しゃあねえから相手してやってくれゴリラ。 ちょうど
お前と戦えばあいつも納得できるだろうし」

「え、それって俺が新八君に負ければ新八君の気が治まるって訳？」

「いや、新八が自分自身がどれだけ弱いかわかるのにちょうど良い機
会だからって言いてえの」

「どんだけ弱いのかそれえ！？」

近藤もまた、新八がどれだけ弱いのか全然分かっておらず彼自身が己の弱さを知るにはちょうど良い機会である。

「まあ良いんじゃない？ 他デュエリストの決闘者の实力を知るのもちょうど良い機会だしさ」

「ぬう…十代君が言うなら仕方がない。よし、この近藤勲が相手になろう！」

と十代に言われて、近藤は新八の挑戦を受ける事になった。
新八の实力を試す良い機会と思って。

「良いの、十代君？」

「良いって良いって、自分ばっか決闘するよりもより多くの決闘デュエルを見るのもいい経験になるしな」

心配そうに言いだす遊戯に対して、気楽そうに喋る十代。

十代の言うとおり、遊戯も遊星も新八の实力はまったく知らないの
で良い機会かもしれないと思う。

だが3人はその時はまだ知らない。
新八デュエルの決闘が今まで見てきた決闘デュエルの中で最も酷い事に。

そんなこんなで、新八の家で決闘デュエルが開始される事になった。
銀時、神楽、遊戯、十代、遊星、定春はその決闘を見学する事にな
った。

最も、姉のお妙は今留守番をしていた。

「やるからには手加減無しで行かせてもらっぞ！」

「何の、どんな相手だろうと勝って見せますよ！？」

と近藤も新八もヤル気満々である。

一方の神楽はどんなデッキが良いのか悩んでいる。

何せ彼女はまだデッキがないので、決闘^{デュエル}が全然出来ない。

「むう、私も速くデッキが欲しいネ…でもお金がないし…どうすれば良いのか分からないアルよ」

「ああ、それだったらストライクデッキってのを勧めするぜ？」

「おお、確か1000円でカード40枚入りのカードが帰るってやつアルか！！でも、私お金がたった150円しかないアルよ……」

と悲しそうな表情をする神楽。

十代はその言葉に苦笑して、どうすれば良いのか悩む。

「ところで、神楽ちゃんは一切どんなカードが欲しいの？」

と遊戯が相談すると…

「私のイメージカラーは赤アル！だから、赤き悪魔竜『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が欲しいネ！！」

「…いや、それは無理だと思う」

神楽が欲しいカードを宣言すると、遊星は青ざめて言いだす。

「神楽、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』は世界でも経った3枚しかない幻のレアカード何だ…しかも俺達の世界だけじゃなくこの

世界でも同じ事はできないはず…だから、無理だ」

「ガーン!!」

と遊星のつらい現実にはショックを受ける神楽。

銀時は呆れて神楽に言いだす。

「あのなあ、神楽……『レッド・デーモンズ・ドラゴン』といやあ、ジャック・アトラスのエースカードとして有名何だぜ？ そんなジャックが『レッド・デーモンズ・ドラゴン』なしになりやあいつに何が残るってんだ？」

「おお、そうあったネ！ 元キングと言う名の操り人形のニート決闘者ネ！」
エリスト

「『それ、酷いだろ（すぎだよ）!!』」

銀時と神楽のジャックの姿の想像に遊戯王主人公トリオがツツコム。

「あのう…何か騒がしくて決闘が出来なくてすみません」
デュエル

「いやいや、俺は別に気にしていないから。とにかく始めようではないか!!」

申し訳なさそうに言いだす新八に対し、近藤は愉快に返事をする。

そして決闘盤にセットしてあるデッキからカードを5枚ドロし、
デュエル
決闘が始まった。

『デュエル
決闘!!』

新八 LP：8000 手札5枚

近藤 LP：8000 手札5枚

「先攻は俺から生かせてもらおう、俺のターン、ドロー！！」

とゴリラが勢い良くカードをドローすると、素早くモンスターを召喚する。

「『バーサーク・ゴリラ 怒れる類人猿』を召喚！！」

近藤は素早くモンスターを召喚し、フィールド上に暴走じみたゴリラが現れた。

攻撃力2000などレベル4のモンスターで最高レベルに達成する。

「あ、ゴリラがゴリラを召喚したアル」

「神楽ちゃん、いくらなんでもそれは言いすぎだよ！！」

と遊戯が青ざめて言いだす。

近藤は確かにゴリラっぽいからゴリラデッキに似合うかもしれない。

（何、今の？…凄く涙が出てくるんだけど）

と思わず涙が流れそうな近藤だが、右腕で拭いて涙を消す。

「とにかくだ！ 永続魔法『獣の縄張り』を発動！ フィールド上

に表側攻撃表示で存在する獣族モンスターは相手の魔法カードの対象にはされない！ カードを1枚セットしてターンエンド！」（手札3枚）

魔法防御カードを発動してセットしてターンエンドした。とにかく分かっている事は、近藤の使用デッキは獣族である事である。

「なるほど、近藤さんは自分の個性を活かしていますね」
「それ僕の個性は獣って訳えええ！」

さりげない残酷な一言を言いだす新八に対して、近藤は叫びだす。そんな近藤を無視して新八はドローする。

「僕のターン、ドロー！ さっそく良いカードを来たなあ……」

新八は嬉しそうにドローしたカードを見て笑い出す。
にやりとして近藤に言いだす。

「見せてあげます、僕のエースモンスターを……」
「何イ、カードを引いていきなりエースモンスターだとおおお！？」

まさかのエース召喚宣言に近藤は驚きだす。
おそらく相当の強さを持ったモンスターに違いないと思う。

（新八、一気に勝負を決めるつもりか？）

銀時も新八なら地味でも強力なカードを持っていると思っていた。
地味でも弱い奴ばかりじゃないと銀時は信じているからだ。

だが、2人の創造とはまったくの真逆で新八が召喚するカードは…

「行けえ、僕の『デュナミス・ヴァルキリア』！！」

『……は？』

と新八が決闘盤にそれをセツトすると、フィールド上に1体の女天使が姿を現す。

フィールド上に姿を現したのは、翼が生えていて美しい天界の鎧を身に付けた美少女の姿。

胸のしたの部分が露出していて、かなり美女とも言えるモンスターが新八の前に現れた。

その『デュナミス・ヴァルキリア』を見た新八は…

「……（デレエ）／／／」

と蕩けていて嫌らしい顔つきになっている。

正直言って引く。

「ちゅあわいいいー！ー！ー！ー！！／／／ 凄く可愛いよ、僕の『デュナミス・ヴァルキリア』が実態映像で僕の前に現れたよ！」

「……え、あれ？ そ、エースモンスターなの？」

と近藤は啞然としてしまい、さっきまでの警戒心が薄れてしまった。

「そうだよ、この『デュナミス・ヴァルキリア』はメツチャクチャ可愛いし萌もえだよ!!」

「ちよつとまって、それ明らかにオタク発言だよな? 変な眼で女の子を見ている人が言える台詞だよな!？」

近藤は思わず青ざめてツツコミだす。

そんな理由で『デュナミス・ヴァルキリア』をエースカード呼びわけるのは少し可笑しすぎるからである。

「神楽あ…前から思ってたけど、ぱつつあんってマジでむつつりスケベだな」

「まったくアル。だから新一じゃなく新八ネ、何だよ八って？」

銀時も神楽もそれはないと呆れていて、新八を軽蔑する。

以前に、ギャルゲーにはまってオタクに堕ちた事を思い出し新八なら女の子を中心としたデツキを使うのに違いないと言う事を忘れていた。

同時に新八が近藤に決闘を申し込んだ理由も、決闘盤でのゾビットビジョンで美女達の実態映像を近くで眺める為であった。

それを早くしたい為、新八は十代から決闘の挑戦を横取りしたのだ。

「…ま、まあ『デュナミス・ヴァルキリア』は天使族の中でも高い攻撃力を誇るレアカードと謳われて、結構の値段はする」

「確かになあ…でも最近じゃ閻属性版の『ダーク・ヴァルキリア』も存在するし」

遊星も十代も苦笑する。

『デュナミス・ヴァルキリア』は確かに主力級のカードとして注目するが、切り札と呼べるほど強力じゃない。

しかも攻撃力は近藤の『怒れる類人猿』より劣っている。

「さあ、僕の『デュナミス・ヴァルキリア』がその醜いゴリラを倒しますよ？」

「ええ！？ 人のモンスターを醜いつてそれは酷いんじゃないの！？」

「手札より魔法カード『攻撃』封じ、これで『怒れる類人猿』は守備表示となって、『デュナミス・ヴァルキリア』で撃破で決まり！」

勝利するような一方的な決定宣言をする新八。

しかし『攻撃』封じから放たれる魔法の波動は『怒れる類人猿』は受けることなく不発で終わった。

「え、嘘…何でえ！？ どうして僕の魔法カードの効果が『怒れる類人猿』には効かないの！？」

「新八くううん？ 俺、さっき『獣の縄張り』の効果を説明したよね！？ このカードがある限り攻撃表示の獣族モンスターは相手の魔法カードの対象にはならないって！ 忘れちゃったの！！」

いくらなんでもコレはないと青ざめる。

何せ、新八は自分の可愛い女カードしか見ておらず…相手の戦術をまったく見る気はない。

コレが全戦全敗の理由。

そして新八は手札を見て『怒れる類人猿』を倒せるカードがない事に悔やみだす。

「うぬぬぬ…ターンエンド！」（手札4枚）

顔に血管を浮かべながら憎たらしい表情でターンを終了する。

ああああ！！！！」

自分のエースモンスターがやられた事に血涙を流す新八。
その光景に近藤は青ざめて驚く。

「ええええ！？　ちょ、新八君！！　眼から血が流れているんだけど、大丈夫！！」

「酷い！！　あんたなんて事をしてくれたんだ！！　僕の『デユナミス・ヴァルキリア』が無残に破壊されちゃったじゃないかアアアアアア！！」

「いや、ゾビットビジョンだからしょうがないでしょ！！　ええい、『ツイン・ソードモンキー』は自分フィールド上に存在する獣族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、2回攻撃が可能となる！！」

とそのまま双剣の猿は素早く新八に襲い掛かる。

「ダブル・モンキーブレード！！」

「ぎゃああああああああああああああああああ！！」

新八　LP：7800　6700　5200

双剣猿のダイレクトアタックが決まって新八に大ダメージを与えた。
だが近藤の攻撃はコレだけでは終わらない。

「さらにリバースカードオープン！　『緊急同調』きんきゅうどうてうを発動！！　コレで、バトルフェイズ時にシンクロ召喚を行える！！」
「嘘オ！！」

「レベル4の『バーサーク・ゴリラ怒れる類人猿』にレベル3の『ツイン・ソードモンキー』をチューニング!!」

と双剣猿は双剣を重ねると、3つの輪となって暴走ゴリラを包み込む。

そして暴走ゴリラは4つの星と化す。

「男は皆、愛を求めるストーカーよ!!」

そして光の柱が放たれてその中から1体の上級猿が現れた。

「シンクロ召喚、現れよ『猿魔王 ゼーマン』!!」

「て何か変な冥台詞をシンクロ召喚台詞にしちゃったああ!!」

新八は思わずツッコミます。

ちなみに現れたのは猿の魔王である。

魔王の様な雰囲気をした衣装を身に付けて、何やら周りから不のエネルギーを放っている。

攻撃力2500と、近藤のエースモンスターが姿を現した。

「凄い、一気に上級モンスターを召喚した!!」

「しかもバトルフェイズに召喚したから攻撃可能ネ!!」

遊戯は近藤の速効シンクロ召喚に驚き、神楽はダイレクトアタックできると確信した。

猿の猛攻な力で一気に攻めるのは、まさに猿の力。

「『ゼーマン』でダイレクトアタック!! カースド・フレア!!」

と猿魔王はそのまま邪悪なる炎を放って新八に大ダメージを与える。

「うあああああああああああ！！」

新八 LP：5700 3200

一気にライフが半分も失った新八。

近藤はこれほどまでにあっさりと相手に大ダメージを与えた記憶は全然ない。

むしろ新八の弱さによって初めての経験である。

「たくウ、やっぱりこうなっちまったな」

「こうなつたつて、まさか銀時は新八が負けると思ってたのか！？」

「まあな…神楽とお妙に聞いた話じゃ新八の野郎、決闘デュエルを始めてから一勝もしていねえで全戦全敗だよ。そんな奴が、仮にもストーリーカーゴリラとは言え真撰組局長と勤める奴に勝てるとは思えねえよ」

と銀時の予想に驚く遊星。

だが新八の弱さは銀時の予想以上であつた。

新八は相手の戦術をまったく見る気もしないで自分が召喚した美女カードばかりを見ていた。

そんなんじゃ勝てるはずもない。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」（手札2枚）

（まあコレぐらい攻めりゃ新八君も反撃してくるかも知れない。

ここは一応警戒しておくべきだな）

近藤はいくらなんでも新八がそこまで弱いとは思えない。

そして新八のターンが始まる。

「負けられない！ 決闘者としての僕は、地味な存在じゃなく美少女だらけのデュエルモンスターのガールモンスターにモテまくり、幻のレアカード『ブラックマジシャンガール』に選ばれた美少年となるんだ！！」

「ええ~~~~~！！ 何それ、明らかに新八君じゃないでしょそれ！！」

ありえない台詞に近藤は思わず青ざめる。

銀時、神楽は呆れて、遊戯、十代、遊星の3人は新八の暴走についていけない。

ちなみにこの世界の『ブラックマジシャンガール』は幻のレアカードであり、世界でたった10枚しかないと言われるほどオタクなら人気のある激レアカード。

新八がそんなレアカードを持っている訳がなかった。

「僕のターン、ドロー！！」

ドローしたカードは融合である。

これで勝利を確信した新八は素早く発動する。

「『融合』を発動！！ 手札の『心眼の女神』と『堕天使マリー』を融合！！」

「何、ここで融合！？」

まさかの融合に驚く近藤。

そして2体に美女が姿を現し、時空の渦が発生してその中に2体は吸い込まれて融合される。

「寺門通親衛隊隊長 志村新八、ここにありイイイイ！！」

「何その台詞!？」

「『聖女ジャンヌ』を融合召喚!！」

近藤のツツコミを無視するように、フィールド上に1体の聖女が舞い降りた。

聖剣を握り、神々しい鎧を身に付けた美しき女性が新八の前に現れた。

「……て攻撃力2800の上級モンスターがあるじゃん!! さっきの『デュミナス・ヴァルキリア』より強そうなカードを持っているし!!」

「うつせえ!! 美少女はどんなカードでも僕のエース何だよ!!」

さあ、愛しい聖女よ! あの愚かな醜い獣を抹殺せよおお!!」
「新八君が色々暴走しちゃってるんですけどおお!!」

とジャンヌは剣を構えだす。

しかし何処からか新八を見て不安な表情が見られる。

おそらくは新八のモンスターとして召喚されたのが少し嫌であるようだ。

だがとりあえずは猿魔王にそのまま攻撃しようとするが…

「『猿魔王ゼーマン』の効果発動、相手モンスターの攻撃宣言時、自分の手札またはフィールド上のモンスター1体を墓地へ送る事で、相手モンスター1体の攻撃を無効にする! タイム・オブ・ストップ!」

近藤は手札の『アフロバットモンキー』を墓地に送り、猿魔王はそのまま時空を操る力で聖女を新八の場に戻した。

「ちい、だけど近藤さんのそんなモンスターじゃ美しい『聖女ジャ

ンヌ』には届きませんよ！ 『ナノブレイカー』を召喚してターンエンド！！」（手札1枚）

フィールド上にまたもや美女カードを召喚する新八。

攻撃力1600のカードを攻撃表示で召喚するなど、無謀にも程がアル。

攻撃力2500の『ゼーマン』の一撃に返り討ちにされるだけだ。それは美女の前に現れている為、興奮して冷静さを失っている。

そう、新八は本当は弱くはなく、そこそこの実力を持っている。

それでもここまで弱いのは、美女が滅多に現れない為変態オタク素質が無差別に自覚なく暴走しているのである。

「暴走してやがる」

「最悪な方向に行っているネ」

コレは流石にないと、銀時と神楽はもう新八は決闘デュエルをしないほうが良いんじゃないかと思いつく。

相手の戦術を見極めようとしないうその弱さ以前に、新八は暴走している。

「ぱつつぁーん、攻撃力2500の『猿魔王ゼーマン』の前に攻撃力1600の『ナノブレイカー』を攻撃表示に召喚する何ぞ自殺行為以外なんでもねえぞ？」

「それ以前にそのデッキの構築が可笑しすぎるアルよ！」

一応、仲間として心配して声をかける2人だが…

「うつせえよ！！ 主人公らしくねえ天然パーマとデッキどころがカード1枚も持っていないチャイナ娘にだけは言われたくネエ！！」

「一気に場のモンスターを増やしたって事は、近藤のおっさんはア
レを狙うってわけだな」

と十代はこの瞬間に近藤の勝利は決まったと確信する。

「そして装備魔法『団結の力』を『ゼーマン』に装備！！ 自分フ
ィールド上に存在する表側表示のモンスターの数だけ、装備モン
スターの攻撃力・守備力を800ポイントアップする！」

「ゴリラの場にはさつき『スケープ・ゴート』の効果で特殊召喚し
たトークン4体と『猿魔王ゼーマン』……て事は」

「一気に4000ポイントもアップアル！！」

猿魔王ゼーマン	ATK2500	6500	DEF1800	5
800				

「うそお……、攻撃力が6500！？」

まさかの大型パワーに青ざめて叫びだす新八。
この瞬間に勝負は決まった。

「今こそ、その暴走を止めてみせる！ 『ゼーマン』で『ジャンヌ』
を攻撃、カースド・フレア！！」

と猿魔王は先ほどより巨大な邪悪なる炎を放ち、聖女は悲鳴を上げ
ながらその炎に包まれてしまう。

だがどこかしら、新八から解放された事に少し笑いを見せて安楽死
するように消滅した。

「いいやああああああああああああああああああ！！ 僕の聖女がああああああああ！！」

新八 LP：32000

近藤 WINNER

結果的に、近藤の圧勝で終わった。
だが近藤にとって、この勝利は素直に喜べなかった。

（よ…弱すぎると言う問題じゃないんだけどオオオオオ！！ ここまで酷いなんて思えねえよ！ てか何かデッキ構築が女の子ばかりな分バランスがおかしいし、さっきの『ジャンヌ』も嫌がってた気がするんだけどオオオオ！！）

ここまで弱い相手とは思えなかった近藤。
だが新八がここまで弱いのも可笑しすぎる。

そう、何せ新八は己の特性と決闘^{デュエル}に出し切っていないからである。

女性ばかり見ている辞典で、志村新八の個性が活かされない。

つまり、今のデッキじゃ新八の力は発揮できないのだ。

「あのう、新八君：女の子ばかりを集めたデッキよりもっと地味でも強いデッキにしたほうが良いんじゃない？」

「嫌だあああああ！！　僕はデュエリストこのデッキで女の子にモテまくる美少年侍になるんだ、せめて決闘者としては地味になりたくないよオオオオ！！」

「おいイイイイ、それじゃあ地味デキの存在よりメツチャ醜くなるじやねえかあ！！」

「まったくそのとおりです！！」

と近藤がツツコム中、彼の後ろからとてつもない殺気を放っている女性が1人いた。

しかも聞き覚えのある声であり、近藤は勿論、新八も青ざめてその女性のほうを振りむく。

凜としていて、着物を身に付けている可憐なる女性：だがその裏腹にゴリラっぽい凶暴さを持った志村家歴代最凶とも言っても過言ではない。

そのお方こそ、志村新八の姉であり最強の暴君とも言っても過言じゃない人物、志村妙であつた。

まさかのお妙登場に、銀時達は…

「あ、ぱつつあんやべえな？」

と銀時は一言を言いだす。

「え…あの人って新八君のお姉さんだったのね？」
「何か、最初に会った時と違わくねえ？」

遊戯も十代も、今回のお妙の異常な怒りに青ざめている。
最初に出会ったときはお人やかな女性である。

だが今は誰もが恐れるとてつもない憎悪の化身となっている。

遊星ですら、青ざめてだんまりになるほど。

「新ちゃん、まさか貴方がここまで恥ずべし行為をしたなんて思
いませんでしたわ…姉としても恥ずかしいから、少しお仕置きが必
要ですね？」（ゴゴゴゴゴゴ…！
「あわわわ…」

新八はそのお妙の恐怖に青ざめて腰を抜かす。
今ここで自分は姉に拷問処刑を受けられるからだ。

「ちょ、まっってお妙さん！！ 新八君だって男だから攻めて多めに
…」

「貴方が女の子をいやらしく見るような弟になりやがって、志村家
によくも泥を塗ってくれたなこの馬鹿弟オオオオオオオオオオ！！」

ド力力力力力力力力力力力力力力力力！ ドキヤ！ ボクア！
！ ド力ア！

「あああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ！！」
「何で俺までエエエエエエエエエエ！！？」

とお妙の怒りの捌きを受けた新八と巻き込まれた近藤の断末魔が響き渡る。

まあ新八のは自業自得だが、近藤のはせっかく決闘に勝利したのに災難であつた。

銀時と神楽は呆れていて、遊戯、十代、遊星はこの日、お妙だけは怒らせないようにすると強く誓つた。

オリカ登場紹介

獣の縄張り 永続魔法

『自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する獣族モンスターは、相手の魔法カードの対象にはならない』

ツイン・ソードモンキー 闇属性 獣族 ATK1100 DEF
200 チューナー

『自分フィールド上に存在するこのカード以外の獣族モンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、このカードは2回の攻撃ができる』

ID - 8 見た目だけじゃ戦いには勝てない（後書き）

近藤勲

使用デッキ 猿系モンスターを中心とした獣デッキ

とにかく攻撃力の高さだけでなく貫通効果を持ったカードも山のように存在し、さらに一気にパワーを増幅するカードで一気に攻めるパワー戦術を得意とする。

デッキ名『江戸の護り猿達』

主力カード

『猿魔王ゼーマン』

と言う訳で前書きに描いたこの小説のデュエルモンスターのオリジナルルールです。

次回あたりにその必殺カードリストに載っている実際のカードを前書きに載せます。ストライク

ちなみに新八の真のデッキは先になりますが常に決まっています。

それではコレで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1127y/>

銀魂王 - デュエルモンスターズ SD

2011年11月29日23時46分発行